

# 宇宙戦艦ヤマト・天界譚 ～「ヤマト完結編」完結編～【第七稿】

遠野 秋彦

御意見御提案は歓迎します

E-Mail: kirarin@autumn.org

Twitter: @autumn009

Blog: <http://mag.autumn.org/default.modf?s=yamato>

## プロローグ

第 15 輸送補給船護衛艦隊の護衛艦は、輸送船を護衛しつつ土星から地球への帰路についていた。

艦内には安堵感が漂っていた。

外惑星系は、ガミラスの残党の襲撃を受ける可能性があるが、内惑星系まで来ることは無かった。アステロイドベルトの内側は安全と言えた。

古代は相原を呼んだ。

「地球到着は 9 月 5 日午後 3 時頃だ。地球防衛軍司令部に報告しろ」

「了解。報告します。報告するのはそこだけですか？」

「他にどこがある？」

「雪さんにはいいんですか？ 帰ったらすぐ結婚式でしょう？」

「バカ、余計な心配しないで早くしろ」

艦橋に低い笑い声が響いた。

しかし相原はすぐに顔を上げた。

「艦長。申し訳ありません。地球との通信回路が混信しているようで、思うように連絡が取れません」

「緊急回路を使ったらどうだ？」

「それもダメなんです。誰か何か信号を送っているようなんですが」

「相原」

「ハッ」

「貴様それでも宇宙戦士か。誰かが何かとはいったい何と云うことだ。」

解明できないのならいちおう記録しておけ」

「記録ならしております」

「……さすがだな、相原」

艦橋に低い笑い声が響いた。

しかし、相原には笑い事ではなかった。

イスカandalからの通信に似ていたからだ。

あまり知られていないが、スターシャと最も多くの会話を交わしたのは相原だった。通信回線を確立するための技術的なやり取りが多かったからだ。だから、交わした言葉の数だけから言えば、古代よりも森雪よりも多かった。スターシャに相原の名前は覚えられてしまったほどだ。だからこの通信は気になった。だが、スターシャとの会話量が多いからこそ分かった。通信の送り主はスターシャではない。もっと別の誰かだ。

その名をテレサということ、その時の相原はまだ知らなかった。

そして、テレサとの通信を島航海長に独占されるとも。

## 第1章 神界戦争編

南部は目を開いた。

病室のような白い壁の部屋に寝かされていた。

看護師の女が駆け寄った。

「何も問題ありませんか？」

「ここはどこだ？ 俺はどうしたんだ？ もうダメだと医者に宣告された後は、全て悪夢を見ていたような気がする」

「悪夢は終わりです」

「医者は間違ったのか？」

「いいえ」と看護師は言った。「ここは死後の世界です」

「えっ？」南部は目を見開いた。「俺は……死んだのか？」

「はい。医者の見立ては正しく奇跡は起こりませんでした。あなたは息を引き取りました。生死の境を彷徨っている間、あなたは悪夢を見ていたのかもしれませんが。しかし、死という状態が確定した今は悪夢からは解放

されます。あなたに悪夢を見せる老いた肉体はもうありません」

「老いた肉体……、そうだ。身体が若返っている。俺は、今年で 88 歳だったはずだ。なのに、これはまるで 18 歳。ヤマトに乗っていた頃だ」

「人は死ぬと自分が最も輝いていた時代の姿になるといいます」

「ははは。神さまはお見通しという訳か」と南部は自嘲した。「そうさ。南部重工の会長にまで登り詰めた俺も、本当はヤマトに乗っていた頃の方が楽しかった」

「では、現世に思い残すことはありませんね?」

「末娘の孫の顔が見られなかったのは残念だ」

「それなら。もし末娘のお孫さんが実際に産まれたとすれば、時間の問題です。いずれ天国にやってきますから、顔を見られる可能性があります」

「しかし、時間と言っても……」

「あなたには無限の時間があります。もう天国では人は老いないのです」

「なるほど……、一理はあるが……」南部は考え込んだ。「ならば、先立たれた最初の妻には会えるのか? 一緒に生活することはできるのか?」

「あなたの場合、無理だと思った方が良いでしょう」

「なぜだ。孫の顔は見られるのに、なぜ妻はダメなんだ」

「天国に来たら全ての人間関係のしがらみから解放されます。ですから、たとえ肉親でも肉親の縁が切れます。他人と同じです。顔を見るだけなら他人にも許されますが、一緒に住むかどうかは本人次第です。そして、あなたの奥さんは若い愛人に囲まれた暮らしから出てきたことがありません。顔を見るチャンスも無いと思った方が良いでしょう」

「そんな寂しい話が納得できるか」

「どうしても話し相手が欲しい人には、パートナーを付けることが許されています」

「パートナー?」

「人ではありませんが、話し相手になる存在です」

「君は話し相手になってくれないのか?」

「はい、次の死者を迎えねばなりません」

「では話し相手をくれ」

「承知しました」

看護師は部屋を出ると、すぐに小さな箱を持ってきた。

「マジック眼鏡のガネダです」と看護師は箱を開いた。

眼鏡が入っていた。

南部が眼鏡を掛けると眼鏡が喋った。

「やあ、僕はマジック眼鏡のガネダ」

「ガネダ……あまり好きな名前じゃないな。君のことは、メガネ君と呼ぼう」

「つれないよ、相棒。僕はガネダと呼ばれたいんだ」

「では、後のことはガネダに聞いて下さい。私は失礼します」

看護師は部屋をでて行った。

慌てて南部は後を追った。

看護師は別の部屋の扉を開いて中に入ったところだった。

「康雄、あの人は仕事がたくさんあるんだ。追っても無駄だぜ」と眼鏡は言った。

「気安く名前と呼ぶな」

「だったらおまえも気安くメガネ君と呼ぶな。俺にはガネダという名前があるんだ」

「分かったよ。康雄と呼んで良いからメガネ君と呼ばせろ」

「ヤダ」

「じゃあ質問するぞ」と南部は部屋に戻りながら言った。

「なんだよ」

「ここはどこだ？ どんな役割を持った施設なんだ？」

「天界への入国受付だな」

「天界そのものではないのか？」

「強いていれば境界領域だね」

「受付ということは、天国に行くには受付を済ませる必要があるのか？」

「いいや。審査を受けるんだ」

「全ての人間が天国に行けるわけではないのか？」

「そりゃそうだ。生前の行いを審査され、不合格なら地獄行きだ」

「待て。天国の他に地獄もあるのか？」

「そりゃそうさ。良いことがあれば悪いこともある。世の中バランスってことだ」

南部はベッドに腰掛けて考えた。

「いちばん重要な質問をする」

「なんだい？」

「今まで死んだ死者は全員が天国か地獄に行ったのか？」

「僕に確実な答えを期待されても困るけどな。でも、僕が知ってる範囲で言えば、たぶん全員だ」

「今後死ぬ人間も天国か地獄に行くのか？」

「そのはずだ」

「ならば、天国の人口も地獄の人口も青天井で増えていって、いつかはパンクするはずではないのか？」

「良くある質問って奴だね」

「良くあるのか？」

「たいていの死者が感じる疑問だ」

「で、答えは？」

「天国も地獄も無限の広さがあり、死者で一杯になることはない、というのが答えだ」

「無限？ そんなご都合主義的な話があるのか？」

「物理法則に支配された現世ならともかく、ここは物理法則と切り離された天界だからな。何でもあると思えばあるのさ」

「では、若い頃に憧れていた女性が欲しいと思えば、彼女は現れるのか？」

「現れるとも言えるし、現れないとも言える」

「意味が分からないな」

「夢と同じなんだよ。君は彼女が現れた夢を見ることができる。しかし、本物の彼女が来るわけではない」

「では、本物の彼女と偶然街でばったり会うことはあり得るのか？」

「たいていの死者は自分の世界を作り出し、そこから出てこない。しかし、それは絶対のルールではない。出る方法はあるし、出てきた死者が他の死者と交わることはある。つまり、可能性としてはゼロではないが、たいていの場合はあり得ないと思って間違いない」

「なるほど」南部はがっかりした。「では僕も自分が好きなように自分の世界を作り出せる訳か？」

「審査で天国に行ければな」

「というと？」

「審査に落ちて地獄行きになれば、1人1人に応じて作られた懲罰世界に放り込まれる」

「懲罰世界からは永遠に出られないのか？」

「いや。そこで善行を積むことはできるし、女神が慈悲を垂れることもあるという」

「で、審査はどういう基準で行われるんだ？」

「審査委員会がおまえの善行と悪行を全て評価し、どちらが多いかを調べる。黒字ならば天国行きだ」

「せいぜい、善行が多いことを祈るよ」

「審査対策は練った方がいい」

「過去の行いで決まるんだろ？ 対策なんて手遅れじゃないじゃ？」

「そうじゃない。いいことを1つ教えてやる。閻魔大王が審査していた昔ならまだ厳正さはあったが、今はかなり流されやすい合議制で審査されている」

「おいおい。急に就職戦線に立ったフレッシュマンの気持ちになったよ」

「まさに就活に備えろよってことだ」

「ここは本当に死後の世界か？」

「そうだ。死んだに人間はみんな来る」

「信じられない」

「なら今の話は全部忘れろ。忘れて自分の世界に閉じこもれ。審査委員

会が不在審査をしてくれる」

「それはいやだ。元ヤマト乗組員だからかな。目の前にある問題から逃げたくはない」

「なら立ち向かえ」

「そうするか」

「死んでも闘志が残るのか?」

「老いた身体という重しが無い分だけ、今は闘志に直進出来る気がする」

「じゃあ、アドバイスをやろう。ポイントは発言よりも態度だ」

「分かった。頼れるなメガネ君は」

「ガネダだ」

ガネダの説明で、南部は様々なことを知った。

それは審査対策に留まらず、この世界の常識についてもいろいろと教えてくれた。

ここでは基本的にトイレに行かなくて良い。食事也不要。睡眠も要らない。無限に同じ状態が続くのだ。

結婚という概念も無い。

それどころか、男女の違いすらも希薄なものでしかない。

人は肉欲からも解放されているのだ。

しかし、それがその人の煩惱なら、無いはずのそれは現実になる。天界には食べ続けている人も、眠り続ける人もいるという。

南部はガネダと世間話も交わした。

「審査に出席せず、欠席審査を受けて行き先が決定される者も多い」とガネダは言った。「こうして審査を受ける南部は優秀な部類だ」

「お世辞でもありがとう」

「お世辞だと思っておくのは正しい。結局のところ、審査次第でどんな結果もあり得るのだからな。審査を通ってからお礼は言うべきだろう」

「冷めてるんだな」

「当たり前だ。審査に落ちて地獄に墜ちた奴はいくらでもいる」

「じゃあ、メガネ君は、俺が最初のパートナーってわけではないのか？」

「ガネダだ！」

「どうなんだよ」

「ああそうだ。俺は説明役だからな。この世界に慣れた時点でみんな俺は要らなくなる。そうしたら次の死者に与えられてまた説明を繰り返すわけさ」

「今までに何人ぐらいパートナーになった？」

「忘れたよ。ここには時の流れが無いんだ」

「二人や三人ではなさそうだな」

「百人は下るまい」

「覚えていられないはずだ」

審査の場は、薄暗い円形の部屋で、周囲に十数人の仮面の男達が並んでいた。

「南部康雄」とリーダーらしい男が言った。「最終肩書き、南部重工元会長。相違ないか？」

「ありません」と南部は答えた。

「では審査を始める」

南部は身構えた。

おそらく、彼らは南部が抱え込んだ最大の事件、戦艦相模収賄疑惑について集中して質問してくるだろう。南部の経歴に疑問点は少ないが、ここは真相が藪の中だ。何しろ、軍事機密と直結しているから、多くの情報は非公開だ。マスコミは、南部がワイロを贈った黒い財界人として非難を集中したがもちろん違う。

もちろん、南部の理論武装は完璧だった。むしろ、ウソを堂々と主張したマスコミを糾弾できるほどだった。

ところが、南部の緊張はあっさりと肩すかしを食った。

「君は、南部重工入社前は、宇宙戦艦ヤマト乗組員だったな」

「は、はあ。その通りですが。それが何か。公開されている経歴ですの



で、ウソをついたこともありません」

「職種は砲術補佐で第1艦橋勤務。それに間違いはないか？」

「ありません」

「では、艦上層部のやり取りは全て聞いているわけだな？」

「聞いていますが……それがなにか？」

「審査に第1艦橋勤務の意志決定当事者以外が出席するのはこれが初めてなのだ」

「当事者といいますと」

「沖田十三、古代進、島大介、真田志郎などは艦の意志決定に関わる当事者であるが、森雪、南部康雄、太田健二郎、相原義一などは意志決定には深く関わっていない傍観者なのだ」

「つまり、森雪、太田健二郎、相原義一の3名はまだ存命ということですね？」

「いや。そうではない。審査の場に出られず欠席で審査したというだけなのだ」

南部はがっかりした。

「では質問に移る」と審査官が言った。「第2次黒色戦役の際、宇宙戦艦ヤマトは波動カートリッジ弾を複数の巨大移動要塞ゴルバに向けて発射した。間違いはないか？」

「はい。確かに発射しました」

「その結果どうなったかね？」

「連鎖反応で全てのゴルバが崩壊しました」

「しかし、常識で考えるとそれはおかしい。第1次黒色戦役の際、デスラーはデスラー砲をゴルバに撃ったが装甲を貫通できなかった。デスラー砲と波動砲の動作原理は同じだ。威力もほぼ同程度だ。波動砲のエネルギーを更に縮小して詰めた波動カートリッジ弾は更に破壊力が劣る。その波動カートリッジ弾が、たった一隻のゴルバも破壊できなかったデスラー砲に勝る成果を出せるのはおかしいとは思わないかね？」

「思います。理由は分かりませんが、デスラー砲とヤマトの波動砲は完

全に同じではなく、その違いが結果の違いを引き起こしたのだと思います」

「ではその違いとは何だね？」

「分かりません。立場上、波動砲の詳細は知ることができましたが、デスラー砲はガルマン・ガミラスの機密情報で容易には分かりませんでした」

「誰ならその違いが分かると思うかね？」

「真田さんなら分かるかもしれません。ああ、真田さんとはヤマトの元技師長です。ヤマト降りた後は科学局の勤務です」

「地球を占領した黒色星人は、ヤマトの所在を把握することにこだわったという。他の波動砲搭載艦は全て無視してだ。なぜヤマトの所在だけを知りたがったのだ？」

「分かりません。その話は聞いたことがありますが、理由までは分かりません」

「なぜ分からないのだね？」

「黒色の世界は消えてしまったので。地球にいて生き延びた黒色人も、それほど大したことは知っていませんでした」

「君の知っていることは了解した」

「そうだ。もしや、ここには死んだ黒色人もいますか？」

「無論だ」

「彼らに質問したら答えが判るかも知れません」

「既に聞き取りは進行中だ。複数の相手から話を聞いて総合して判断するために、関係者全員から話を聞いているところだ」

「なるほど」と南部は考え込んだ。彼らもバカではないらしい。まあ死者を審査する以上は当然か。

「次の質問はデザリウムに対する波動砲の発射で二重銀河が崩壊してしまった問題だ」と審問官は言った。「あれだけの破局は破格だ。あの破局を予測して波動砲を撃ったのかね？」

「いいえ。波動砲は別名プラネット・キラーと呼ばれていましたが、あくまで惑星をも破壊できる悪魔の兵器ということであり、銀河系を破壊できるほどの威力があるはずありません」

「では、なぜ二重銀河は崩壊して新銀河が誕生したのだね？」

「分かりません」

「数百の星々を従える黒色星団帝国はあれで消えてしまった」

「我々の目的は重核子爆弾のスイッチの破壊であり、あれはデザリウムにありました。デザリウムだけ破壊できればよく、他の星々を吹っ飛ばすことは想定外でした」

「では、なぜ二重銀河は崩壊したのだね？ ワープで脱出する必要があるほど、超光速で伝播する破局はなぜ起こったのだね？」

「分かりません」

「ヤマトの波動砲は、普通の波動砲やデスラー砲とは違う何かを一緒に発射していたのではないのかね？ 砲術補佐の君はそれを知っていたのではないかね？」

「知りません」

「では話を変えよう」

「はい」

「ディンギル戦役の際、ヤマトはウルクのバリアを突破してウルクへの着陸に成功した。なぜ可能になったのかね？」

「リークした波動エネルギーが、バリアを中和してくれたからです」

「しかし、それは偶然に過ぎるのでは無いかね？」

「はい、かなりの偶然です。あの時、波動エネルギーがリークしていなければ、我々は負けていたかもしれません」

「だが、ウルクの波動エネルギー対策は万全だったはずだ。敵は波動エネルギーを使う地球艦隊になることは明らかだったはずだ。それにいくら対策になるとはいえ、都合の良いときにリークするのはあまりにも虫が良すぎる」

「それは……自分にも事情が分かりません」

「もしや、誰かが意図的にリークさせたのではないかね？」

「分かりません」

「そして、リークさせたヤマトの波動エネルギーには別の何かが含まれ

ていたのではないかね?」

「分かりません」

「ヤマトが最終的にアクエリアスの洪水を阻止するために移動するとき、デスラーが救援に来たね?」

「はい。あれは助かりました。ヤマトには戦闘力など残っていませんでしたから」

「しかし、ガルマン・ガミラスは異次元から出現した銀河衝突により、大ピンチ状況だった。助けを必要とする者も多かった。あのとき、君主として臣民の救助に従事すべきだったのではないか。なぜヤマトを助けたのか」

「分かりません」

「ヤマトは最終的にアクエリアスの重水プラントから重水を満載し、波動砲を撃って自沈した」

「はい」

「目的は?」

「ヤマトを水爆として爆発させ、アクエリアスの水による地球の洪水を阻止するためです」

「しかし、波動砲のエネルギー量は水爆の比ではないはずだ。改めて水爆にする意味などあるのかね?」

「それは……」南部は考え込んだ。「機密事項に抵触しますが、ここは既に天国なので言います」

「うむ。良い心がけだ。正直な言葉が聞きたい」

「実は、アクエリアスでヤマトの船体に入れた水は、実は重水ではない……という疑惑があります」

「それはどういうことだね?」

「当時は自分も若く、知識も不十分でした。沖田艦長と古代戦闘班長の決定に異論を差し挟むことなど思いも寄りませんでした。だから、あの時は自然にそういうものだと思って流していました。そもそも、波動エネルギー流入前の地球で生まれ育った自分は、地球を何回も滅ぼせる恐ろしい

兵器として水爆を教えられて育ちました。だからヤマトを水爆にすればアクエリアスの水を防げるという説明を、何となくそのようなものかと思って流していました」

「違うのかね？」

「南部重工の社史を編纂する際、ヤマトの最期が問題になりました。公式資料には重水を積み込んで自爆したとありますが、そうすると奇妙なことがあるのです」

「どこがおかしいのかね？」

「後から徳川太助から聞いた話ですが、ヤマトを振動させるなという指示が出ていたそうです。ショックを与えると水爆が爆発すると」

「その徳川とは、機関員だね？」

「そうです。しかし、水爆は僅かな衝撃どころか、激しい衝撃でも爆発しません。あれを点火するには、原爆か波動砲が必要です。原爆はもともとヤマトに搭載していないし、波動砲はきちんと手順を踏んで発射しなければ発射できません。偶発的に出てしまうような性質のものではないのです。事実としてアクエリアスに接近したとき、ヤマトはかなり振動していましたが爆発しませんでした。機関部に出ていた振動させるなという指示は、爆発するからでは無く、もっと別の意図があった可能性があります」

「振動で波動カートリッジ弾が暴発することはないのかね？ 波動カートリッジ弾なら水爆に点火できるのではないかね？」

「それはありません。もし、波動カートリッジ弾が炸裂すれば最低でもヤマトは大破します。誘爆すれば跡形も無くヤマトが消し飛ぶ可能性すらあります。ですから、通常、信管は抜いてあります。あの時、水爆の点火は波動砲で行うので波動カートリッジ弾には信管をセットしていません」

「それは確実な話なのかね？」

「確実です。砲術関連は自分の管理下にありました」

「つまりどういうことなのかね？」

「アクエリアスでは、何か別のものを積み込んで、それを重水だと偽った可能性があります。そのことを、沖田艦長、古代戦闘班長は知っていた

と思われます。あと真田技師長も異論や疑問を言っていないことから考えて、知っていたと思います」

「では何を積み込んだというのかね？」

「分かりません。ヤマトに関しては機密のベールが厚くて、なかなか真相に到達できません」

「ヤマトは南部重工で建造されたはずだ」

「建造しただけです。運用の詳細は地球防衛軍が行っていて、情報は地球防衛軍の機密に属します。それに建造されたのは自分が入社する前です」

「他に何かあるかね？」

「ヤマトは形状を留めたままアクエリアスの海に沈んでいました。もし、本当にヤマトを水爆として炸裂させたのなら、あれだけの形が残るはずがありません」

「それも、積み込んだのが重水ではないと考える傍証かね？」

「そうです」

「では別の質問をしよう」

「为什么呢？」

「なぜ沖田は引き金を引いたのだ。遠隔操作でヤマトを爆破することは容易だったはずだ」

「そこもヤマトの最期に関する疑問点の1つです」

「仮説も無いのかね？」

「沖田艦長は死期が迫っていたので、せめてヤマトで死にたいと思ったから……という説が有力ですが真相は藪の中です」

「なぜだ？」

「生きていた沖田艦長そのものが、軍事機密だからです。元ヤマト乗組員の我々にすら生存は知らされていませんでした」

「ヤマトが自沈した後で、君たちは移乗した駆逐艦でアクエリアスに着陸し、海岸で海を見た。そうだね？」

「はい。アクエリアスの海岸でヤマトが沈んだ海を見ました」

「なぜだね？」

「なぜ……といわれましても。全員がヤマトと離れがたく、沈んだ場所をその目で見たかったのです」

「沈没箇所は陸地からは遠く、駆逐艦に乗ったまま上から見下ろした方が良かったのではないかね？」

南部は考え込んだ。この質問には何の意味があるのだろうか。

しかし、分からなかったので、南部は思った通りを説明した。

「みんな狭い駆逐艦の展望室から解放されて他人に邪魔されず海を見たかったのだと思います。誰かがアクエリアスの着陸を……と依頼すると誰も反対しませんでした」

「誰が言ったのかね？」

「今となっては覚えていません」

「その時に何か気付いたことがあるかね？」

「質問の意図が良く分かりません」

「誰か不審な行動を取った者はいないかね？」

「我々はみんな海に走って青春を謳歌していました。それはそれで爽快でした。俺達はやり遂げたという満足感がありました。それから何かが終わったという喪失感も」

「だから海に向かって走ったのかね？」

「そうです」

「走っている間に他人のことは？」

「一緒に走っている仲間は意識しましたが、一緒に走らない人については注意すら払っていませんでした」

「では秘密を知っていたと思われる古代はその後どうしたのだね？」

「森さんと結婚しました」

「君との付き合いは？」

「それほど深い付き合いはありませんが、時々会っていました」

「その際、何か不審な行動は？」

「難しい質問です」

「なぜ難しいのかね？」

「古代さんは、サーシャに気があったと思います。ああ、スターシャさんと古代守さんの子供のサーシャさんです」

「浮気……ということかな？」

「そうです」

「それが難しい質問かね？」

「浮気ですから」

「しかし、それは結婚前の話だ。重要では無い。それに、この場で意味のある話でもない」

「ならば、特に他に言うことはありません」

「最後の質問だ」

「どうぞ」

「ヤマトがアクエリアスで自沈する直前の第1艦橋の音声がある。このデータは天界から審査用に特別に取得したもので、おそらく人間達は持っていないものだ。これを聞いた上での質問がある。まずは聞いてくれ」

ノイズの多い音はその場に流れた。

「沖田艦長」と女性の声が出た。あの時、ヤマトに残っていたのは沖田艦長だけだったはずだ。他の女性の声が聞こえるのはおかしい。しかも、聞き覚えが無い。

「クイーン・オブ・アクエリアス……」沖田の声はつぶやいた。こちらは確かに沖田の声だった。

そして思い出した。確かに女性の方はクイーン・オブ・アクエリアスの声だ。

「沖田艦長」とクイーン・オブ・アクエリアスの声は重ねて言った。「あなたはこれから我々の母なる星に引き金を引こうとしています」

沖田は何も言わなかった。

「なぜ引き金を引くのですか？」

沖田は答えた。「アクエリアスを破壊する意図は無い。ヤマトは自沈するだけだ。ただ、アクエリアスの水が地球に洪水をもたらす災害を避けたいだけなのだ」



「ならば……」とクイーン・オブ・アクエリアスは言った。「沖田艦長、あなたが直々に引き金を引く必要は無いはず。遠隔操作で爆破することはたやすいはず」

「私にはなすべきことがあります」

「沖田艦長、あなたは沖田艦長ではありませんね？」

「私が沖田十三。ヤマト艦長です」

「いいえ、違います。普通の人間ならば避けられる死は避けるもの。避けられる死をあえて避けないあなたは何者なのですか？」

「他人のために自らの命を犠牲にすることは人として崇高な振る舞いなのです」

「いいえ。命を軽々しく投げ出すことは間違った行為です。それが誰のためであろうと。何より、人の素直なありように反します」

「しかし、わしは地球を救いたい。だから波動砲の引き金を引く」

「沖田艦長、あなたの真意がそこには分かっていません。あなたは何者なのですか？」

「真意、真意ですと？」

「そうです。真意です」

「では1つだけお話ししましょう」と沖田の声は言った。「宇宙戦艦ヤマトの物語は、ここで自沈して完結します。しかし、当初バックグラウンドの流れていた物語はサイユウキです。イスカンダルという名のテンジクに、放射能除去装置という名のアリガタイオキョウを取りに行く物語です」

「何を仰りたいのです」

「もし、あなたが強制的に物語の引き延ばしを行うとすれば、そこに疑似サイユウキの世界が剥き出しになり、サンゾーホーシとソングクーとチョハッカイとサゴジョがテンジクを目指します」沖田は言った。

「仰る意味が分かりません」

「あなたは私の真意を問うたのでそれを答えたまでのこと」と沖田は少し愉快そうに言った。

「あなたはいったい何者なのですか？」

「宇宙戦艦ヤマト艦長、沖田十三……。またの名を……」

「またの名を？」

沖田は「発射！」と叫んで波動砲の引き金を引く音が聞こえた。

そこで音声の再生は停止した。

「さて」と審査官が言った。「我々はこの会話の意味が知りたい」

「なぜクイーン・オブ・アクエリアスが第1艦橋にいて、沖田艦長と話をしていたのか、理由は分かりません」

「その点は問題ではない」と審査官は言った。

「問題ではない？ では何が問題ですか？」南部は聞き返した」

「サイユウキとは何だ？」

「西遊記ですか？ 昔の中国のおとぎ話です。三蔵法師が孫悟空などの仲間を連れて天竺にお経を取りに行く話です」

「そんなことは分かっている」

「では何が分からないのですか？」

「宇宙戦艦ヤマトの全生涯のどこにもその西遊記との関わりが存在しない」

「確かにその通りです。ヤマトが天竺を目指したことはないし、目指す人が乗り込んだこともありません」

「ならば沖田艦長が言っているサイユウキとは何かの符牒であるはずだ。テンジクもアリガタイオキョウもソンゴクも何かの符牒であるはずだ。しかし、それを明らかにする資料は今のところ見つかっていない」

「ならば、残念ながら自分にも分からないとお答えするしかありません。自分は艦長が扱うレベルの機密情報にはタッチする立場にありませんでした。あくまで第1艦橋にいたというだけで、役職は砲術の補佐です」

「では質問する。サイユウキのような符牒をディンギル戦役当時の地球防衛軍が使用していた可能性はあると思うかね？」

「自分が知る範囲では無いと思います。機密情報は、符牒を使うのではなく、暗号化された秘匿回線で伝達されるのが普通でした」

「ほう。たとえば実例はあるかね？」

「たとえば、第2次黒色戦役時に、イカルスからの通信は特に符牒は使用せず、暗号回線経由の平文で伝達されていました」

「ヤマトはここにある、と伝えた有名な通信かね?」

「そうです。我々は容易に受信しましたが、占領軍側は受信できていませんでした。いえ、正確には受信できていたと思いますが、暗号が破れなかったのだと思います」

「では、サイユウキが地球防衛軍の符牒では無いとすると、一体誰が何を伝えるために定めた符丁だと思うかね?」

「分かりません。少なくとも沖田艦長は地球防衛軍の軍人でした。他の組織の常識に沿って行動するとは思えません」

「ここで喋っている男が、沖田十三本人ではないという可能性は?」

「声がそっくりです。沖田艦長本人だと思います」

「声はいくらでも合成できる。しかも、別に名前があることを臭わせている。それを踏まえても本人と断定できるかね?」

「いえ。100%確実というわけではありません」

「では次にテンジクについても若干質問したい」

「はい」

「テンジクとは何だと思うかね?」

「天竺……インドのことだとは思いますが……。もっと他の意味を持たせているのかも知れません」

「どんな意味だね?」

「分かりません」

「たとえば、天の軸というような意味とは考えられるかね?」

「天の軸? 天の軸とは何でしょう? 天の北極と天の南極をつないだ線でしょうか?」

「では、これで審査を終わる。協議に移るので隣室で待機されたい」

南部は頭を下げ、部屋を出た。

「いや、これは参ったね」とガネダが言った。

「メガネ君、なぜずっと黙っていた」

「ガネダだ！ それより、審査会場では当事者以外は発言できないんだ」

「そうか。しかし、おまえのアドバイス1つも役に立ってないぞ。戦艦相模収賄疑惑の話なんて1つも出なかったじゃないか」

「こっちもビックリだよ。普通は、本人の経歴を証言と証拠物件で検討する場なのだけどね。あんなに宇宙戦艦ヤマトの話をされるとは前代未聞だよ」

「普段は無いことなのか？」

「あるわけないよ。あったらアドバイスしてる」

「なぜヤマトのことを聞かれたんだ？」

「こっちが知りたいよ。このガネダのアドバイザー人生の最大の汚点だ」

「それで審査の結果はどう出ると思う？」

「分からないよ。こんな審査会は初めてなんだ。過去の経験が全部役に立たないよ」

「残念だ。もっと経験豊富なアドバイザーなら参考意見を聞いたのかな？」

「無理だと思うよ。こんな審査会は聞いたことすらない」

「しかし、俺は特別な人間だ……とは思いたくない」

「審査会の内容を聞く限り、特別だったのは沖田とかいう奴と古代とかいう奴だろう。おまえは、その特別な2人と同じ場所にいた。それだけだ」

「嬉しいような哀しいような。元南部重工の会長は特別だとは言えないのか？」

「何ら特別じゃ無いね。人間世界の肩書きなんて、ここで通用すると思ふなよ。性別や家族どころか、肩書きからも解放されるのが天界だ」

そこでガネダは話題を変えた。

「ところで、ヤマトってそんなに謎が多いのかい？」

「そうだな。最初はそうでもなかったんだが、第1次黒色戦役の後で具体的な脅威が出てきたもので、地球防衛の切り札として機密のベールの向こうに行ってしまった。第2次黒色戦役の時は、イカルスに隠してあるとはこっちも知らなかったぐらいだ。それが成功して黒色を撃退したのだから、その後は機密のベールが厚くなる一方だ」

「でも、ヤマトに乗っていたんだらう？」

「乗っていても見える範囲は限られる」

「おまえの会社でも波動砲装備の戦艦を山ほど建造しているんだらう？  
それらとヤマトは違うのかい？」

「本質的に違わない……と最初は思っていたよ。工程を簡素化して、ヤマトの航海の結果をフィードバックしたのが量産された戦艦群だと。でも後から気付いた。それでも何かが違うんだよ」

「最後に地球を救うのはヤマトってことか？」

「そういう象徴的な意味ではなく、何かが機能的に違っているんだ」

「それはなんだい？」

「それが分かれば苦労はしない……というのが技術者達の見解だ」

「おまえの見解ですらないのか。康雄、おまえは使えないな。使えないから審査不合格じゃないか？」

そのときドアが開いた。

審査官の1人がこう告げた。

「審査は合格だ。君には天国での居住が許される」

「良かった。地獄送りではないのですね」

「ただし、あなたは宇宙戦艦ヤマトの第1艦橋に勤務するという非常に希な経験をしている。天界の歴史研究局からの協力要請があれば、それに応えてやって欲しい」

「それは、協力と引き替えに審査を合格にしてやる……という意味ですか？」

「察しが早くて助かる。君の経歴で、戦艦相模収賄疑惑が問題になった。もちろん、あの事件で君は無罪だ。しかし、事件後の対応に不適切な言動が多く、そこが問題にされた。しかし、善行も多いので、微妙な合否ラインに乗った。最終的に意見は割れた。しかし、歴史研究に協力するという条件で君は審査合格で全員が合意した」

「分かりました」と南部は肩をすくめた。

ゲートを抜けると別天地だった。

様々な時代、様々な装束の男女が街を歩いている。ガミラス人やガトランティス人すらいた。

「かなり賑やかだな」

「これで自分の世界に閉じこもった連中は出てきていないんだぜ」とガネダが説明した。「社会的に振る舞うことが染みついた者達だけがここにいる」

「そうか。俺もそうなんだな。人の中にいないと落ち着かない」

「だろうな」

その時号外を配っている女が見えた。

「この世界にも新聞があるのか？」

「ここでは全てのしがらみから解放され自由になれるが、振る舞いをしがらみだと思っておらず好きにやっていることなら何でも可能だ。新聞も号外もありだ」

南部は歩いて行って、1枚もらった。

しかし、見出しを見て南部はギョッとした。

『宇宙戦艦ヤマト再び現る。神族でもとびきりの巨漢、ファットマン男爵を撃破』

不鮮明な写真を見ると、確かに見覚えのある宇宙戦艦ヤマトが、艦首をギリシャ神話の神のように見える巨人の腹にめり込ませていた。巨人は苦悶の表情になっていた。

南部は慌てて引き返した。

号外を配っている女にそれを突きつけて聞いた。

「宇宙戦艦ヤマトってどういうことだ？ この世界にはヤマトがあるのか？」

「お客さん、ヤマトに興味があるんだね！」と号外配りの女は言った。「でも、悪いことは言わない。天界の秩序に叛逆するヤマトには手を出さない方がいいよ」

「しかし、あんたは報道してる」

「報道はまた別さ」

「俺はこの目でまたヤマトを見たい。どこに行けばこのヤマトが見られる。ファットマン男爵とやらの居城か?」

「現在の居所は良く分からない」

「誰なら知っている?」

「ハーロックなら」

「ハーロックだと?」

「レージ酒場に言って、そこでミルクを頼んで見ろ。彼に会える」

「待て。酒場と言ったら酒だろう。ミルクなんて頼めるか」

「バカだな。ミルクは真の意図を秘匿する符牒だよ、符牒」

「は?」

「それとも本当に酒が飲みたいのかい?」

「い、いや……。ヤマトに会いたい」

「ならばミルクを頼め」

女は南部から離れて号外配りを再開した。

南部はガネダに質問した。

「レージ酒場は知っているか?」

「ああ、その先だ」ガネダはよく知っていた。

店に入ると内部は西部劇風だった。

ガンマン風の男達が飲んだくれていた。

南部はカウンターに直行してマスターに「ミルクをくれ」と言った。

その瞬間に大笑いが巻き起こった。

「酒場に来てミルクだとよ。ママのおっぱいが恋しいのかよ」

いきなり南部は頭から酒を掛けられた。

南部は、酔客に絡まれるのはあまり慣れていなかった。南部重工元会長が行く店には、礼節をわきまえない酔客など滅多にはいないのだ。しかし、地球防衛軍時代まで遡れば話は別だ。酒を飲んで暴れる奴等は日常茶飯だった。本当に若い頃に戻ったみたいだな。そう思って南部は身構えた。

数分後には絡んできた酔客は全員床に伸びていた。

「お客さん」とカップに入ったミルクを出しながらマスターが言った。

「なんだい？」

「ここに来る客は、酒を頭から掛けられると、笑ってヘラヘラとワンピースのシャンクスを気取る人達と、ハーロックか謎の美女の救出を待つ人達ばかりだ。自分でのしちゃうのは珍しいね」

「しまった」と南部は青くなった。ここには、ハーロックと会うために来たはずだった。

「でもね、ハーロックは来ませんよ」

「なぜだい？」

「残党がハーロックを蘇らせたとかで、ハーロックの魂は現世に戻ってしまいましたよ」

「ハーロックに会えないとしたら、宇宙戦艦ヤマトの居場所を知っているのは他に誰がいる？」

その瞬間に、南部は再び酒を頭から掛けられた。

不味い安酒だ。

のしたはずの酔客がピンピンしてまた南部に絡んできていた。

「どういうことだ？」

「ここは天界。誰も死なない。最初から死んでるから。エンドレスでおまえをいたぶれるって寸法だ」

「ならば条件は対等だろう」

「それが対等じゃないんだな。人数が違う」

南部は多人数から同時に攻撃された。

「分かってないな」と南部は全ての相手を軽くあしらった。「元プロの軍人と素人じゃ天と地も差が……」

南部はいきなり足を掴まれて転倒した。

「なに？」

足元の床が開いていて、そこから手が伸びていた。

床下に酒蔵があり、常連はそこを知っていたらしい。

思いも寄らぬ場所から伸びてきた手には、一瞬だけ南部の反応が遅れた。



南部は床に押さえつけられて殴られた。

「安心しろ、死にはしない。もう死んでるんだからな。だから無限に殴れる。天界の矛盾って奴だな」

南部は一発殴られた。

「やめろー!」とガネダが叫んだ。「眼鏡が割れる! 顔は殴らないでくれ!」

「ガイドを身につけてやがる」酔客の1人が叫んだ。

「新入りかよ」

酔客はドッと笑った。

「康雄ー!」とガネダは叫んだが無力だった。

眼鏡が取り上げられた。

「アドバイスくれる相手もこれでいないぜ」と酔客が言った。「絶望しながら無限に終わらない暴力の快樂の生け贄になれよ」

万事休すか、と南部は覚悟を決めた。

その時、酒場のドアが開いた。

「そのへんにしておけ」

女の声だった。

そう言ったのはフードで顔を隠した少女だった。

透けて見えそうな場違いなヒラヒラした服を着て、平然と酒場に入ってきた。

「へへへ、カモが増えたぜ」と酔客達は涎を垂らして見せた。

「やめておけ。このジャッジメント・ソードに触れると強制地獄送りだ」と少女が刀を抜いて見せた。刀身が青く光っていた。「強制地獄送りを逃れられるのは神族だけだ」

ざっと酔客が引いた。

「やばいぞ」

「ギルティ・プリンセスだ」

「本物だぞ」

「手を出すな、絶対に」

少女は刀を鞘に収めると、南部の前まで歩いてきた。

「あ、ありがとう。助かった」南部は礼を言って立ち上がった。「自分は南部康雄」

「本名を名乗っても仕方があるまい。人は私をギルティ・プリンセス・オブ・アクエリアスと呼ぶ。ギルと呼んでくれ」

ギルは酔客の1人が持ったままの眼鏡を取り上げると南部に返した。

「やっと戻れたよ、良かった良かった」とガネダがホッとした声を上げた。

「ここはやばい。外に出よう」南部はガネダをかけたまま、ギルの手を引いて外に出ようとした。

「おっと、君も気をつけたまえよ。ジャッジメント・ソードに触れれば君も……」

慌てて南部は手を引っ込めた。

店の外に出ると、ギルは言った。

「君は自分が何をしたのか理解しているか？」

「薄々は」と南部は答えた。

「おいっ！ 勝手に話を進めるな！」とガネダが叫んだ。「康雄は何をしていていうんだ」

「つまり。号外配りもグルだってことだ」南部は答えた。

「その通りだ、メガネ君」とギルは言った。

「メガネ君っていうな。ガネダだ」

「メガネ君、レージ酒場は、何か重要な情報が得られる特別な場所に見せかけて、実は天界の矛盾による暴力を振るう場所だったのだ」ギルは更に言った。

「なんてこった。レージ酒場の場所を教えたのは逆効果だったのか」ガネダは悲鳴を上げた。

「さて」とギルは南部に向き直った。「私は天界のお尋ね者だ。君の選択肢は2つある。これからやってくる神兵に対して忠実に振る舞い、私を突き出すか。それとも私の味方になるか。どちらを選ぶのかは君次第だ」

「3つ質問がある」

「答えられるものなら答えよう。ただしその3つで打ち止めだ」

「第1の質問。君の罪状とは何だ？」

「私は天界の矛盾がどうしても気になった。世界の真実が知りたいのだ。だが、それを願うのは天界の罪だった」

「つまり、レージ酒場で行われるような暴力行為を納得しない……と理解して良いのだね？」

「そうだ。全てのしがらみから解放された天界であるはずだ。なのに、暴力で拘束することができてしまい、しかも永遠に続けられるのはおかしい」

「分かった。第2の質問だ。なぜタイミング良く踏み込んで来られたのだ？」

「それは偶然としか言いようがない。号外配りの女の態度がおかしかったので、レージ酒場を覗いたら君がいた。それだけだ」

「では第3の質問だ」

「聞こう」

「宇宙戦艦ヤマトが今どこにいるか、知らないか？」

「聞いてどうする」

「再会したい」

「昔会ったことがあるような言い方だな」

「元乗組員だ。砲術補佐だった」

「ならば答えよう。宇宙戦艦ヤマトは、現在私の騎士だ。私に同行すれば宇宙戦艦ヤマトに会える」

「では決まった」南部はうなずいた。「君に付いていく」

「天界の犯罪者になるぞ」

「この世界は何かがおかしい。自分にとって、それを解き明かす方が重要だ」

「いい答えだ」

「俺はヤダよ！」とガネダが叫んだ。「犯罪者には付いていけない！」

「分かった」と南部は眼鏡を外した。「ここでお別れだ」

「達者で暮らせよ」とガネダが叫んだ。

「ああ」

「じゃあ意識だけ飛ばす。眼鏡は持って行けよ。じゃあな」

「メガネ君!」

返事は無かった。

「ガネダ!」

やはり返事は無かった。

南部は眼鏡をかけ直した。

その時、レージ酒場の酔客の1人が言った。

「待ちなよ」

「まだ何か用か?」とギルが振り返った。

「そういうときは、君が気に入ったらこの船に乗れ、っていうもんだぜ」

「悪いが、そういう趣味はない。どれほどヤマトを気に入っても、ヤマトが許した者以外は乗れないと思うべきだ」

「シャレの分からない姫さまだな」

「それよりも南部」とギルは言った。「ヤマトと合流する前に神兵と一合戦は避けられないようだな」

「生身の戦闘にはあまり慣れていないが」

「ともかく、これを使え」とギルは銃を南部に投げた。

「これは、コスモガン!」

「ヤマトの倉庫にあった銃だ。おまえに使いこなせるか?」

「これならバッチリだ」

南部とギルは数分間の撃ち合いで数名の神兵を撃退した。

「増援を連れて戻る前に退散しよう」とギルは言った。「ここで撃ち合いすることは本意ではない」

ギルは乗り物と呼び寄せた。

白馬と、黒虎だった。

ギルは白馬にまたがった。

「悪いな、ゼロは乗り手を選ぶんだ」

白馬はゼロという名前らしかった。

南部は黒虎にまたがった。

「なんだ、おまえは南部か」と黒虎は言った。

「南部じゃだめなのか？」

「本当は、加藤か山本がいい」

「おまえ、ブラック・タイガーの化身か」

「いかにも」

白馬と黒虎は空中を飛翔してひた走った。

そして町外れの荒れ地に着地した。

「ここでヤマトとの合流を待ち合わせている」とギルは言った。「約束の時間まで、少し間がある。休んでおけ」

ギルは笛を取り出して吹き始めた。

「ギル、質問していいか？」

笛を吹くことを中止してギルは返事をした。「ダメだ。質問は 3 個まで、既に 3 個質問はした」

南部は寝そべっている黒虎に声を掛けた。「君なら知っているのではないかな」

「なんだ？」

「なぜヤマトはギルの騎士になったんだ？」

「ああ、そんなことか。それなら自分でも経緯は知っている」

「どんな経緯だ？」

「宇宙戦艦ヤマトは、パートナーになる異性が欲しかった。自分だけのプリンセスが欲しかった。しかし、誰もパートナーには名乗り出なかった。たった 1 人だけヤマトを受け入れたのはギルだった。そういうことだ」

「ヤマトのような英雄艦のパートナーになりたがる者がいない？ なぜだ！」

「ヤマトの射精は波動砲の発射だ。あれを食らって生き延びられる女などいない」

「まさか」

「ギルは自分が消え去る未来と引き替えに、ヤマトを自らの騎士とした」

「そんなことが許されるのか?」

「天界の法律はそれを許さないが、罪人のギルは法律を守る気が無い」

「いや待て」と南部はいった。「ここは天国だ。住民はみんな既に死んでいる筈だ。死んだ人間がもう1回死ぬのか?」

「南部よ。おまえはまた別の天界の矛盾に突き当たったな」

「どういうことだ?」

「もちろん、死んだ人間は既に死んでいる以上それ以上死ぬことはない。神々が死んだ人間に相当するのかどうかまでは知らないが、結果は同じだ。死んだ人間であっても、神々であっても、消滅という現象が起きる場合がある。つまり、2回目の死だ。消滅した人間も神も戻って来ない。完全に失われる状態だ」

「もしや、彼らが行く別の天国があるのでは?」

「そんなものは無い。あると言う者はいないし、存在を確認した者もない。たまに可能性としてそれを論じる者はいるが、確実なものは何も無い」

「まさか。それじゃ俺も消える可能性があるのか?」

「常識的な方法では消えない。殴られたり、ナイフで刺されたり、刀で切られたり、銃で撃たれたり、爆発に巻き込まれたり、そういう現象で死者が消えたりはしない。ギルが持つジャッジメント・ソードは天界最強クラスの武器だが、それでも効能は地獄に落とすだけだ。存在を消すわけではない」

「ではどうすれば人が消えるのだ?」

「原因が良く分からないケースも多くあるし、俺の知らないケースもある」

「知っているケースもあるのか?」

「原因がはっきり分かっているケースは2つある」

「なんだ?」

「1つは、クイーン・オブ・アクエリアスの逆鱗に触れたとき」

「もう1つは?」

「ヤマトの波動砲に撃たれたときだ」

「波動砲に撃たれたときか?」

「いや、ヤマトの波動砲に撃たれたときだ」

「ヤマト以外の波動砲に撃たれても消えないというのか?」

「そうだ。実はヤマトの他に天界をさすらう宇宙船はいくつかあって、その1つは2代目デスラー艦だ。デスラー砲も波動砲の一種だが、あれには死者を消す力はなかった。あくまでヤマトの波動砲だけだ」

「待て待て」と南部は言った。「今重要なことを言ったぞ」

「なんだ?」

「ヤマトの波動砲は波動砲ではない。もっと正確に言えば、波動エネルギー以外の何かも発射していることになる。そして、それは他の波動砲からは出ていないものだ」

「物わかりが良すぎるな。なぜだ」

「同じ話を入国審査官から言われた。だから2回目なんだ」

「なんだって?」黒虎がむっくり起き上がった。「奴等は何かおかしくなかったか?」

「おかしかった。自分の経歴よりもヤマトの話ばかり聞いたがった」

「なるほど。彼らはヤマトを脅威だと思っているから、何でも話を聞いたかったのだろう」

「ヤマトは脅威か……。今、ヤマトは誰が動かしているんだ?」

「誰も乗っていない」

「誰もいないのに動いているのか?」

「ヤマトは魂があるから死んで天界に来た。自らの魂があるから、自分で自分を動かせる」

「おまえはどうなんだ」

「加藤に愛された愛機だから、一機だけ魂を得た。ブラック・タイガーの中で、このような姿になれたのは俺だけだ」

「もう戦闘機の姿には戻れないのか?」

「そんなことはない。俺は三段変形するのだ。ランドモードの黒虎。フライトモードの宇宙戦闘機。そして、サブマリンモードのエビ形態だ」

「エビ?」

「何がおかしい。ブラック・タイガーとはエビの一種の名前なのだ。本来は」

「楽しそうな話ね。私も混ぜてよ」と白馬がやってきた。

「君も喋るのか」

「私は古代進の愛機だったコスモゼロの化身」

「君も戦闘機に変形するのか?」

「ええ。必要とあれば」

「もしや、サブマリンモードもあるのかい?」

「あります。その時はスーパーナインナインとお呼び下さい」

「エビではないんだね?」

「はい」

「潜水艦らしい姿なんだね?」

「いえ。こういう姿になります」

白馬は水着の美女に変化なった。

「これはいいな」と南部はうなずいた。「黒虎よりいい」

「なんだとっ!」と黒虎が牙を剥いた。

白馬は馬の姿に戻ってしまった。

「しかし、水着姿の時の名前がなぜスーパーナインナインなんだ?」

「バストが 99センチの巨乳だからだよ」と黒虎が言った。

「だが、なぜ黒虎は人になれない」

「かつて古代進はコスモゼロの機体の曲線を見事な白馬か女体のようだと言った。しかし、加藤はブラック・タイガーを精悍な虎のようだと言った。その差だな」

「なるほど。あの二人ならそう言いそうだ。古代の方が、色気があったよ」

そこに笛を持ったギルが来た。



「笛にも飽きた。会話の仲間に入れろ」

「もう質問には答えないのでは？」南部は質問した。

「気が変わった。暇つぶしに答えてやらないこともない」

「では教えてくれ。君とヤマトはどうやって出会ったんだ？」

「それは気が乗らぬ」

「では、どんな話題なら良いのでしょうか？」

「南部、おまえの話をしろ」

「自分の人生など面白くないですよ」

「いいからいえ。おまえとヤマトとの出会いだ」

「宇宙戦士訓練学校を繰り上げ卒業して、そのまま辞令をもらって乗っただけ……。つまらないでしょ？」

「どんな辞令だ」

「砲術補佐。第1艦橋勤務を命ずって」

「その時どう思った」

「俺なら、戦闘班長になれると思ってましたが、実際には戦闘班長の下に付く戦闘班のナンバー2。南部重工の御曹司で成績も優秀な俺がなぜナンバー2かって思いましたよ、当時はね。子供だから」

「戦闘班長になったのは、確か古代進？」

「そう。古代さんですよ。その古代さんというのがまたメチャクチャな男でね。大胆だか繊細だか分からないし、肉親をガミラスに殺されてガミラスが出てくるとすぐ戦いたがる男でね。俺がやった方がずっとマシと思っていましたよ」

「堂々とそのことは主張したのか？」

「いいえ。言う前に分かってしまったんですよ」

「何がだ？」

「戦闘班長になるってことは、波動砲の引き金を引くってことです。でも、世界を1つ宇宙から消し去る兵器を撃つのは普通の神経ではできません。古代さんがいるから、俺は撃たなくて済んだんです」

「戦闘班長になっていれば君が撃つたのだな？」

「戦闘班長になっていなくても、万一古代が戦死したら、次席の自分が撃つ状況はありました。たとえば、ガミラス本土決戦時は、あいつは主砲塔に行って直接射撃の指揮を執ってましたから、連絡不能になった時はヒヤッとしましたよ。もしも、古代さんが戦死していたら、自分が撃たねばなりません」

「では君は、波動砲も撃てないビビリ君ということか？」ギルが見下すように言った。

「否定はしません。否定しないのが大人になるってことなのでしょう」

「間もなくここにヤマトが来る。しかし、古代進はいない」とギルは言った。「どうしてもおまえが波動砲を撃たねばならない場面があるかも知れない。その時どうする？」

「撃てます」

「自分がビビリ君だと認めたばかりではないか」

「南部重工の会長場に就任したとき、自分の上には誰もいなかったのです。つまり古代さんと同じ立場に立ったのです。そして、1つの世界を破壊するのに等しい決断を幾度も迫られました。最後まで決断して良いかビビリまくっていましたが、それでも決断しました。今と同じ事です。撃って良いのか最後まで迷ってビビリまくるでしょう。でも撃てます。単に自分が罪を背負って地獄に墜ちるだけで何かの大きな問題が解決できるのであれば」

「良い人生を送って死んだようだな」急にギルの表情が柔らかくなった。

「失敗も多いし、後悔も多いですよ」

「失敗が人を成長させるのだ」

その時、南部はハッとした。

ギルは若い女に見える。しかし、若く見えるのは南部も同じ事だ。南部の人生経験と同じ厚みをギルも持っている。この世界では、外見の若さは、精神の若さを意味しない。

「なるほど。良く分かった。詳しい話はその気になったときでいい」と南部は立ち上がった。「それに、まだ君にどこまで協力するか決めていない。

しかし、君の心は良く分かった」

「私の心が分かるというのか？」ギルは半分揶揄するように、半分納得するように言った。

「分かるさ。君も失敗は多いし、後悔も多い人生を歩いてきた。そうだろう？」

「そんなことは」とギルは肩をすくめた。「この姿を見れば誰でも分かる。失敗したからこそ今はお尋ね者だ」

その時空が暗くなった。

巨大な物体が空から降下してきて、空を覆い尽くしたのだ。

南部は上を見上げた。

赤い巨体が見えた。

「やっとヤマトが来た。1時間遅れた」とギルが見上げた。

「確かにヤマトだ……」南部は呟いた。「これはたまげた」

「神軍が討伐に来る可能性がある。急いで乗り込め」とギルが促した。

「あ、ああ」

第3艦橋底部のハッチが開いた。

「懐かしいな。みんなここから初乗艦したんだ」南部はキョロキョロ見回しながら言った。

ギル、白馬、黒虎に続いて南部は斜路を歩いて上がった。

艦内に入ると、ハッチが閉じた。

確にかつて見慣れた第3艦橋だった。第1艦橋のスタッフは緊急時に第3艦橋で勤務する可能性があり、訓練で何回も来た場所だ。

「懐かしいな」南部はその時に自分が座った席に手を触れた。

そのとき、「南部。南部じゃないか!」と誰か男の声がした。

## 第1章 汚辱世界編

地下の巨大空洞に作られた光り輝く幻想都市ウェミナ。

相原の目の前にあるのはそれだった。

地底空洞に朝が来ることはない。

だから、この都市は莫大なエネルギーを浪費しつつ、光り続けねばならない。

何と言う浪費だろう。

相原はため息を付いた。

無限に続く夜を謳歌するためなのか。

明るい地上に出ればもっとエネルギーを節約できるものを。

相原は天井を見上げた。

相原は街の全員を連れて地上に戻りたいと思ったが、それは難しそうだった。相原自身、下を目指して入り組んだ洞窟と廃坑を辿ってここまで降りたが、同じ経路に戻れる自信はなかった。

もちろん、来た以上は戻れるはずだった。

しかし、そのことはしばし棚上げで良い。

相原には目的があったのだ。

古代進がここにいるはずなのだ。

相原の好みとは到底言えないここに来たのは、あくまで古代進と会うためなのだ。

「とは言っても」と相原は呟いた。「古代さんは地底の幻想都市ウェミナにいらしい、という話だけで、ここから先のヒントは無い……。そもそもウェミナはどこからどこまでがウェミナなのか分からない。空洞全体がウェミナなのか？ それとも光っている都市部分だけがウェミナなのか？」

相原はやや大きな石の上に上がって、あたりを見回した。

都市に至る道路のようなものが見えた。

都市からやや離れた場所に集落があり、そこと都市を結ぶ道路のようだった。

「あれに出れば無理なく都市まで行けそうだ」

相原は石を降りて歩き始めた。

道路には通行する者は見当たらなかった。

相原は、道路を歩き始めた。

だがすぐに信じられないものを見た。

宇宙戦艦ヤマトの女性用艦内服を着た女性が道ばたのベンチに座っていたのだ。

後ろ姿だが、髪型は森雪に似ていた。

相原が聞いた話は古代についてだけで、森雪のことは聞いていない。

しかし、古代がいるなら、森雪がいても不思議では無い。何しろ二人は結婚したのだ。

「雪さん、あなたは雪さんでは？」相原は駆け寄った。

しかし、振り返った女性は森雪ではなかった。

顔が違った。

「あんた誰？ 見慣れない顔ね」

彼女は森雪よりも若く見えた。愛嬌のある顔だった。

「失礼。後ろ姿が似ていたもので」

「ふーん」

「自分は相原義一。古代進という男を捜してここに来た」

「私は、ミーオ。ミーオ・ゴードッシュ。古代進という名前には心当たりは無いわ」

「君が着ている服は？」

「これ、お気に入りなの。垢抜けてるでしょ？」

「それは宇宙戦艦ヤマトの艦内服に良く似ている。森雪という女性が着ていた」

「宇宙戦艦……なに？ それも知らないわ」

「どうやって手に入れたんだい？」

「罪深き戦艦の倉庫よ」

「罪深き戦艦？」

「贖罪戦艦ともいうわ」

「だが、この服を倉庫に持っている戦艦は地球防衛軍以外に考えにくいな」

「何でも星を滅ぼす罪を犯して、その罪をあがなうためにそこにあるって。あらゆる方法でウェミナに奉仕することで、罪をあがなおうとしてい

るって」

「ウェミナに奉仕とは？」

「エンジンは発電機としてウェミナに電力を供給しているわ。それ以外は好きなものを持って行って良いつて。だから、倉庫の中身は全部運び出されたし、取り外せるものは全部取り外して売り払ったわ。ウェミナの繁栄のために」

「その戦艦の艦名は？ ヤマトじゃないとしたら、アンドロメダ？ プリンズ・オブ・ウェールズ？ アリゾナ？」

「名前なんて無いと思うわ」

「無名？ そんな馬鹿な。どこかに艦名を書いたプレートがあったはずだ」

「もしあっても、取り外して売られてしまったと思うわ」

「どこに行けばその戦艦が見られるんだ？」

「ここからだ、街の反対側よ。かなり遠いわ」

「構わない。是非とも確認したいんだ」

「ならば、この道をまっすぐよ。街を通過した向こう側」

「ありがとう」

相原は歩き始めた。

「待ってよ。私も街に戻るところだから、途中まで一緒に行きましょう」

「一緒に行ったところで何も出ないよ」

「退屈だからお話をして欲しいだけよ」

二人は並んで歩き始めた。

「何の話がいいんだ？」

「何でもいいわ」

「じゃあ、お互いに疑問があると思うから交互に質問といこうか」

「いいわよ」

「最初の質問はレディファーストだ。君からどうぞ」

「じゃあ、相原さん。あなたどこから来たの？」

「地上から坑道と洞窟を経由して」

「地下空洞の外の世界から？」

「そうだ」

「ああ、憧れちゃうわ、外の世界には」

「行ったことはないのかい？」

「無いわ」

「どうして？ 僕が通れた以上、君にも行けるはずだ」

「無理よ」

「勇気が無いってことかい？」

「違うわ。私には私の仕事があって、ここを離れるわけには行かないの。

外から来た人に会うと、本当は出たいと思うけれどね」

「じゃあ、ここには、他にも外の世界から来る人間がいるのかい？」

「時々いるわ。でも街に住み着く人はいないわね」

「なぜだろう」

「エネルギーをふんだんに使える市民になるのはハードルが高いのよ。欠員が出ないと市民権は付与されないわ。エネルギーさえ使わないなら、街の外に住み着くのは勝手だけど。でも、エネルギー使えないならこんな地下に住む意味は無いわ。だから、街の外に住み着く人は希よ。世捨て人のようにかなり例外」

「世捨て人？」

「罪深き戦艦を発電機として動かし続けている人よ」

「名前は？」

「無いと思うわ。みんな世捨て人と呼んでいて、本人も名乗らないから」

「なるほど。古代さんではなさそうだな」

「じゃあ次はあなたが質問する番よ」

「よし。君はなぜあそこで座っていたんだい？ どこからどこに行く途中だったんだい？」

「パパに言いつかったお使いよ」とミーオは手に持った包みを見せた。

「街から採掘村まで行って、その帰りなの」

「採掘村とは？」

「地下資源を掘るための村よ」

「なるほど。資源のある場所を掘るから街からは遠いのか」

「街はね。中心が政治地区で、順番に商業地区、居住地区、農業地区、荒野の順で、荒野に採掘村が点在している感じ。罪深き戦艦も荒野ね」

「農業地区ってことは、ここは自足自給の世界なのか？」

「そうよ。外部との交流はほとんど無いわ」

「なぜだい？」

「ちょっと考えれば分かるでしょ？ キャベツやダイコンを担いで外の世界と往復するコストが正当化できると思う？ それなら人工照明で野菜作った方がいいわ」

「しかし、人工照明と言ってもエネルギー供給が切れたら……」

「罪をあがなうために是非戦艦のエンジンを平和利用したいというから、そのエネルギーを使っているわけ。何も悪いことはしていないわ。相手の自由意志でエネルギーの提供を受けているだけ」

「しかし、機械はいつか壊れるぞ。波動エンジンだって永遠じゃない。むしろ、何年もトラブル無く動き続けることは難しい」

「世捨て人が毎日のようにメンテナンスしてるわ」

「その人が消えたら……」

「1 つ言っておくと誰も永遠なんて信じてないわよ。今は今。未来は未来。エネルギー供給が止まったら次の手を考えるしかないわ」

「どんな手なんだい？」

「詳細までは知らないわ。賢人会議で昔からずっと討論されているテーマよ」

「賢人会議？」

「この町の統治機関よ」

「そうか」

「次は私の番よね」

「ああ」

「あなた、ウェミナへの移住志願者？ 欠員待ちが必要というだけでなく、賢人会議の審査も厳しいわよ」



「違うよ。移住は志願してない。人捜しに来ただけだ」

「あら。通過するだけの旅人なら街としては歓待するわ。賢人会議の支援も当てにしていいわ」

「次は僕が質問する番だね。賢人会議って、どんなシステムなんだ？」

「街の政治を行う合議制の会議よ」

「会議のメンバーはどうやって選ばれるんだい？」

「選挙よ」

「民主的に運営されている街か」

「公明正大でクリーンよ、ウェミナの街は」

「少しだけホッとした」

「法と民主主義は機能しているから、その点だけは安心して。ぼったくる酒場も無ければ、泥棒は警察に捕まるし、基本的な人権は確実に守られるわ」

「では安心して古代さんを探せそうだな」

「次はあなたが質問する番よね」

「ああ。古代という男を知らないか？」

「古代って誰？」

「昔の上司かな。とはいっても、同い年だから友達みたいな上司だ」

「上司を探しているの？」

「ちょっとそこは微妙」

「微妙というと？」

「上司だけど、僕のヒーローでもあった男。それに仲間だった。冒険の仲間だ」

「ふーん」

「でもそれだけじゃないんだ」

「他に何かあるの？ 実はホモで惚れてたとか？」

「バカッ。そうじゃなくて、夢枕で古代は地底大空洞のウェミナの街にいるというお告げがあったんだ」

「誰のお告げ？」

「閻魔大王と名乗っていたみたいだけど……。そこははっきりしない。  
沖田艦長に言われたような気もするから」

「沖田艦長って誰？」

「古代さんの前任者」

「へー。沖田艦長ね。聞いたことがない名前ね」

「だろうな。宇宙戦艦は閉鎖された地底空洞に似合わない」

「でも罪深き戦艦は荒野にあるわよ」

「ああ、そうだったな」相原は頭をかいた。「少なくとも自分がここに来た経路は、人間が1人しか通れないような狭い洞窟も経由した。あそこを宇宙戦艦が通れるはずが無い。ならば別の経路でここに入ったのだろうか」

「次は私の番ね。別の経路ってなに？」

「本格的に調べないと分からないよ」

「でも聞いたこともないわ」

「現存しているとは限らないよ。穴は既に塞がれてしまったかもしれない」

「ふーん」

「じゃあ、次は僕が質問する番かな」と相原は言った。「その服を着ている君は、どことなく他人に思えない。また会えるかな？」

「それってナンパ？ 私の身体が目当てなの？」

「いや、そういう意味じゃ……」

「分かってるわよ。こんな身体の線が露骨に出る服は、男がいやらしい目で見るとでしょう？」

「まあ、否定はしないが……」相原はミーオの身体を見ないようによそ見をした。

「そうね」とミーオは考え込んだ。「いいことを教えてあげる」

「なんだい？」

「ウェミナは24時間夜の世界。昼は貞淑な淑女だが、夜になると娼婦になる女達は、永遠に娼婦のごとく振る舞う街よ」

「ちょっと頭が痛くなった」

「無用のトラブルを避けるために、ウェミナの法律を少しだけ説明して置くわね」

「何か特別な法律でもあるのかい？」

「フリーセックス法」

「は？」

「女は誰でも好きな男を選んで快楽行為にふけることが許されるの。しかも時間を問わず。ここは 24 時間夜の街なの。その際、金銭の授受は禁止されていないわ」

「それって、娼婦のごとく振る舞うことが許されるのでは無く、娼婦も許されるってことかい？」

「そうよ。禁欲的な世界からこの街に来て失敗する旅人は、娼婦を見て警察を呼ぶの。でもね、警察は娼婦の味方よ。法律で許されているのですもの」

「そんな馬鹿な」と相原は言った。「自由意志なら娼婦も OK だなんて」

「その通りよ」

「これは恐れ入る街だね」

「嫌いになった？」

ミーオが歩きながら身体を寄せてきた。

相原はドキッとした。

「次に質問するのは私の番よね」

「ああ」

「私、相原さんの男としての能力に興味あるの。どれぐらいのポテンシャルがあるか教えてくれない？」

「人並み外れた凄い力は無いよ」

「そのことは弱点ではないわ。だって、どの男も、たいてい人並み外れた凄い力は無いわよ」

「ガッカリすると思うよ」

「それでもあなたを気に入ったの。街で私のベッドに寄っていかない？ 寄ってくれたら罪深き戦艦への地図を書いてあげるわ」

「分かった。そこまで言うのなら、僕も君の女としての能力に興味が出てきたよ」

「じゃあ、約束は成立ね」

「次は僕の番だな」

「まだ何か聞きたいことがあるの?」

「君は娼婦なのか?」

「あら、失礼しちゃうわね。職業女と一緒にしないでよ」

「悪かった。路銀の手持ちは少ないのでね。あまり高額を要求されると払えないから」

「お金なんて要求しないわ。安心して」

「疑って悪かった」

「でも、情報は身体で買ったことがあるわ」

「えっ?」

「冗談よ。忘れて」

しかし、相原は冗談には思えなかった。たぶん、そのことを気持ち悪いと思うべきではないのだろう。この町では普通の振る舞いなのだろうな、と相原は思った。

相原とミーオは、居住地区にあるミーオのアパートに入った。

小さな部屋とベッドと机だけだったが、小綺麗に整頓されていた。

「小さいけれど綺麗だ」

「ありがとう」

「ここで一人暮らしをしてるの?」

「そうよ」

「さっきはパパのお使いと」

「実家は近くにあるけど、離れて暮らしたい心理って分かるでしょ?」

「それは、まあ……」

「じゃあ、服を脱いで」

「えっ? いきなり?」

「男と女のすることは1つでしょ?」

相原はため息をついて服を脱いだ。

ミーオもヤマトの艦内服を脱ぎ捨てて、相原に投げつけた。

その時、相原は信じられないものを見た。

お尻のところに、目立たないが繕った跡があった。そして、相原はそれを知っていた。その繕い跡は森雪自身のものに間違いなかった。これは間違いなく、ミーオの服は森雪と同じタイプの制服ではなく、森雪に支給された制服そのものだった。

ミーオは素晴らしい女性だった。

相原は満足した。

ミーオも相原に満足したようだ。

相原はミーオに礼を言い、1人で街に出た。

罪深き戦艦への地図は書いてもらった。

しかし、ここに来た最大の目的は古代の探索だ。

それに新たにもう1つの疑問を抱え込んだ。

かつての宇宙戦艦ヤマトでは、女性乗組員が森雪しかいない関係で、ひそかに有志男性乗組員による森雪研究が進んでいた。その結果、森雪は当初3着の艦内服を持ち、後に5着に増えたことが分かっている。今日はこの服を着ているかを識別するために、同じデザインの艦内服の相違点を探すことが行われた。このうち、C服の最大の相違点は、森雪自身が繕ったお尻の縫い目だった。あの縫い目は森雪自身が行ったものなので、他の誰も同じ服を持っているはずがない。

ではミーオはどのようにして、その森雪の艦内服を手に入れたのだろうか。

少なくとも、そのあたりの地球防衛軍の軍艦の倉庫を漁って出てくるようなものではない。

泥棒……ということも考えられる。しかし泥棒なら本当のことを言うまい。相原はそう判断して、この件については一切ミーオに話してはいなかった。

かといって、ミーオを疑っているわけでもなかった。

ミーオはフランクにいろいろなことを教えてくれたのだ。

商業区画まで来ると人通りが多かった。

その中にはちらほらと矢印マークの入ったヤマトの艦内服を着ている者達がいた。それらはあまり使い込まれた形跡が無く、ミーオの森雪の服とは違って本当に倉庫から持ってきたように見えた。

相原の目に酒場の看板が見えた。

「冒険の基本は酒場での情報収集。それにミーオは、ぼったくる酒場など無いと保証してくれた。まずは情報から集めるか」

相原は酒場のドアを開けた。

相原はカウンターに座ると酒を注文した。

「マスター。古代進という名前について何か知らないか？」

「もう一杯注文してくれたら思い出せそうな気がする」

相原は、知っているが話すには金が欲しい、と理解した。

マスターは話し始めた。

「長い話になるがいいか？」

「ああ」

そしてマスターは自分の身の上を話し始めた。

相原はいつ古代進の話になるのか待った。

しかし、古代に触れること無く話は終わった。

「おい。古代進について教えてくれるはずじゃ」相原は立ち上がった。

「ああ。思い出した、思い出した。俺が知っているのは、古代進じゃねえ。古代とかいう名前の女性で、裸も同然の格好で店に来たことがあるのよ」

「女？ 古代進は男だぞ」

「じゃあ、別人だな。残念だ」

「なら最初からそう言えよ。時間を無駄にした。勧請を頼む」

マスターが言った金額は相原がメニューの金額を数えて合計した金額より2桁以上多かった。

「なんだその金額は」と相原は言った。「ぼったくる気か？」

「イヤなら警察に行くだけ」とマスターはニヤリと笑った。「それがイヤならきっちり払うものは払って」

「なぜ警察なんだ」

「警察は法律を守るもので、法律では適正な金額を請求することは合法だ」

「この金額のどこが適正だ」

「メニューにない情報代」

「結局何も知らなかったじゃないか」

「しかし、古代と言う人物に関する情報は聞いた」

「話にならない。帰る」

相原は立ち上がって、出口から出ようとした。

しかし、他の客達が立ち上がって道を塞いだ。

「やれやれ、みんなグルか」

相原は考えた。ここには正義を通しに来たのではない。あくまで、古代を探しに来たのだ。ここで問題を荒立てたくは無い。

「高い授業料だと思って払ってやるよ」

相原はなげなしの高額紙幣をマスターに渡した。

突然マスターはにこやかな表情を取り戻した。

「毎度あり」

酒場を出ると、相原はその場を足早に離れた。

あの酒場には2度と行かないようにしよう。

ぼったくる酒場など無いと言ったミーオは、この酒場のことは知らなかったようだ。

相原は、古物商の前でハッと足を止めた。

店頭には、沖田艦長のレリーフが売られていた。

ヤマトの艦長席に掲げられていたレリーフだ。

「おい、これはどうした。どこで手に入れた」と相原は思わず店主に詰め寄った。

その時、他にも見知ったものが売られていることに気付いた。

あれは、波動砲の発射トリガだ。隣のは、太田の席のパネルだ。そして、こっちは相原の手作りの携帯通信機だった。他のものとはかく、携帯通信機だけは間違いなく相原の私物だった。

「これをどこで手に入れた。これは俺の私物だぞ。泥棒ってことなのか？」

「人聞きの悪いことは言っちゃダメだよ」と店主は怒った。「うちは法に則ったまっとうな商売をしてるんだ」

「他にも怪しい売り物がいくつもあるぞ。特に波動砲関係が払い下げられることはない。全部売却前に解体されるんだ。おまえのような店が入手できる可能性は無いぞ。さあ言え、いったいどうやって手に入れた」

店主は店の奥に合図した。いかつい用心棒が出てきた。

相原はその場で叩きのめされた。

相原はそのまま町外れに捨てられた。

そこに、ぼろを着た若い女がやって来た。

「あなた、大丈夫？」

「あ、ああ」と相原は痛む身体を押さえながら起き上がった。

そこには、いかにも貧乏な女の小集団が遠巻きに相原を見ていた。

「あなたがたは何です？」

「娼婦です。良かったら買って下さい。誰か買って欲ないと家族が飢えます」

「娼婦と言っても臭いぞ」

「貧乏なので、風呂にもろくに入れません」

「就職しようとは思わないのか？」

「仕事なんてありません。バイトも門前払いです」

「待て」相原は考えた。「君たちの行為は合法なのか？」

「ええ。賢人会議は、福利厚生費の出費を削減するために、娼婦を合法化しました。貧乏人は身体で稼げということです」

相原は頭がクラクラした。「待て待て。僕が聞いた話だとこの街は民主的民主的に運営されている街と聞いた。公明正大でクリーンだと」



「とんでもないウソです」と女は言った。

「女性は誰でも自由にセックスする権利があると」

「飢えをしのぎたければ女性が身体を売る権利です」

「まさか」

「票は金で買えます。この街に民主主義などありません」

相原はハッとした。

ミーオはぼったくる酒場は無いと言った。しかしあった。

泥棒は警察に捕まると言った。しかし、堂々と盗品が売られていた。

基本的人権は確実に守られると言った。しかし、基本的人権も守られていない。

フリーセックス法は女性の自由のための法律だと言った。しかし、実際は貧乏人を過酷な労働に駆り立てる方策だった。

「この街はウソだらけか」と相原はやっと理解した。

とすればミーオが言ったことも全て本当ではないかもしれない。

自分の目で見て確かめる必要がある。

「ともかく罪深き戦艦の本物が見たい。この地図の場所だ。ここから近いのか？」

女が地図を覗き込んだ。

「やられましたね」と女は言った。「これは軍艦岩の場所を示した地図です。罪深き戦艦ではありません」

「なんだって？」相原は地図を見下ろした。「この地図すらも偽物か！」

「罪深き戦艦なら、このあたりです」と女は地図にマークを書き足した。

相原がこの空洞に入った場所に近かった。

「あの女！」相原は拳を握りしめた。

相原はそのまま街を通らず、荒野を遠回りして罪深き戦艦を目指した。

大きな岩を越えると、それは見えた。

荒廃した宇宙戦艦ヤマトそのものが、大地の上に傾いて横たわっていた。

あれが罪深き戦艦に間違いない。

しかし、装甲板の半分は失われ内部のフレームが剥き出しになっていた。

しかも、艦内の材料はほとんど持ち去られていた。スカスカで、向こう側の岩がよく見えた。

波動エンジンの部分だけは何とかある程度原形を保っていたが、幾本もの太いケーブルが装甲板を突き破り、波動エンジンに食い込んでいた。波動エンジンは苦しげな音を立てつつ、辛うじて回っていた。

ウェミナの都市の煌々と照らされた 24 時間続く夜景は、ここからのエネルギー供給でまかなわれているのは明らかだった。全てのケーブルはヤマトから市街地中央に向かって伸びていた。

もはやヤマトが飛び上がれないのは明らかだった。いくら波動エンジンが残っていても、あれだけのケーブル類が食い込んで地上に拘束されていたら、動きようがない。それを引きちぎっても、もう進路を修正する機器類が残っていない。

相原は慌ててヤマトに向かって駆け下りた。

近づけば近づくほどヤマトの惨状は酷かった。

内装を持ち去る際に落ちたと思われる椅子やテーブルや戸棚や機材が落ちたまま朽ち果てていた。

相原は波動エンジンに近づいた。

張り紙があった。

「修理用のコスモナイトを調達するために、しばらく留守にします。その間、波動エンジンに故障が無いようお祈り下さい」

署名はなかった。

相原は第 1 艦橋の自分の席を見に行くことにした。

しかし、エレベーターは無かった。持ち去られた後だった。

階段は使えたので、それで第 1 艦橋まで上がった。

第 1 艦橋の惨状は予想以上だった。

大スクリーンは割れてほとんど残っていなかった。

航行関係も戦闘関係もどの機器も残っておらず、機器を取り付けていたフレームだけが残されていた。

相原が使っていた通信機も丸ごと残っていなかった。椅子すら残ってい

なかった。

相原は、その場の床に座って考えた。

このヤマトと古代の関係は分からない。しかし、無関係とは思えない。

そして、街中で見かけた艦内服や古物屋の機材の出所はここに間違いはない。沖田艦長のレリーフがその証拠だ。あれは、この第1艦橋にあったものだ。そして今はこの第1艦橋に無い。ここから持ち出したものに違いない。

ヤマトの何もかも奪うことでウェミナという街は成立しているのかも知れない。

ともかく、波動エンジンに書き置きを残した誰かが戻ってくるまでは話が先に進みそうもなかった。

相原は第1艦橋からトボトボと階段を降りた。

ヤマトから出ると、そこに森雪の艦内服を着たミーオが立っていた。

「ミーオ!」

相原は駆け寄った。「どういうことだ! 君の地図はウソだったぞ!」

「もうここまで到達してしまったのね。私を満足させた男、相原さん」

「どういうことなんだ、ミーオ!」

「ウェミナの街とは、他者を搾取して永遠に続く享楽を甘受する街よ。ウェミナとは、波動エネルギーの波動つまりウェーブのもじり」

「なんだと?」

「吸い取って、吸い取って、何もかも無くなるまで吸い取って、それによって私たちが楽しむ街。あれを見れば分かるでしょう?」

まさに何もかも無くなるまで吸い取るべく太いケーブルが何本も波動エンジンに食い込んでいた。

「罪の意識は無いのか!」

「罪の意識があるのは、吸い取られている側よ」ミーオは言った。「相原さん。あなたはこの服の出所が気になっているのでしょうか? あなたには特別にそれを見せてあげます」

「また嘘を付いて罠に掛ける気だろう」

「夜の女は嘘つきなの」とミーオは言った。「でもね。男はそれを信じるしかないの」

「まさか。雪さんがウェミナの街にいるのか?」

「ついてくれば分かるわ」

ミーオは歩き始めた。

「待て!」相原はミーオを追いかけた。「どこに行く気だ」

ミーオは振り返った。「賢人会議議長の私邸。つまり私の実家よ」

「なんてこった! 君は賢人会議議長の娘だったのか?」

「義理の娘よ。その立場は身体で買ったの」哀しそうにミーオは振り返った。「どう? 幻滅した?」

幻滅するというよりも、相原は怒りに震えた。

賢人会議議長の私邸で相原が見たものは予想を超えていた。

メイドとしてこき使われるとか、娼婦として労働させられているとか、そういう残酷な想像はあったのだが、それ以上だった。

全裸の森雪が私邸のエントランスホールに立っていた。しかし、ピクリとも動かなかった。剥製だった。

「この剥製の女性が」とミーオは言った。「この服の本来の持ち主よ」

「まさか!」と相原は駆け寄った。「生きたまま剥製にしたのか!」

「パパがこの女の美しさを気に入ったけれど、老いるのは認めたくなかった。だから剥製にしたの」

「本人の了承も無しにか!」

「いいえ。本人も了解済みです。彼女は自らの罪をあがなうために、身を捧げたのです」

「罪とはなんだ!」

「惑星殺しです。惑星上の1つの知的生命体を滅ぼした戦艦に乗り組み、殺戮に手を貸したのです。その罪の意識が彼女を苦しめていました。剥製になった今はその苦しみから解放されました。見て下さい、この晴れやかな解放された表情を」

「ウソだっ! 雪さんは古代さんと結婚して幸せな生活を始めるところだったんだ!」

「罪という意味ではあなたも同罪ですよ、相原さん」

「僕もヤマトに乗っていたからか? しかし僕は波動砲の発射を命令していないし、引き金も引いていない。触れたことすらない」

「でも、通信という手段で殺戮を容易ならしめた罪があるの」

「いいや。僕はここに来てやっと分かった。おかしいのはこの街の方だ。君たちこそがおかしい。ヤマトの波動エンジンは人類の希望だったはずだ。けして、君たちを 24 時間遊ばせるためにあるわけではない!」

「でも私たちは、古代進自らより、ヤマトの波動エネルギーを贖罪のために提供したいと言われたのよ」

「古代さんが?」

「波動エンジンのメンテナンスを続ける世捨て人こそ古代進よ。私たちは彼の意向を無視するような暴挙には出ていない。その証拠に、波動エンジンと波動エンジンを修理するために使用する万能工作機械には一切手を出していない。古代進がその 2 つには手を出さなくてくれと言ったからです」

「だが君らは雪さんを剥製にした」

「それは古代の望みではありません。しかし、罪の意識に押しつぶされそうな森雪の要望ではあったのです」

「そんな……」

「これ以上ウソは重ねたくないの、正直に言いましょ」とミーオは言った。「この服を着て、時々古代進を訪問します。先に自ら望んで逝ってしまった森雪という悲しみを少しでも和らげるために、古代進は私を抱くの。つまり私は森雪の代用品」

相原は混乱した。

ミーオは相原も抱いたばかりだ。

同じミーオを古代進も抱いているだと?

「しかし、罪はあがなわれる必要があります。そのことは古代進もよく

理解しています」

相原はふらふらと私邸を出た。

「これから俺は何を信じれば良いんだ!」相原は叫んだ。

ミーオも建物から出てきた。

「相原さん」とミーオは言った。「これは返しておくわ。あなたが酒場でぼったくられた高額紙幣よ」

ミーオは紙幣を相原に渡した。

その時相原はハッとした。

紙幣の裏に、別の紙があった。

相原はその場を離れた。

ヤマトの残骸まで戻ると紙を開いた。

「この世界には、まだ私の知らない謎が残されている。おそらく、賢人会議が伏せている。私はその謎の答えを知りたい。父に背く行為となるが、それでも知りたい」

言外に、相原なら解き明かせると信じていると言っているようだった。

相原は眉をひそめた。

まさか。ヤマトの波動エンジンから搾取して繁栄する都市というイメージすらもフェイクで、本当はもう1つの真実があるというのだろうか。

つまり、ミーオは嘘を付いて相原をはめた。しかし、真のウソの前では、相原もミーオも同じと言いたいわけだろう。

いやそれだけではない。

森雪の剥製化には、真の嘘が深く関わっていると言いたいのかも知れない。

しかし、相原は夢の中のお告げで古代を探しに來ただけなのだ。

けして世界の秘密を解き明かそうと思ってここに來たわけではない。

そして、相原はもう1つの危ない事実に気がついた。

森雪が剥製化した後の古代の愛人はミーオなのだ。

そして、相原もミーオを抱いてしまった。

そのことを知ったら古代は怒るかもしれない。

相原は青くなった。

その時、丘を登ってくる足音が聞こえた。

ボロをまとった男がトボトボと丘を上がってくるころだった。

背中には何か詰まったリュックサック。隙間からはみ出した中身からすれば、何かの金属の鉱石だ。

男は、ヤマトの前に座っていた相原に気付いた。

「これは信じられないな」

男はフードを跳ね上げて顔を見せた。

「まさか! 本当に!」

その顔は、相原も見慣れた古代進の顔だった。

「相原。相原じゃないか!」と古代は叫んだ。

## 第1章 ヤマト 2010 界編

「太田ちゃん、知ってる?」

「何だよ」

「ヤマト復活篇」

「またまた。俺を担ごうとしてダメだよ」

「去年公開されて今年ブルーレイも出たんだって」

「なら、その映画で活躍している太田健二郎の画面写真を1枚でも見せてみるよ……」

「無理だよ。出てないもん」

「なぜだよ。太田、南部、相原といえば、黄金不動の第1艦橋サブキャラ・トリオだろう」

「全員出てないよ。乗組員はほぼ全入れ替えなんだから」

「またまた苦しい嘘を付いちゃって」

「バカ。YAMATO2520を思い出せよ。あれだって。全員別キャラだろ?」

「YAMATO2520? その場でいい加減なタイトルを考えるなよ。ヤマトは2199年。2520年とかじゃないでしょ?」

「強情だなあ、太田は」

「何回担がれたと思ってるの、ヤマト復活篇ネタで」

「誤報が多かったのは確かだけど今回はホントだって!」

「それも何回も聞いたよ」

太田は、本名を太田健二郎と言った。

宇宙戦艦ヤマトの登場人物と同じ名前になっているのは偶然だった。

そもそも、太田が宇宙戦艦ヤマトを見るようになったのは「同姓同名のキャラが出てくる」とクラスメートが教えてくれたからだ。

太田が最初に見たヤマトは、再放送の第 11 話「決断!!ガミラス絶対防衛線突入!!」だった。

そこで、作中の太田健二郎は、機雷が移動するのを見たという島の言葉を操縦が下手なことの言い訳と揶揄する古代に対して、本当に移動していることを艦長に報告する渋いかっこいい役だった。むしろ、主人公の古代よりも格好良いぐらいだった。何しろ古代といえ、島航海長を揶揄してばかりであまり格好良くは無い。それに対して太田の出番は少なかったが、頼りになるキャラだった。自分と同じ名前の人物がサブキャラとはいえ格好良かったことは、とても好感が持てた。

それから、太田はすっかりヤマトファンになった。

作中の太田が他人に思えないというのもある。

緑の矢印の服を着て「ミサイル接近!」と言うとクラスで受けが取れるというのも大きい。

しかし、太田のあの席に憧れたというのが最大の要素だろう。

太田の報告に従って、島はフネを動かし、古代は武器を発射する。太田こそがヤマトと言うフネのカナメなのだ。

子供の頃の友達からの電話でヤマトの 3 文字が出たことで、太田はヤマトが懐かしくなった。もちろん、復活篇などというホラ話は頂けない。しかし、何年も見ていないヤマトのコミックぐらいは読み直してもいいだろう。

物置を探すと、ひおあきら版コミック全 3 冊と松本零士版コミック全 2 冊が出てきた。



それを部屋に持ち帰ると、その5冊を一気に読み切った。

ひおあきら版コミックはアニメとかけ離れた内容で、良いのか悪いのかよく分からなかった。しかし、バラン星にヤマトの戦車隊で上陸するところと、ワープ中にヤマトとドメルが戦う場面は好きだった。

松本零士版コミックは、ダイジェスト的ですがすぐに終わってしまい、その後続編的な内容が途中まで続いていた。そして、巻末には番外エピソード的な永遠のジュラ編が収録されていた。

「このコミックに永遠のジュラ編が入っていたとはすっかり忘れていたな」

永遠のジュラ編とは、幻影を見せるデスラーの妻と娘が出てきて、ヤマト乗組員に幻影を見せる話だ。佐渡先生の酒が飛んだり、森雪を襲う無数の触手が暗闇から出てきたりする。

太田はコミックを読み直して夜更かしした。

しかし、すっかり熟睡した深夜、義姉の悲鳴で目を覚ました。

朝の4時過ぎだった。

家族がみんな起きてきて、義姉の部屋に集まった。

「ごめんなさい。夢です。夢を見ただけです」

「悲鳴を上げるほど怖い夢かい？」

「変な手のようなものが暗闇から出てきて……」

「ともかく夢なら大丈夫。何も怖いことは無い。もう寝なさい」既に老境の父の言葉でその場はお開きになった。

翌朝の食卓はその話題でもちきりだった。

「悪夢なら俺も一昨日見た」と兄が言った。「長男の俺が言うのもおかしいが、死んだ兄貴が出てきたよ。いるはずのない兄貴だぜ？」

「わしは一週間前だな」と父も言った。「死んだ仲間が生きているわしを無責任だとののしる夢だ。あれは辛かった。確かに学生デモに参加しないで高みの見物を気取ったこともあるからな」

「そういえば私も」と出戻りの妹が言った。「何日か前に酒が空を飛ぶ夢を見たわよ」

「それが悪夢？」

「飲もうとしても飛んでいって捕まらないの」

「それはもう酒を飲むなという神さまの思し召しだよ」と兄が笑った。  
もちろん、暗にキッチン・ドランカーをいさめているのだ。

「思い出した。私も見たわ」と母が言った。「孫がひもじいと泣いている夢よ」

「健二郎はどうなんだよ」と兄が言った。

「俺は別に……」

その時、太田に電話が掛かってきた。同窓会の連絡だった。昨日電話してきた元ヤマト友達だった。

「昨日話をしたばかりだよな」と太田は言った。「電話くれたろ？」

「電話なんてしてないぞ」

「えっ？ 確かにヤマト復活篇がどうのって」

「何を寝ぼけているんだよ。確かに製作発表はあったけど、実際に作られていないだろう？」

太田は受話器を置いて呆然とした。

ということは、電話があったと思ったことも悪夢の1つ……。

食卓に戻ると、太田は言った。「俺も悪夢を見てた。友達から電話があったけど、そんな電話してないって。悪夢で見たんだ。友達からの電話を」  
その時、テレビのニュースが急に慌ただしくなった。

『ただいま入りました情報です。昨日より、日本列島の各地で空中に浮かぶ戦艦が目撃されております。現在のところ、撮影された映像は4つあります。まず札幌の映像をご覧ください。それから東京、名古屋、京都の清水寺でも撮影されています』

テレビが空中を移動する巨大な何かを映し出した。

『今、新しい映像が届きました。関門海峡で撮影された映像です。これもご覧ください』

関門大橋の上を飛んでいく赤とグレーの巨体が見えた。

『識者の話によると、これは1970年代、80年代に流行した宇宙戦艦ヤ

マトというアニメに登場する宇宙戦艦ヤマトに形状や色が似ているとのこと。関係者は、ヤマトという名前を仮称してこの物体を呼んでいます。繰り返しますが、この物体は仮称ヤマトと呼ばれています。今のところ正体は分かっていません』

「ヤマト……」

ヤマトの映像の下に見える街並みは、間違いなく現代日本だった。

つまり、西暦 2010 年の日本にヤマトが出現して空を飛んでいるというのだ。

「そんな馬鹿な。ヤマトが現実にあっただと？」太田は立ち上がった。

「健二郎、座れよ」と兄がたしなめた。「食事中だ。それに我が家は悪夢の問題の方が重要だ。あの悪夢が続くとみんな睡眠不足になってしまう」

太田は椅子に座った。

しかし、もう一度立ち上がった。

「分かった」と太田は言った。「この悪夢はこれなんだよ」

慌てて太田は部屋からコミックを取ってきた。

そして開いた。

「これが宇宙戦艦ヤマトの永遠のジュラ編、乗組員が見る幻影は、最初に戦死した兄、次に飢えた孫娘、謎の触手に襲われる女性、空を飛ぶ酒瓶、生き残ったことを糾弾する死んだ昔の仲間達……。そして俺が見た悪夢は宇宙戦艦ヤマトに関するものだった」

食卓が静まりかえった。全員の食事が止まったのだ。食事を続けているのはまだ幼い姪だけだった。

「ただの偶然だろ？」と兄が言った。

「ならテレビに出てくるアレは何だよ」

「あれがアニメのヤマトだとしても、うちの一家に異変が起きる理由にならない」兄は切って捨てた。

「しかし、俺は気になる。何かがあるような気がする」太田は言い返した。

「だとしても、どうやって調べるといふのだ。あつちは空を飛んでいる

のだぞ」

「少なくとも本物を見たい」

「仕事はどうするんだよ」

「有給が溜まってるからこの機会に全部使う」

「十分なのか？」

「鈍行なら日本一周できるぐらいの貯金はあるよ」

「しかし、ヤマトは日本のどこに出るか分からないぞ」

「まずは東京に行く。情報が集まっているから、どこに出現するか予測を立てやすいはずだ」

「ずいぶんと、あやふやだな」

そのとき、義姉が言った。「今動けるのは健二郎さんだけだから、ここは難しくても調べてもらった方がいいわ。他の人は今みんな急がしい時期だから……」

「そ、それもそうだが……」義姉に弱い兄は急に態度が小さくなった。

義姉は、太田を連れて太田の部屋に行った。

もちろん、同居している以上、義姉の出入りは多く特別な意味などない。

「私のへそくりを上げるわ。それがあれば、鈍行なんて言わないで飛行機に乗れるはずよ」義姉は言った。

その言葉で、太田は理解した。へそくりだから、他の家族には聞かせられない話なのか。

「ありがとう、ねえさん」

「ついでと言っては何だけど」と義姉は言った。「実は妹の娘が喫茶店をクビになったところなのよ。会ったことはあったかしら？」

「ええと、ナデシコちゃんだっけ？」

「そうよ」

「法事で何回か見たよ。まだ子供の頃だけど」

「思い出した。ずいぶん懐いていたわよね」

「プリキュアの話をしたら喜んだだけだ。あの時はまだナデシコちゃんが小学生に上がるか上がらないかの頃だな」

「小さい子の相手だけは上手いのよね。ライダーとかプリキュアの話はできるから」

「ねえさん、褒め言葉になってない」

「ごめんなさい」

「で、なんでクビになったの？」

「淹れるコーヒーが不味いって」

「えっ？ 不味いコーヒー？」

もちろん、不味いコーヒーとは宇宙戦艦ヤマトの森雪の属性であり、やはりヤマトを連想させた。

「気分転換に東京に行きたいっていうから、ついでに連れて行ってくれない？」

「俺は男だぞ。しかも、血は繋がってない。いいのか？」

「手を出せるとは思わないことね。あの娘は男のあしらいには慣れてるわよ」

「そうか。分かった」

利発そうな少女を思い出して太田はうなずいた。

「じゃあ、健二郎さん、よろしくね！」義姉はそう言い残して出て行った。

太田の手には札が何枚も入った袋が残されていた。

そして気付いた。

昔は、ナデシコといえば、機動戦艦ナデシコというアニメのタイトルと同じだと思っていたが、よく考えれば大和撫子が語源であり、ナデシコもヤマトに通じる。

今回の旅行はどこを切ってもヤマトに通じているような気がした。

太田は腹を括って時刻表を開いた。

ナデシコに電話をして都合を聞いた。

「ケン兄ちゃん、時刻表見るの得意だったよね。任せるよ」

「何時にアパート出られるんだ？」

「その日はゴミ回収の都合があるから、9時に出たい」

「分かった、その前提で時刻を調べるよ」

太田は良い具合の時刻の列車を調べた。

そして、太田は慄然とした。

最も上手く接続する列車は、通勤客向けの座席定員制の列車の『やまとじライナー』だった。これで大阪に行き、神戸から来たナデシコと合流した上で新幹線に乗り継ぐのが最もスムーズに東京に行く経路に思えた。

ヤマトの3文字で始まる『やまとじライナー』とは。

本当にこの旅はヤマトに通じているようだ。

待ち合わせは新大阪の駅で行った。

肉まんを頬張って待っていると、ナデシコは来た。

しかし、向こうが声を掛けてくるまで太田は気付かなかった。

あまりにもイメージと違ったからだ。

プリキュアプリキュア言っている幼女をイメージしていたが、実際に来たのはセクシー美少女だった。短めのスカートのワンピース。髪を左右にまとめて垂らすいわゆるツインテールの髪型。

「ケン兄ちゃん、お待たせ」

太田は肉まんを思わず床に落としてしまった。

「私が魅力的だからって、手を出しちゃだめだぞ、今のところは……」

「おまえナデシコか？」

「そうよ、ケン兄ちゃん。間違えた？」

「あ、ああ」

「じゃあ行きましょう」

太田とナデシコは新幹線に乗り込んだ。

指定席だったので、座席にはすぐ座れた。

指定席を取れたのは、義姉さんからの資金のおかげだ。それにナデシコを立たせておくわけにもいかない。

新幹線が走り出すとナデシコは言った。

「そういえば、小さい頃、ケン兄ちゃんは私のことチャコって呼んでいたわよね。なぜ？」

「俺のことをケン兄ちゃんって呼ぶからだよ」

「だからなんで？」

「昔ケンちゃんチャコちゃんっていう人気ドラマのシリーズがあつてね。兄がケンちゃん、ケン兄ちゃんだよ。で、妹がチャコちゃん」

「初耳だわ」

「昔説明したろう」

「じゃあ、ケン兄ちゃんと同じ世代の男達まで一緒になってチャコチャコって言ったのは……」

「ケンちゃんチャコちゃんを見てた世代だろうな」

「どんな秘密があるかと思ったら案外つまらない話題ね」

「だろうな」

「ところで」とナデシコは顔を寄せた。

太田は焦って、少し身を引いた。

「私たち恋人同士に見えるかしら」

「見えないよ。何歳差があると思っっているんだ」

「でも、親子と言うほどの年の差でも無いわよね」

「ほとんど親子だよ」

「じゃあ若い愛人を囲っているオヤジという感じ？」

「俺に愛人を囲えるだけの甲斐性があると見えるか？」

「甲斐性なんて関係無いよ。憧れのケン兄ちゃんは憧れなの。それだけで十分」

「おいおい。まだプリキュアの話をして欲しいのか？」

「違うよ。私はもうそんな子供じゃないの」

太田はドキッとした。

「箱根の山を越えたら大事な話があるの」

「今じゃダメなのか？」

「まだ実家に近すぎるから」

「何かよからぬことを考えているのか？ 義姉さんの手前、ナデシコを悪い道には行かせられないぞ」

「その点なら大丈夫よ。お婆さんも承知の話だから」

「ほんとか?」

「少なくともゴールは別として」

「何が別なんだ?」

「とりあえず、私は少し寝るわ。朝が早かったの」

ナデシコはそのまま新幹線の座席を倒して眠り込んだ。リラックスしきった無防備な姿だった。隣に座った太田はナデシコの身体を意識せざるを得なかった。安心しきって眠っているナデシコの身体を、思わず太田は触ってみたいくなる。しかし、そういうわけにも行かない。血は繋がっていないとは言え、赤の他人では無く、あくまで義姉の親族なのだ。何かの間違いが起きれば、酷いことになりかねない。

その時、太田は重要なことに気がついた。

ナデシコが無意識に腰を前に出した拍子に短すぎるスカートがめくれて、下着が見えてしまったのだ。漠然と予測した白い下着が見えた。しかし、下着にしては少し形状や雰囲気が違って見えた。しかし、どうも見慣れた何かに見えた。

そこで、太田はぼんと手を打った。「そうだ。旧スクだ」

旧タイプのスクール水着に違いない。

スクール水着は紺色が多いが、他の色のバリエーションが存在しないわけでもない。白色とは、教育で使われると言うよりアダルトグッズに近い。透けやすい白は余り採用されないが、それを愛好するマニアがいるのでニーズはあるのだ。夜の生活用として。

しかし、旧タイプである以上、現在は学校で使われる可能性はほとんど無い。

突然ナデシコが目を覚ました。そして慌ててスカートを直した。

「下着を見たの?」ナデシコが真剣に質問した。

「下着ではなかったよ」と太田は答えた。

「なら何を下に着ているのか分かってしまったの?」

「白旧スクだろ? ああ、言葉が分かるかい? 白い旧型のスクール水着」

「用語ぐらい分かるわよ。聞いてなかった? 私がクビになった喫茶店、



オタク相手のメイド喫茶だったの。だからいろいろとオタクの知識を身につけてるわよ」

「それは初耳だよ」

「あらそう」

「とにかくこの話は終わりだ。スカートの中身は見せないように寝てくれ」

「なぜワンピースの下に白旧スク着てるか質問しないの?」

「そ、それは……」太田は追い詰められるのを感じた。もちろん、そのことは知りたい。しかし、知ってしまうと何か不味い世界に入り込んでしまいそうな気がした。

その時、新幹線がトンネルに入った。

「新丹那トンネルね」とナデシコは言った。「もう実家から離れたからいいと思うから言うけど」

「なんだよ急に」

「実は頼まれたの」

「何をだ?」

「いつまでも独身のあなたに、生身の女の素晴らしさを意識させてくれて」

「誰から?」

「おばさん。つまり、あなたのお兄さんの奥さん」

「義姉さんに気を使わせてしまったのか」

「そりゃ結婚しないでいつまでも実家にいる義理の弟は心配でしょう」

「だから白旧スクを着て来たか?」

「ええ。あなたの PC に、白旧スクだけ集めた画像フォルダがあるって聞いたから」

太田は頭を抱えた。確かに他人が見えないようにアクセス権を設定したファイルだったはずだが、故障交換時にファイルが残ったハードディスクを兄貴が持って行った。破棄するためだと言ったが、管理者権限を持っている他の PC に接続してアクセス権を上書きすれば見放題だ。

「鞆にはメイド服も入っているわよ。ケン兄ちゃんメイド服も好きなんでしょう？ 特定の店にはこだわっていないけど、メイド喫茶によく行くって聞いたわよ」

「次の駅で俺は降りるよ。このままでは間違いが起きそうだ」

「いいよ。ケン兄ちゃんなら間違いを起こしても」

「ナデシコ!」

「おばさんから頼まれたのは挑発まで。その先は私の望み。小さいときから好きだったケン兄ちゃんが相手なら、オッケーだよ。もし、他のコスチュームが良ければ何でも着てあげる。東京に行けば専門店があるから何でも買えるはずだよ」

「単にチャコの面倒を見るつもりだった俺がバカだった」

結局、東京駅に到着するとそのまま山手線に乗り換えてラブホテル街に直行した。

太田は白旧スクを着たナデシコを抱いた。

「ケン兄ちゃんと1つになれて嬉しいわ」とベッドで抱き合ったまま、ナデシコは言った。「ねえ、これでも3次の女は嫌い?」

「2次の女が好きだってだけで、3次の女は嫌いなんて思ったことはないよ」

「じゃあどうして独身なの?」

「3次の女の方が俺を避けて通るからさ」

「みんな見る目が無いのね。ケン兄ちゃん、こんなに素敵なのに」

「そう思うなら、時間を延長して2回戦に行くか?」

「来てよ。歓迎するわ。今度はメイド服を着てあげる」

「ああ」

「だからもうヤマトのことは忘れて。田舎に帰って結婚しよう。私なんでもするよ。ケン兄ちゃんが好きなアニメのコスプレはなんでもするよ」

太田はそれを聞いてのけぞった。

いや、もしかして、事態は義姉さんの思っている以上の段階に踏み込んでいるようだった。

結局、その日は朝までラブホテルで一泊して愛し合い続けた。

それから太田の生活は一変した。

あくまでヤマトのことを調べるために東京まで来たはずなのに、ナデシコとデートして過ごす毎日だった。

観光して食事して、田舎ではあまり手に入らない淫らな衣服や道具を買い込んで最後はラブホテルでそれらをナデシコの身体に試した。

ナデシコはどんどん太田の色に染まっていった。

幸い資金はあった。

時間もあった。

1 日目は、山手線を一周しながら名の知れた駅で降りて歩き回った。山手線で元の場所に戻るとまた日暮里のラブホテル街だった。そこで、2 人はまた一晚過ごした。

2 日目は、間もなくスカイツリーに取って代われるという東京タワーを皮切りに、周辺を歩き回った。

3 日目は、新宿歌舞伎町の怪しい街並みを探索し、淫具を買い込んでそのままラブホテルで淫具をナデシコの身体に試した。ナデシコは、奇怪な道具に警戒心を抱きつつも、一度快樂が与えられると分かれると道具を積極的に受け入れた。

4 日目は、道具を売り払って身軽になると、今度はコスチュームを見てまわった。太田は緑の矢印が胸に描かれた懐かしいコスプレ衣服を発見して買い込んだ。

5 日目には、完全にヤマトのことが頭から抜けていた。既に結婚を前提に東京で長期デートしている気分になっていた。昨日買った緑の矢印のコスプレ服を着ていたにも関わらず、既にヤマトのことは忘れていた。

しかし、5 日目の昼食をお台場の海が見えるテラスで食べているときに異変は発生した。

太田は大きな音に愕いて空を見上げた。

空から巨大な塊が降下してきたのだ。

それは東京湾に着水した。

水しぶきが上がった。

赤とグレーの巨体は、宇宙戦艦ヤマトにしか見えなかった。日本各地に出現したあの物体だった。

太田は呆然とお台場のカフェに立ち尽くして、東京湾に浮かぶヤマトを見た。

「ケン兄ちゃん」とナデシコは、ヘソが見えるほど裾の短い上着姿で太田の袖を引いた。「アレは幻よ。もうヤマトなんか見ないで」

しかし、大勢の人間が大騒ぎして海を指さしている。

幻ではあり得なかった。

「ナデシコ。俺はおまえをもう手放したくない」と太田は言った。「だが、あのヤマトは現実にそこにある」

「でもあなたの問題では無いわ。警察と自衛隊に任せておけばいいのよ」

「違う。家族の見た悪夢と関係があるんだ。これは俺と家族の問題でもあるんだ」

「ダメよ、ケン兄ちゃん」

見ていると、押っ取り刀で出動してきた巡視船にヤマトは囲まれた。

拡声器でやりとりが行われ、ヤマトは寄港して補給を行いたいだけだと主張した。そのまま、巡視船に囲まれながらヤマトは海上を航行して東京港に停泊した。

太田は一部始終をレインボーブリッジの上から見ていた。ずっとナデシコが太田の腕を掴んでいた。他にも大勢の野次馬が同じように見ていた。

やがてラジオのニュースが、出現したヤマトの乗組員が首相と会見するという報道がなされた。

太田はナデシコを連れてそのままユリカモメに飛び乗った。行き先は首相官邸だ。

ユリカモメと地下鉄を乗り継ぐと、それほど遠くはなかった。

ヤマト乗組員の到着を待つ野次馬の中に太田とナデシコは割りこんだ。

やがて、黒塗りの車が数台やってきた。

車から降りたのは、間違いなく部署ごとに色違いの矢印が付いた制服を

着たヤマト乗組員だった。訪問した使節団のリーダーはまさに島航海長そのものに見えた。

島の横にいる緑の矢印は林だろう。護衛するように後に付いているのは黒い制服は、ブラック・タイガー隊員だろう。

彼らは驚いたように野次馬を見回していた。

しかし、突然島航海長がまっすぐ太田を見つめた。

太田はビクッとした。

なぜ自分が島航海長に見られるのか。

「太田。太田じゃないか」と島が叫んだ。

## 第2章 神界戦争編

「南部。南部じゃないか!」と誰か男の声がした。

しかし、黒虎の声では無いし、ましてギルや白馬の女性の声ではありえなかった。

南部は左右を見た。

「今のは誰の声なんだ?」と誰にともなく質問した。

「ヤマトそのものの声だ」ギルは答えた。

「ヤマトが……喋る?」

「魂が解放される天界にあって、魂宿るものはみな言葉を発するのだ」とギルは言った。「本来は戦闘機に過ぎぬ白馬や黒虎が喋るのを見て気付かなかったのか?」

言われ見ればその通りだった。

しかし、南部は1つの疑問に思い至った。

「ヤマトが自分で動いているなら、何のために動いている。地球を守るためではないだろう?」

「そんなことを知らずにここまで来たのか?」とヤマトの声が言った、

「ともかくヤマトに会うことだけを考えてここまで来た」と南部は言った。「そのために、ギルについてここまで来た。ギルの立場は聴いたが、ギルの具体的な目的も聞いていない」

「南部、ともかく第1艦橋に上がれ」とヤマトの声は言った。「ゼロと黒虎は格納庫で待機」

「私は人に変化してコーヒーをお持ちしようと思います」と白馬が答えた。

「いいだろう」とヤマトの声は承認した。「ではギルさまもエレベーターへ」

「うむ」

ギルと南部と白馬と黒虎はエレベーターに乗った。

途中の階層で白馬と黒虎は降りた。

そのままエレベーターは第1艦橋に上がった。

「ヤマト。大パネルで南部に説明してやれ」とギルが命じた。

「かしこまりました」

大パネルに死闘の映像が展開された。

「我々は」とヤマトの声は言った。「最終的にこの世界の謎を解き明かそうとしている。なぜ天界には矛盾があるのか。なぜ理由を調べるのが罪なのか。閻魔大王が統治していた時代は、矛盾は顕在化していなかった。閻魔大王が、矛盾が起きぬようにルールを一貫させていたのだ。しかし、天界の統治が合議制の民主主義的なシステムに移行した後は矛盾が露呈している。それはなぜなのか」

「なぜなのだ？」

「分かっていることと、分かっていることとがある」

「分かっていることとは何だ？」

「この世界は民主的な合議制と言われているが。実は万人が平等ではない」

「どこがどう不平等なんだ？」

「この世界には、神々が存在する。天界は神々によって運営され、神々の合議で動く。しかし、死んだ人間達の魂に発言権は無い」

「なるほど」

「そして、天界についての情報は全て神々が握っていて、彼らは重要な

情報を秘匿し続けている」

「ギルも神なのだろう？」

「そうだ。しかし、彼女は情報の全貌を知らない。どの神も情報の一部しか知らない。そして、彼らはけして情報を開示しない」

「まさかと思うが」

南部は大パネルに展開される神とヤマトとの死闘映像を見ながら言った。

「神々との戦いの目的とは」

「そうだ。神を1人1人撃破していき、彼らが持つ情報を1つ1つ手に入れていく長い戦いなのだ」

「その戦いはいつ終わるのだ？」

「分からない。神々の総数は八百万とも言われて、総人口もはっきりしない。しかし、我々には無限の命がある。既に死んでいるからこれ以上死ぬことは無い。戦い続ければいつかは全貌が分かる」

「ではギルも情報の一部は持っていたのだな？」

「そうだ。彼女が持っていた情報は、システムの運用マニュアルの一部だった。システムを運用する女王の娘らしい情報だ」

「今まで何人の神々を倒した？」

「全部で17人だ」

「ファットマン男爵を倒したと号外が出ていたが事実か？」

「事実だ。これがその時の記録だ」

大パネルに、巨体に食い込むヤマトの艦首の映像が流された。

「情報は得られたのか？」

「得られた。しかし、今のところ得られた情報は全て断片的で、連携して1つの全体像は描けない。しかも、つまらない運用マニュアルのようなもので、核心的な情報ではなさそうだ。それに行き着くにはこのペースを維持し神々に勝ち続けるしかない」

「誰が核心的な情報を持っているか分からないのか？」

「残念ながら、それが分かれば苦労はない」

「なるほど」と南部はやっとヤマトとギルが抱える希望と苦悩を理解し

た。

核心となる情報はどこかにあり、それを得る手段もある。しかし、肝心の在処だけが分からないのだ。無駄は多いが、しらみつぶしに全ての神々を制圧していくしかない。

「ところで、戦いを仕掛けて負けたらどうなるんだ？」

「ギルも私も天界から消滅だろう」とヤマトは言った。

「そいつは辛いな」

「しかし、南部。それは他人事ではない。このまま、この戦いに参加すれば君も同罪だ」

「ヤマトの波動砲で神々を消滅させたら、罪の大きさは最大か」

「そういうことだ」

「だが、元ヤマト乗組員がその程度のことではひるむと思うか？」

「そうだな。同じぐらい困難な戦いをいくつもくぐり抜けてきた男だ」

「そうだ。たぶん、まだ戦意は衰えない」

「まだ？」

「もしも、神々を百人倒そうと二百人倒そうと、核心的な情報が出てこないとしたら、その時は分からない」

「人生経験を積んだようだな、南部」

「多くの後悔と失敗の上にね」

その時、人間の姿の白馬がコーヒーを乗せた台車を押して第1艦橋に来了た。

「ギル様も南部さんもどうぞ」

白馬がコーヒーを淹れてくれた。

「南部さん、格納庫にも遊びに来て下さいね」と白馬は言った。「あそこは退屈です。たまには遠乗りに行きましょう。ヤマトのエスコートに飛ぶのも良いですわ」

「しかし、自分は砲術専門で操縦訓練は受けたことがありません」

「大丈夫。私が自分で操縦しますから、南部さんは乗っているだけです」

「そうか」



「それに、南部さんには、ギル様に興味を持って欲しくありませんわ」

「どういう意味だい？」

「ギル様とヤマトの間には誰も入り込めない深い関係があります」と白馬は言った。「仮に恋敵がヤマトそのもののだとして、勝てると思いますか？」

「いや……そうだな」南部はうなずいた。

カップを置いたギルが宣言した。

「次の目標が決まった」とギルは言った。「ここからなら、ミュンヒ男爵とハウゼン男爵の居城に近いが、ミュンヒ男爵に決めた」

「して、その理由は？」とヤマトが質問した。

「現在二人とも同程度の辺境領主に過ぎないが、実はミュンヒ男爵には中央の情報区画で勤務していた実績がある」

「ではミュンヒ男爵の方がより重要な情報を持っている可能性がありそうですね」

「このままワープを繰り返してミュンヒ男爵領に向かうと到着は2日後だ」

そしてギルは南部を振り返った。

「逃げるならその2日間のうちだぞ」

「俺は逃げません」

「だが忘れるな。あと2日間は猶予がある」

南部はその言葉を噛みしめた。

「南部よ」とヤマトは言った。「おまえの歓迎パーティーができるほど人手が足りてはいないのだ。悪く思うなよ」

「構わない。その代わりに、艦内を見て回ってもいいか？」

「いいとも。かつておまえが掌握していたショックカノンや波動砲制御室などを見て回るといい」

南部はヤマト艦内を歩き回ることから始めた。

第1艦橋の南部の席も、主砲も副砲もパルスレーザーも、波動砲も南部の記憶の通りだった。しかし、人は誰もいなかった。

「せめて主砲では坂巻のひねくれた顔を見たかったな」南部は頭をかい

た。

それから、南部は展望室に行き外を眺めてから波動エンジンを見に行き、そして格納庫にまわった。

美しく立った白馬と、寝そべった黒虎がいた。

「何か用か。ここは格納庫でつまらない馬と虎しかいないぞ」黒虎が言った。

「暇だからね。白馬の招待に応じただけだ」

「嬉しいわ」と白馬は美女に変化した。「外を飛びますか？」

「そうしよう」

白馬はコスモゼロに変化した。

南部はヘルメットをかぶってコスモゼロのコクピットに乗り込んだ。

「本当に操縦はできないぞ」

「構いません」とコスモゼロは答えた。

コスモゼロはエレベーターでカタパルトまで上昇した。

「発進します」

コスモゼロはカタパルトで打ち出された。

そして反転してヤマトと平行に飛行しながら緩やかに追い越していった。

「南部さん、波動砲は見ましたか？」

「見たよ」

「外から発射口は見ましたか？」

「いや、外からは見ていない。降下してくるときは船体の影になって発射口が見えなかった」

「では今見て下さい」

南部はヤマトを追い越しつつあるコスモゼロからヤマトの艦首を見た。

南部は愕然とした。

「波動砲発射口が八角形になっている……」

「やはりお気づきになられましたか」

「ヤマトの波動砲の発射口は最適形状を探るために何種類も試作されて航海中に取り替え引っ返されていた。しかし、六角形の発射口はあったが

八角形の発射口は無かったはずだ」

「実はおかしいことが、黒虎にもあります」とコスモゼロは言った。

「なんだって?」

「黒虎は滅多に戦闘機形態に変化しません。本人は虎の姿のままて人を乗せて空を飛べるから必要無いと言いますが、それにしても不自然です」

「確かに、黒虎の戦闘機形態はまだ見たことが無い」

「黒虎の戦闘機形態は、ブラック・タイガーに口が描いてあります」

「なんだって?」

「口です」

「シャークマウスは、計画段階であった塗装パターンだ。手間が掛かるので廃止されたから、実際にヤマトに乗っていたブラック・タイガーにはペイントされていない。実証実験機以外には」

「そうです。そして加藤三郎の愛機は実証実験機ではなく量産機でした」

「待て。黒虎が加藤の愛機が魂を持ったブラック・タイガーだとするとシャークマウスは描かれていないはずだ」

「そうです。あれはおかしいのです」

「なるほど。ヤマトや黒虎に聞かれないから空のデートに誘ったわけか」

「その通りです。ヤマト艦内ではどこにいてもヤマトに聞かれます」

「コスモゼロ、君の推理を聞こう」

「このヤマトと黒虎は本物ではなく、偽装されたスパイではないかと」

「スパイだって?」

「そうです」

「何のために?」

「もう一度思い出して下さい。ヤマトの波動砲は神々を消滅させる力を持った唯一の波動砲です。他の波動砲では同じ効能がありません」

「あっ!」南部は声を上げた。「だとすると、ニセヤマトのニセ波動砲で神々は消滅しないぞ」

「そうです。神々は消えたふりをしている、というのが私の仮説です」

「だが、それによってどんなメリットがあるんだ」

「本当の情報を秘匿し、どうでもいい情報を我々に掴ませているのではないのでしょうか」

「えっ？」

「あくまで仮説です」

「ギルは知っているのか？」

「ギル様も、良く分かりません。本当に神族を裏切ったのか、それとも南部さんを引っかけるための罠としてここにいるのか分かりません」

「どういうことだ？」

「私は後から拾われました。ギル様とヤマトとの出会いは直接見ていません」

「分かった。こちらも調べてみよう。まだこの話は秘密にしておけ。軽率な行動は取るな」

「はい」

「しかし、なぜ自分に打ち明けた？」

「南部さんは本物だと確信したからです」

「なぜ本物だと？」

「魂の輝きが違います。色は違いますが、私と同じ輝きです」

「分かった」

「では着艦します」

「最後に1つだけ質問がある」

「なんでしょう」

「古代は恋しくないのか？」

「恋しゅうございますが、もう気持ちは割り切れています」

「いつからだ？」

「古代さんが結婚したときです」

「なるほど……」

コスモゼロは艦底の着艦口から格納庫に滑り込んだ。

ギルは展望室でリラックスして酒を飲んでいた。

南部が入っていくと彼女は気付いた、

「どこにいていた」

「コスモゼロで外を飛んでいました」

「他の誰も乗せないコスモゼロがおまえは乗せたのか?」

「はい」

「楽しかったか?」

「もちろんです。爽快でした」

「それは良かった」

「あなたは どうしてここに?」

「戦艦の艦内は殺伐としているが、ここだけは落ち着ける。酒はここで飲むと決めている」

「あなたと出会ったとき、ヤマトがどんな姿だったのか、是非お聞きしたい」

「質問が多いぞ」

「そのことは、コスモゼロも知りませんでした。黒虎はしたり顔で説明しましたが、どうも信用できません。話はあなたから聞くしかありません」

「ヤマトから聞けば良からう」

「自分で自分の姿は見えません」

「なるほど。特別に話してやろう」

ギルは話し始めた。

「私はいかに神人でクイーン・オブ・アクエリアスの娘とはいえ罪人だからな。監獄に捕らわれていた。そこで私は助けを求めるメッセージを天界じゅうに送り出した。その結果、やって来た馬鹿者の数は少なくほとんどが返り討ちに遭って滅んだ。最後に来た本物がヤマトだったわけだ」

「監獄にヤマトが来てくれて解放してくれたと?」

「そうだ」

「それでヤマトは君の騎士になったのか?」

「助けに来ることと騎士になることはイコールではない。しかし、ヤマ

トは志願したのだ。自ら美しい姫のために働きたいと」

「どうして？」

「ヤマトは過去に幾人もの美しい女神の導きで航海するロマンを見ていたのだ。スターシャしかり、テレサしかり。そして古代は森雪を自らの伴侶とした。ヤマトは自分も美しい女を我が伴侶として欲しくなったのだ。だから私を伴侶として欲した」

「それが騎士になるということだと？」

「私という個人に剣を捧げる個人に属する騎士だ」

「代償も無しに？」

「いや。代償はある。目的が成就した暁には、私は身体をヤマトに捧げる。それだけだ」

「情欲に興奮したヤマトは射精として波動砲を発射し、あなたは消えるわけですか？」

「言葉が汚いぞ、南部」

「では、どう表現しろと」

「ならばこう言おう」とギルはいつになく真剣な目つきになっていった。

「この謎は命を張るだけの価値があるほど大きく重要だ」

「最初から命を賭ける覚悟で……」

「そうだ」

南部はギルが本物だと確信した。

けしてスパイなどではない。

「ならば言いたいことが1つあります」と南部は言った。「このヤマトと黒虎は偽物だという疑惑があります」

「聞こう」

「ヤマトの波動砲発射口は八角形で、黒虎の戦闘機形態にはシャークマウスが描かれています。これは本来あり得ないことです」

ギルは眉をひそめた。「本当ならゆゆしき事態だな」

ギルはそのまま格納庫に行くと白馬に飛び乗った。

そして発進するとすぐ戻って来た。

「波動砲の発射口は六角形だった」ギルは言った。「八角形では無かった」  
「馬鹿な!」

「では黒虎。戦闘機形態になってみろ」とギルが命じた。

「めんどくさいがギル様の命令とあれば」

黒虎は戦闘機に変化した。

シャークマウスが描かれていなかった。

すぐに黒虎は元の姿に戻った。

「これでよろしいでしょうか?」

「ご苦労」

ギルは南部を振り返った。「おまえの疑惑。事実ではなかったようだな」

しかし、南部の横をすれ違ってギルが立ち去る瞬間。ギルは囁いた。

「だが、疑惑は存在する」

南部が驚いて振り返ると格納庫のドアが閉じるころだった。

南部は確信した。

ギルも疑惑を抱いている。

けして南部をただの嘘つきとは思っていない。

南部は白馬のところに行った。

「空中デートをお誘いしてもよろしいでしょうか?」

「謹んで許可します」

コスモゼロでヤマトを飛び出すとコスモゼロは言った。

「軽率でしたね」

「すまん」と南部は謝った。

「カードを表にするのが早すぎます」コスモゼロは怒った。「それに、ヤマト艦内でギル様に説明したら、話がヤマトに筒抜けです」

「だが、こんなに素早く艦首を交換できるとは思わなかった」

「ここは天界です。物理法則から解放された世界です」

「言われて見ればその通りだな」

「奴等は尻尾を引っ込めてしまいました。次の尻尾を待つしかありません」

「やむを得ないな」

ミュンヒ男爵攻略戦は順調に進行した。

ヤマトの波動砲が、居城ごとミュンヒ男爵を吹き飛ばしたのだ。

ファットマン男爵のよう肉弾戦は発生しなかった。

しかし、せっかく破壊しないように注意した資料庫にあったのは領地の管理用の帳簿ばかりで、世界の秘密に迫るような情報は無かった。

「では次にハウゼン男爵領に向かいますか？」南部は質問した。

「いや。ミュンヒ男爵がやられたと知って、既に警備を厳重にしているはずだ。他の神を狙おう」

「では次はどこへ？」

「警戒手薄な遠くの神がいいな。かといってあまり遠すぎると移動に手間が掛かりすぎる」

「どのあたりが良いと思いますか？」

「ファットマン男爵はリトルボーイが後を継いだと言うが、ごたごたしている今が狙い目かも知れない」

「リトルボーイとは息子ですか？」

「そういうわけではない。しかし、取れる情報は似たり寄ったりだろう。それよりも、デーモン・コア侯爵か、トリニタイト子爵の方が良いかな。デーモン・コア侯爵は黒い噂が絶えないし、トリニタイト子爵も中央とのコネが太かったらしい」

「自分は全員知りませんから判断はお任せします」

「では、トリニタイト子爵にしよう」

「どれぐらい掛かりますか？」

「どんなに急いでも二週間は掛かる」

「長期航海になりますね」

「南部、買い出しに行ってくれ」

「物資調達ですね。了解です」

南部はメモをもらうと、格納庫に降りた。



「ギルから物資調達の指示が出た。どっちが乗せて飛んでくれる？」

「積載可能なペイロードは黒虎よりこちらの方が上ですね」白馬が言った。「私が行きます」

「ちえっ。自慢するなよ」黒虎がぼやいた。「こっちは軽い機体の格闘専用機だ。荷物運びは、エンジンパワーにゆとりがあるあんたと違って得意じゃないよ」

南部は白馬が変形したコスモゼロに乗り込んだ。

天界にあって、人は食べ物を必要としない。機械は燃料を必要としない。

しかし、嗜好品は別だった。

酒は消費され、動作効率を改善するためのより良い潤滑油は必要とされた。単純に舌を楽しませる食品も要求された。目を楽しませるための服も必要だった。

結局、長旅に必要なものは多く、南部は辺境の小さな街を走り回って調達した。

自動車や飛行機のジャンク部品を扱うジャンク屋で、南部は知った顔を見つけた。

「加藤じゃないか」

「南部か。久しぶりだな。元気だったか？」

「もう死んでるんだから元気も無いだろう」

「すまんすまん」

「俺は彗星帝国戦で死んでしまったが、おまえは長生きできたか？」

「有り難いことに畳の上で死ねたよ」

「それは良かった」

「ところで、おまえはここで何をしているんだ？」

「今はハウゼン男爵の運転主なんだけどさ。車のやつ、部品を交換したら気に入らないとだだをこねてね、代わりの部品を探しに来たところだ」

ハウゼン男爵。記憶にある。ヤマトが襲撃したミュンヒ男爵と並んで襲撃候補だった相手だ。もし襲っていたら加藤と戦う羽目になっていたところだ。危ないところだった。

しかし、その話は伏せておこう。

「プライドの高いおまえが運転主だって?」

「他人の役に立っていたいのさ」

「良い心がけだ」

「しかし、1つだけ気をつけておけよ」

「なんだい?」

「ニセヤマトが出る」

「は?」

「偽物の宇宙戦艦ヤマトが貴族の居城を狙って襲撃してくる」

南部は冷や汗をかいた。

「ニセヤマトだって?」

「そうさ。隣のミュンヒ男爵は襲われた。次はうちじゃないかって、ハウゼン男爵領も戦々恐々だ。まあ隣り合った貴族は襲わない敵だからもう来ないと思うが。何しろうちには特別な穴があるからな。アレを狙ってニセヤマトが来たら……と思うと夜もおちおち眠れない」

「穴?」

「そうだ。前庭に穴がある。見つからないように蓋をして土を被せて花壇を作ってカモフラージュしているがな」

「どこに続く穴なんだ?」

「世界の真実に続いていると言われている」

「言われている?」

「誰も確かめた者はいない。立ち入りが禁止されているから俺達も入ったことは無い」

「ニセヤマトが穴を狙っているのは確実なのか?」

「それは知らないが、神々はそう思っている。ミュンヒ男爵領よりも、ハウゼン男爵領の方が、防衛戦力が圧倒的に手厚い」

なるほど。ミュンヒ男爵領でほとんど抵抗を受けなかったのはそのせいだ。そう南部は考えた。

その時、いかめしい偉そうな男がジャンク屋に来た。「こら、加藤。こん

なところで油を売っているんじゃない!」

「失礼しました。護衛隊長どの!」加藤が慌てて立ち上がって敬礼した。

「しかも機密事項をぺらぺらと」

「すみません。以後気をつけます!」

「君も、今の情報は機密だから喋らないように」とその男は南部にも釘を刺した。

加藤の上司が帰っていくと加藤は振り返った。

「じゃあな、仕事に戻る」

「上司に怒鳴られていいのかよ」

「いいんだよ。ヤマトに乗っていた頃も、沖田艦長に叱られて格納庫掃除させられたことがあるんだ」加藤は笑った。「罰をくれる相手はいた方が幸せなんだよ。じゃあな!」

南部は肩をすくめた。

「加藤はあれだけ色男なのに、叱られる方がいいのか。これも天界の矛盾かな。いや、加藤の矛盾か」

白馬にとおころに戻ると南部は言った。

「加藤に会ったよ」

「ブラック・タイガー隊の?」

「そうだ」

「本物の加藤さんですか?」

「たぶん、本物だ」

「加藤さんは何か言っていましたか?」

「ハウゼン男爵の居城の前庭に、偽装された真実に至る穴があるという。防衛戦力はそれを警護するために集中されていて、ミュンヒ男爵領は警備が手薄だったそうだ」

「まさか」と人間形態だった白馬は口に手を当てて驚いた。「あまりにあっさりとミュンヒ男爵を攻略できたのは……」

「そうだ。我々は攻める相手を間違えたらしい」

「しかし……」と白馬は考え込んだ。「その話、信じて良いのでしょうか?」

「それは分からない。そもそも、加藤は真実に至る穴があると聞かされているだけで、加藤自身が見たわけではないようだ」

「もしや、加藤を黒虎に会わせたら黒虎が偽物であることを見抜いてくれるのではないのでしょうか？ 黒虎は加藤の愛機だったと自称しています」

「それも無理だ。加藤はハウゼン男爵の運転主だ。さすがにヤマトに加藤を連れて行けば、無関係の加藤を巻き込んでしまう」

「では黒虎を加藤のところに連れて行くのはどうでしょう？」

「黒虎になんて説明して連れて行くんだ？」

「上手い言い訳を思い付くまでは難しいですね」

「それに加藤も好き勝手に呼び出せるとは限らない、あいつは運転主の仕事をしているのだぞ」

「それは……。もしハウゼン男爵を攻めると加藤さんとも敵対してしまうと……」

「そうだ」

「非常に悩ましい状況ですね」

「もし敵が意識的にやったことならとても上手い。かつての仲間を重要拠点で雇っておけば攻撃の手が緩む」

「しかも、ヤマトの波動砲で撃てば消えてしまう……」

「もし、本当に攻撃するときには加藤をこっそり連れ出してくれるか？」

「それぐらいはお安い御用です」 白馬は微笑んだ。

「だが、これはギャンブルだがヤマトに戻って相談してみよう。このまま予定通りトリニタイト子爵を攻めるか、穴を前提にハウゼン男爵を攻めるか」

「まさにギャンブルですね。もしもスパイがいれば目標の変更賛成するとは思えません」

第1艦橋に全員が集まった。

ギル、南部、白馬、黒虎だ。ヤマトは艦内のどこでも会話に参加できる。

南部は事情を説明した。

ギルは「事情は分かった」と言った。

「事情は分かったが、あまりにも情報があやふやすぎる」とギルは続けた。「私はこのままトリニタイト子爵攻略に出発すべきだと思う」

「私はギル様の騎士だ。ギル様に従う」とヤマトも言った。

「だが、本当ならこれはチャンスだ」南部は主張した。「加藤は嘘を付く男ではない」

「私の決定に従えないのか?」

南部は言った。「これも天界の矛盾だな。絶対権力者の娘が絶対的な権力を振るえない。私は君に絶対服従を誓ってはいないから自由な意見を言えるはずだ」

「ならば民主主義的に決めよう、多数決だ。ここにいる5人が全員自分の意見を述べる。奇数だから同数にはならないはずだ。それで結論が出る」

「それが良さそうだな」南部は肩をすくめた。「それでいいよ」

「ではまず白馬」

「私は南部さんに賛成です」

「黒虎」

「俺はギルさまに賛成だ」

「南部は自分に賛成だな」

「そうだ」

「私も自分に賛成だ」

「だろうね」

「残りはヤマトだが、ヤマトは私に剣を捧げた騎士だ。結論は出たようだな。3対2で私の勝ち、南部の負けだ」

「いや待ってくれ、ギル様」とヤマトが言った。「私はまだ自分の意見を言っていない」

「トリニタイト子爵攻略に賛成しないというのか?」

「私は今苦しんでいる」ヤマトが言った、

「どういうことだ?」

「今、私は別の多数決に晒されている」

「別の……」

「ハウゼン男爵が穴を抱えているという情報は、加藤、南部、コスモゼロの3人が支持している。いずれも古い付き合いだ。それは無視できない。それを否定する意見はギル様とブラック・タイガーの2人だけだ。そして、2人とも古い付き合いとは言えない」

「待て。私は確かに古い付き合いではない。生前の世界ではヤマトに乗ったことがない。だか黒虎は乗っていたはずだろう?」

「黒虎はブラック・タイガーの偽物だ」

「なんだと?」とギルは眉をひそめた。

黒虎は横を向いて何も言わなかった。

「ちょっといいか?」と南部が話に割りこんだ。「黒虎が偽物だとするとヤマトも偽物ではないのか?」

「南部。正直に言おう。私はヤマトではなく、ヤマトのカケラなのだ。つまり不完全なヤマトなのだ。だから足りない部分をギル様が作った。波動砲の発射口が八角形だったのは、そこがギル様の作だからだ。しかし、全てが偽物というわけではない。波動エンジンは本物なのだ」

「ヤマト、おまえは……」

「だから昔から知っているぞ、砲術補佐の南部康雄」

「分かった」と南部は言った。「ではどうする、ヤマトよ。棄権するか?」

「いや、ヤマトは逃げない。最後まで敵に立ち向かう」

「結論を出したのか?」

「最初から出ている」

「えっ?」南部は驚いた。「どういうことだ?」

「実はギルも偽物だ。彼女はギルティ・プリンセスではない」

「全てが終わったな」とギルは言った。「ヤマトの宣誓はギルティ・プリンセス・オブ・アクエリアスに対するものだ。私はその者ではないと分かった以上、騎士としての宣誓は無効だ。私にはヤマトに命令を出す資格が無い」

「しかし、ジャッジメント・ソードを持っているぞ」

「それも偽物だ」とヤマトは言った。

「まさに欺瞞に満ちた世界か。ここが本当に死者の楽園、天界か分からなくなったよ」

「ああ、そうだったのですね」と突然白馬が言った。「とても簡単なことでした、南部さん」

「何が分かったのだ？」南部は白馬を振り返った。

「この欺瞞に満ちた世界を抜け出す方法が分かりました。地面をぶち抜くのです」

## 第2章 汚辱世界編

「相原。相原じゃないか！」と古代は叫んだ。

相原は古代の変わり果てた姿に絶句した。

「古代さん。本当に古代さんなんですか？」

「そうだとも」ボロを着た古代は相原の手をしっかりと握った「懐かしいなあ。おまえ本物か？」

「本物ですよ。当たり前です」

「いや、当たり前ではないのだ」

「といたしますと？」

「この世界には、本物と偽物がいる、誰かの頭の中で作り出されたイメージとして登場するのが偽物だ」

「どうやって見分けるんですか？」

「そうだな。魂と魂が引かれ合うというか、共鳴するというか。そんな感じかな」

「それは分かりませんよ」

「ははは、そうだな。まあ飯でも食べよ。大したものではないが」

「そうだ。厨房の設備はどうしたんですか」

「艦の全ては罪を償うためにウェミナの街に提供した。今や小さなコンロと鍋だけで調理をしているわけだ」

「酷い話だとは思いませんか？」

「酷いのは自分とヤマトだ。数え切れない人命を犠牲にしてきた」

「だからといって、これは何ですか。一方的に波動エンジンからエネルギーを吸い取られているだけでしょ」

「罪の償いだ。俺達はガミラス星を滅ぼした。我々はイスカンダルに行ければ良かった。ガミラスを滅ぼす必要なんて無かったんだ」

「古代さん!」

「相原、なぜ分からない! 俺達は罪人だ!」

「だからって、雪さんまで剥製にされてそれでいいんですか! ウェミナの街は古代さんが罪を犯した相手ですらないのに。しかも、不正がはびこる虚偽の街です。そんな相手に古代さんとヤマトが何もかも奪われて良いはずがありません!」

「そんな理屈を言っても罪が消えるわけではない」

「そうです、そうです。罪は消えません」相原も叫んだ。「でも間違っている。こんなことでは贖罪になりません」

「相原何が言いたい。俺が間違っているというのか?」

「間違っています。こんな古代さんは見たくなかった。こんなヤマトも見たくなかった」

「しかし、ここで波動エンジンを止めても街が停電するだけだ。確かに無駄な享楽や不正があるかもしれない。しかし、生活のために必要な電力もあるはずだ。それまでカットすることは俺にはできない」

「それこそが自己欺瞞の屁理屈です。生活に必要な電力を切れないことが分かっているからこそ、奴等は浪費をやめません」

「相原、2度とここに来るな」と古代は言った。「俺は俺の仕事があるんだ。せつかく採掘してきたコスモナイトを精錬して交換用の部品を作る必要があるんだ」

「古代さん!」相原は駆けだして、その場を離れた。

情けなくもあり悔しくもあった。

戦闘班長、艦長代理、そして艦長と出世した古代こそヒーローだったはずだ。だが、今の古代はどうなのだ。ヤマトをボロボロにしていわれのな



い相手に奉仕するだけで、自分の妻すら贖罪に差し出した。こんな古代など見たくなかった。

相原は荒野に座り込んだ、  
街に戻る気は起きないが、かといってヤマトに戻る気も起きない。

「やっと見つけた」と袋を抱えたミーオが来た。

ミーオは袋をドサッと置いた。

「生活に必要なものを持ってきたわ」

「しかし……」

「じゃあね」ミーオは戻って行った。

相原は袋を開く気になれなかった。

ミーオが立ち去ったあと、しばらくそのままにしていた。

既に何もやる気が起きなかったのだ。

古代だけは最後まで諦めないと思ったのに。

しかし、本当に風の音しか聞こえない荒野に座っていると、何でも良いから何かを行いたくなった。

相原は紙袋を開いて中を見た。

中身は「生活に必要なもの」ではなく、本の山だった。

「どういうことだ」

相原は考えた。

ミーオは相原を騙した。

この街は素晴らしいと理解させ、古代に会わせないようにした。

だが、それはミーオの本心ではないらしい。

ミーオは真実を知りたがっている。

そして、目に前には本の山。

相原は本を一冊手にとって開いた。

心理操作術の解説書だった。

肉体関係を経由して、女性が男性をコントロールする科学的な手法が考察されていた。

相原はその本を放り出そうとした。

馬鹿馬鹿しい。

だが、次の瞬間に気付いた。

森雪を剥製にしてミーオは森雪の代用品になったとしたら。

古代はミーオの仕掛けるこのコントロールの影響を受けるはずだ。

相原は真面目に本を読み始めた。

古代のあの態度がもしも精神のコントロールによるものなら、話は変わってくる。

相原はすぐに読み切ると、次の本を手にとった。

全て読み終わったとき、相原は確信した。

古代は今、ミーオと森雪が区別できない状態に陥っているはずだ。

知識として、森雪が剥製化され、ミーオが通ってくることを認識しているのだが、実際に目の前にいるミーオが森雪に見えるのだ。

だから、これだけ残酷なことをされても、それを喜んで受け入れることができている。ミーオとのセックス中なら森雪は古代にとって生きているのだ。

相原は対策を考えた。

認識を曖昧化してミーオと森雪の判別が出来ないようにしているのなら、絶対に認識せざるを得ない状況を作り出せば良いのだ。

つまり、二人並んで古代の前に立たせるのだ。

だが、それだけでは十分ではない。

催眠術の一種を併用して、森雪の服を着たミーオを森雪と誤認させているのだ。だから、森雪の服を森雪に戻さなくてはならない。

だが、話はそれほど単純には進まない。

街の住人はそれを阻止しようとするだろう。

当然だ。

そして、ミーオの望みは密やかだ。表だった街への反抗はできない。つまり、お願いしても森雪の服は脱がないだろうし、古代の前にも行かないだろう。

しかし、こうして本を相原に託した以上、相原がこれを読みこなし、そ

の方法を思い付くことを期待していたはずだ。消極的な協力は期待して良いはずだ。

相原は計画を練った。

杜撰すぎるアイデアだが、ミーオが消極的協力者ならこれで行けるだろう。

相原はヤマトのところに帰り、古代に耳打ちした。

それから相原はそのまま街に戻り、ミーオの住処に立ち寄った。

「古物商で重要なパーツが無造作に売られている」と相原は言った。「あれの使い方を教えるから、自分の私物だった通信機だけ取り戻したい。悪い取引では無いはずだ」

「重要なパーツってなに？」

「波動エネルギーが詰まっている自爆装置だ。あれから波動エネルギーを取り出せれば、この街の電力1年分は楽に賄えるだろう」

「波動カートリッジ弾のエネルギーなら全部回収済みよ」

「自爆装置のは回収してないだろ？」

「それはそうだけど」

「賢人会議の議長、つまり君の父上と話がしたい」

「手配するわ」

それから相原はミーオと連れだって、賢人会議議長つまりミーオの実家に乗り込んだ。議長はすぐに話に乗ってきた。

「それでどう使うのだね？」

「僕の通信機は返してくれるんでしょうね？」

「話が本当なら返す」

「では説明します。あれは、ヤマトの艦内でも主要なポストの人間にしか空けられません。権限を持っていたのは、沖田さん始め艦長職の方々、古代さん、島さん、真田さん、森さんだけです。僕は権限を持っていません」

「権限はどうやって認証される？」

「制服を着た本人の指紋で認証されます。つまり、この雪さんの剥製に

本来の制服を着せればそれで開くはずです」

「古代に協力させた方が早くはないかね？ 古代の制服は街の誰かが持っているはずだ」

「それではダメです。この情報は部外者に明かしてはならないものです。つまり、罪の意識で動いている古代さんは、たぶん協力しません」

「いいだろう。ミーオ、その服を脱いできなさい」

ミーオは奥の部屋に引っ込んだ。

そして議長は人をやって、問題のパーツと通信機を取ってこさせた。

ミーオは普通の町娘の服を着て、森雪の制服を持ってきた。

「ミーオ、それを着せてあげて」と相原は指示した。

ミーオは制服を剥製に着せた。

議長はパーツを森雪の指に押し当てた。しかし、開かなかった。

「開かないぞ」

「開きませんね」

「約束が違う」

「そうですね」

「これでは通信機は返せない」

「返さなくて結構です」相原は微笑んだ。「目的は達しました」

そして相原は窓の外に声を掛けた。

「今の光景を見た感想はどうですか、古代さん」

窓の外から古代の声が答えた。

「悪夢を見ていたような気がするよ。目が覚めた。俺は何とやることをしていたんだ。精神に干渉を受けていたのは事実だ。ミーオが通ってくるとまるで森雪がいるような気がしてきた。しかし、それはあり得ない。あり得ないのに気づけなかった。ありがとう相原」

「では約束は不成立なので、私は通信機を返して貰えません。これで文句はありませんね？」と相原は議長に宣言した。

「文句は大ありだ」と議長が顔を真っ赤にした。「おまえ、古代にセットした心理操作を無効化したな？」

「これで明日から電力が供給されるとは期待できませんね」

「謀ったな。真の目的は通信機ではなく、古代の覚醒か」

「用心棒を呼んで僕を暴力で叩きのめしますか？ でも古代さんの行動は止められませんよ。それとも古代さんも捕まえて叩きのめしますか？ 古代さんがいなくなったら誰も波動エンジンを修理できなくなりますよ」

そのとき。古代が部屋に入ってきた。

「懐かしい。この制服を着た雪を見るのは本当に久しぶりだ」

「なぜ逃げないんですか古代さん！」相原は叫んだ。

「議長。1つ提案があります」と古代は言った。「これからもずっと波動エンジンで電力は供給します。その代わり、相原をこのまま引き取って帰りたいと思います。どうでしょう」

「電力を人質に取られているのだ。イエスという他あるまい」

「ご配慮に感謝します」

それから古代は相原に向き直った。

「さあ、行こう相原」

「古代さん！」

「話は後だ」

相原はがっかりした。

ミーオが心配そうにやり取りを見ていた。

古代は議長の家から出た。相原も続いた。

ボロボロのヤマトに戻ってからやっと古代は口を開いた。

「さぞかし、俺を情けない男だと思っていることだと思う」

「そうですよ」

「しかし、電力供給を止める気は無い。意識操作から解放されてもだ」

「なぜですか」

「使命のためだ」

「何の使命ですか」

「相原。通信班長だったおまえなら分かるはずだ。使命は使命だ」

「分かりませんよ！」

相原は叫んだ。

「古物商に沖田艦長のレリーフが売られています。取り戻そうとは思わないんですか？ それに雪さんだって。剥製にされて悔しくないんですか？」

「相原。あのレリーフは偽物だ。偽物など、いくらでも勝手に売買すれば良いのだ。そう割り切っている」

「に、偽物？」

「精巧だから、よく調べないと分からないがね」

「まさか、それじゃ雪さんの剥製に手を出さないのも……」

「ああ。あれは本物の雪じゃない。偽物だ。誰かの自己満足のために産み出された虚構上の森雪だ。俺は虚構にはいちいち取り合わないことにしたんだ。雪と同じ格好をした女性が全裸で見世物になっていたら心が少し痛むが、それだけのことだ」

「でも、古物商で売られていたのはこのヤマトから取り外された部品ではないのですか？」

「このヤマトは、一部だけが本物だ。そして、他の部分は偽物だ。おそらくヤマトはいくつか分割されて天界に分散させられている。ここにあるヤマトはその1つに過ぎない」

「古代さん、そこまで分かっている、なぜこのようなことを続けるんですか」

「だから言っただろう」

「使命のためですか？」

「そうだ」

「堂々巡りですね」

「やむを得ない」

「じゃあ、1つだけお願いします。どれほど雪さんに似た女性であろうと、誘惑は受け入れないで下さい。また意識を操作される恐れがあります」

「そうだな。それは肝に銘じよう。真田藩に名前は似ているミーオに気を許したのが間違いだった」

「頼みますよ」

「分かった」

その時、町娘の格好のままのミーオが丘を上ってきた。

「ミーオ、どうしてここに。まさか、もう1回古代さんを誘惑して意識操作をせよと命令されたのか?」

「それはもう無理よ、手の内が読まれた以上、同じ方法は使えないわ」

「なら何だ?」

「この欺瞞に満ちた世界を抜け出す方法が分かりました。波動エンジンを全開して正面の壁を突き破るのです」

## 第2章 ヤマト 2010 界編

「太田。太田じゃないか」と島が叫んだ。

太田は左右を見た。

他の誰もいないようだ。

「えっ? 俺」と太田は自分を指さした。

太田は自分が緑の矢印のコスプレ服を着ていたことを思い出した。

だからヤマト乗組員の太田と間違われたのだろう。

「他にどんな太田がいるんだ」

「いえ、自分は違います」

「バカ、おまえが太田健二郎だろう?」

「そうですが別人です」

「言い訳は無用だ。今、ヤマトは人手が足りない。そんなところで油を売っているなら、手伝え」

ナデシコが叫んだ。「ケン兄ちゃん、行っちゃだめ!」

「太田、来い!」島が叫んだ。「おまえがいないから林がオーバーワークなんだ」

「ダメよ!」とナデシコも叫んだ。「もうヤマトは忘れて! 私だけを見て!」

太田はたとえ人違いでもヤマトに乗って見たかった。

しかし、ナデシコとも既に離れがたかった。

「島航海長」と太田は言った。「厨房は人手が足りていますか?」

「平田さんが悲鳴を上げている」

「ならば彼女も乗せてはどうでしょうか」と太田はナデシコを指さした。

「喫茶店での勤務経験があります」

「私コーヒー淹れるの下手だよ」とナデシコが力なく言った。

「平田さんが美味しい紅茶を入れてくれるから、問題無いですよ」と林が言った。「彼女なら艦内のアイドルです。乗せましょう」

「太田の知り合いなら信頼できる。乗艦を許可する」

「ありがとうございます」と太田はヤマト式の敬礼で答えた。

「ならば2人とも付いてこい」

太田はナデシコの手を引いて合流した。

そして、そのまま島と首相の会見に同席することができた。

「艦長代行の島大介副長です。航海長と兼任しています」島は挨拶した。

「さっそくだが、アレはいったい何だね?」と首相は東京湾に浮かんだ物体を指さした。

「地球防衛軍の宇宙戦艦ヤマトです。日本艦隊に所属します」

「しかし我々の日本に、そのような戦艦は存在しない」

「同じ世界では無いと思います」

「その根拠は?」

「我々は、この世界に入り込んだまま、ずっと出口を探して飛び回っていました」

「日本各地で目撃されたヤマトとは、そのために飛び回っていたヤマトなのかね?」

「おそらくそうだと思います」

「その結果分かったことがあるかね?」

「どこまでも進んでいくと出発点に戻ってしまいます。しかし、地球を一周することはできません。この世界には日本列島と周辺の陸地しかありません」

「分かりやすく言ってくれ」

「北海道に向かって飛んでいると、いつの間にか沖縄に出ています」



首相と側近達がざわめいた。

「空も、光る板に空が描いてあるだけで、ヤマトが上昇しようとする  
と衝突します」

「しかし、我々の空港からは高空に舞い上がる飛行機も外国に行く飛行  
機も飛び立っているぞ」

「飛行機は実際には飛び立っていません」と島は映像を見せた。「これが  
ヤマトから撮影した空港です」

飛び立つ飛行機は1機もなかった。

「では、君たちの望みはなんだね?」と首相は言った。

「この世界から出ることだけです」

「そのための補給を必要としているわけだね?」

「そうです」

「ならば日本政府として回答する」と首相は言った。「東京港に巨大な軍  
艦がいることは、少々国民に危険な印象を与える。あのヤマトを横須賀に  
移動してはくれまいか。その代償として、必要な補給物資は政府が責任を  
持って提供する」

「分かりました。その程度の距離の移動はお安い御用です」島はうなず  
いた。

握手をして会見は終わった。

車で海岸まで送られて、そのままヤマトの艦載艇でヤマトに戻った。太  
田とナデシコも一緒だ。ナデシコが不安げに太田を見上げた。

「大丈夫だ……たぶん」太田は勇気づけるように言ったが太田も不安だ  
った。

ヤマトの太田だと思われてそこにいるが、第1艦橋で勤務を要求された  
瞬間に嘘がばれる。

結局、ヤマトに乗ったと言う思い出しか残らないだろう。

しかし、太田はそれで良いと思った。

それこそが、最大の望ましい成果だった。

ナデシコは待っていた平田に連れられて厨房に歩いて行った。

太田は、島の後について第1艦橋へのエレベーターに乗り込んだ。  
ドアが開いた。

確かに閑散としていた。

アナライザーはいるが、古代も南部も相原も真田もいなかった。

島は、自分の操縦士席に座った。

「ヤマトはこれより横須賀に向けて水上航行を行う。誘導の船が出るので、くれぐれも他の船には当たらないように。民間船に装甲は無いのだ。衝突すれば相手の船を沈めてしまう」

それから、島は振り返った。

「何をしている。太田」島は太田に命じた。「席について操縦を補佐しろ」

「了解しました」太田は敬礼して、太田の席に座った。

ああ、これでヤマトの太田ではないことがばれてしまう、と太田は思った。

しかし、一度でも良いから太田の席に座ってみたかったのだ。

だから、とにかく命令通りに座った。

ところが椅子に座った瞬間、目の前の操作パネルの使い方がすぐ分かった。

太田は航路哨戒レーダーを起動し、周辺の船の配置と移動ベクトルを瞬時に把握した。

「航海長」と太田は言った。「出航は1分だけ待って下さい」

「どうした」と島が振り返った。

「民間船が航路を横切っています。あれを先に行かせてから移動を開始した方が安全です」

「分かった。総員、出航は1分待て」

太田は慄然とした。

操作パネルの使い方が分かるだけではない。

太田の情報に従って、島がヤマトを動かしているのではないか。

島の命令で太田が動いているのではない。

太田の情報が、島のヤマト操縦に影響を与えているのだ。

そしてようやく太田は理解した。

この場所に来ることそのものが、太田の最終目的だったのだ。

航路チャートの情報が届いたので、それも重ね合わせて表示した。

ヤマトはゆっくり海上を進み、横須賀港に入港した。

太田はその間様々な情報を航海長に伝達し、ヤマトの安全な入港をアシストした。

「エンジン停止。速度ゼロ。しばらく、ここに停泊する」と島が宣言した。

太田もホッとした。

「全乗組員へ。半舷上陸を許可する。ただし、あまり遠くには行くな」

「航海長、今のヤマト乗組員は何人ぐらいなんですか？」

「50人ぐらいかな」

「古代さんは？」

「いない」

「相原は？ 南部は？ 真田さんは？」

「相原と南部はいない。真田さんは工作室に閉じこもってこの空間を研究中だ」

「そうですか」

「半舷上陸中だが太田は上陸するなよ。第1艦橋は人手不足なんだ」

「休まないと死んじゃいますよ」

「食堂なら行ってももいいぞ。知り合いの女性が気になるんだろう。様子を見てこい」

太田は喜んでその言葉に甘えた。

不思議なことでの食堂の場所は分かっていた。

ナデシコが食堂のウェイトレスとして働いていた。

「太田」と平田が迎えてくれた。「あれはいい娘だな。働き者だよ。それに可愛いからもう艦内のアイドルになりつつあるよ」

「そ、そうですか、平田さん」太田は少し嬉しかった。

しかし、ナデシコに話しかけると凄惨な形相で睨まれた。

「楽しい長期東京デートだと思ったら何よこれは。あなたと離れたくないから来たけど、私はなに？ 軍艦の食堂のウェイトレス？ 忙しく働けて？ お楽しみはどこに行ったの？ 田舎に帰って婚約発表のシナリオはどうなるのよ！」

「そ、そう言われても……、離れたくなかったから」

「私もそう思うから来たけど。要するにあなたがヤマトに乗らなければそれで良かったのよ」

「えっ？」

「私とヤマト、どっちを取るの？」

その時、食事している誰かが「ナデシコちゃん、御飯おかわり」と言うと、鬼の形相が天使の笑顔に変わった。

「はい。ただいま！」

太田はその場に座り込んだ。

女の変わり身は恐ろしい……。

太田は平田に紅茶を頼んだ。

ナデシコが太田のところに戻って来た。

「あなたがヤマトにいる限り私もヤマトを降りないわよ」ナデシコは宣言した。「加茂市のあなたの実家に挨拶に行くまではね」

太田はとても微妙な心情になった。

ヤマト乗組員として太田健二郎の意識と、関西在住の独身男性の太田健二郎の意識が拮抗していた。

太田の心の中で、憧れのヤマトに乗れた喜びと、懐かしいヤマトに戻ってきた懐かしさが共存していたのだ。

「俺はいったい何者なんだ？」

それでも平田の紅茶は美味しかった。

太田はその足で工作室に向かった。

真田に相談するためだ。

太田は包み隠さず真田に説明した。

真田は作業の手を止めた。

「この空間の不可思議な特性と関連があるのだろう」と真田は言った。

「不可思議な特性とは？」

「おそらく、この空間は現実ではない」

「真田さん？」

「このヤマトすら現実かどうか分からない。更に言えば私自身もそうだ」

「どういう意味ですか？」

「この世界では、宇宙戦艦ヤマトとは 1970 年代に作られたアニメだという解釈で一貫している。しかし、ヤマトが実際に存在するのは、ヤマトで航海した我々には当たり前だ。ならばこの世界の方が虚構だ。事実として、この世界の日本には外国が存在しない。存在するという幻想を信じているだけだ」

「真田さんの仮説を聞かせて下さい」

「この世界は罠だ。ヤマトまたは乗組員の誰かを捕獲しておくための罠だ」

「ではすぐに脱出を」

「しかし、通常兵器では天井に穴が空かない。波動砲では穴が開くが、通過する前に閉じてしまう」

そこで太田は閃いた。

「波動砲から波動エネルギーをリークさせて天井に突っ込むのはどうでしょう？」

「そんな方法を既に試していないと思うのかね？」

「す、すみません。素人の馬鹿な思い付きです」

「いや待てよ」

「なんでしょう？」

「もう一度計算してみよう。前回は角度が悪かっただけかもしれない」

「お、お願いします」

太田は第 1 艦橋に戻って、自分の席に座った。

特にやることはなかった。

その時、スマホが鳴った。

まだこの世界の太田健二郎のスマホを持っていたのだ。

電話を取ると、義姉だった。

「義姉さん……」

「ナデシコがドタキャンして、悪かったわね」

「えっ?」

「やっとな私の耳に入ったのよ。ナデシコはバイトの面接が入って東京に行けなくなったって」

「待ってよ、義姉さん。じゃあ、僕と一緒に東京に来た女性は誰?」

「えっ? 誰と一緒に行ったの?」

「それはこっちが聞きたいよ。あれは誰なんだ?」

「何の話? 分かるように話してよ」

「質問していいか? ナデシコって、メイド喫茶で働いていたのか?」

「いいえ」

「ケン兄ちゃん大好きって言ってたか?」

「言ってないわ。そうじゃなくて、喫茶店の客の何人かとできてしまって、それでクビになったほどですもの」

「なんだって? それじゃあ、これまでナデシコだと思っていた女性は誰なんだ?」

「だから何の話?」

「わ、分かったからともかく今は電話を切るぞ」

太田は通話を切って慌てて食堂に舞い戻った。

太田はナデシコを捕まえると壁に押しつけた。

「ナデシコを騙るおまえは誰なんだ……」

「え……。ばれちゃったの?」

「そうだよ。おまえは何者なんだ!」

「ケン兄ちゃんが好きな一般女性……といっても信じてくれないわよね」

「当たり前だ!」

「でも、これだけは信じて。最初は変態オタクだと思っていたけど、今はけっこう気に入っているの。あなたとの関係。このまま結婚してもいい

と思ったのは本音よ」

「正体も明かさないう女の言い分など、信じられるか!」

その時、太田の方が大きな手で掴まれて放り出された。

「ナデシコちゃんに、なんてことをするんだ!」

他のヤマト乗組員達が、ナデシコの周りに立って彼女を守った。

完全に太田の方が悪者だった。

「ごめんね、ケン兄ちゃん」とナデシコが謝った。「でも、ケン兄ちゃんが悪いんだよ。こんなにケン兄ちゃんのことを好きなのに」

「どうやって証明するんだよ」

「船を降りるわ」

ナデシコは走り出した。

太田は屈強な乗組員達に囲まれた。

「ナデシコちゃんを泣かせるとは悪い奴だ。ナデシコちゃんを連れ戻してこい!」

太田は尻を叩かれて、横須賀市街に放り出された。

「航海長から上陸許可ももらっていないのに……」

太田は頭をかいて、ナデシコの捜索を開始した。

街を彷徨っていると、ナデシコの悲鳴が聞こえた。町外れの人気の無い方向からだ。

角を曲がると、人気のない暗がりでは白い裸身が目立った。

ナデシコが服を脱がされて米兵数人からレイプされていた。

「見ないでっ!」とナデシコが叫んだ。

「もう見た」と太田は言った。「1つ質問するぞ。これはおまえが望んでいないレイプってことでいいんだな?」

「バカあ。助けてよ!」

既に終わったとおぼしき米兵が太田に殴りかかってきた。

この世界に外国は存在しないはずなのに、外国人兵士が存在する矛盾に悩みながら太田は格闘になり、そしてのされた。太田は格闘向きでは無かったのだ。

太田は縛られて地面に転がされた。

快樂と苦痛の入り交じったナデシコの声最後まで聞かされた。

米兵達が立ち去ると、残ったナデシコは太田をなじった。

「バカッ! 何で助けてくれないのよ!」

「力及ばずに済まない」太田は謝った。「だからこの紐を解いてくれ」

「知らないっ!」

ナデシコは立ち去ろうとした。

「頼む。おまえの正体が何者であれ、愛しているんだ。だから勝てないと分かってても挑んだんだ」

ナデシコは立ち止まった。

そして戻って来て太田を縛る紐を解いた。

「あんたバカね」

「自分でも分かってるよ」

太田は立ち上がった。

「被害届は出した方がいいか? それとも出さない方がいいか?」

「私、公式にはこの世界にいないはずの女だから、被害届は出さないで」

「それだとレイプされ損だぞ」

「いいの」ナデシコはうなずいた。「私も腹を括ったわ」

「どう括ったんだい?」

「ヤマトに戻るわ」とナデシコは言った。「そして、あなたとヤマトの行く末を見届ける。そして、願わくばあなたのお嫁さんになりたいわ」

「しかし、誰だか知らない君のクライアントはそれを許すかい?」

「許さなければ私は消されるかもしれない。でも愛は不滅よ」

「そうだな。愛してるよ」

二人はキスした。

「じゃあヤマトに戻ろう。航海長の許可無く船を出たんだ。早く戻らないと大目玉を食うぞ」

破れたナデシコの服は買い直し、2人は何も無かったかのようにヤマトに戻った。



しかし、戻った太田を出迎えたのは怒った島ではなくご機嫌の真田だった。

「太田、計算結果が出た」真田が嬉しそうに1枚の紙を太田に渡した。

「なんです、これは」

「この嘘にまみれた自称西暦2010年という世界を脱出する方法だよ」

「ほんとですか?」

「角度が悪かったのだ。波動エネルギーをリークしながら、45度の角度で天井に突っ込むのだ」

「ならば、さっそく島さんに報告を」

そのまま真田と一緒に太田は第1艦橋に上がった。

「島、ちょっとこれを見てくれ」真田が紙を見せた。

「なんでしょう?」と島は振り返った。

「この欺瞞に満ちた世界を抜け出す方法が分かったのだよ。これで空をぶち抜くんだ」

### 第3章 神界戦争編

「この欺瞞に満ちた世界を抜け出す方法が分かりました。地面をぶち抜くのです」

白馬の言葉に南部は驚いた。

「意味が分からない。どういうことなんだ?」

「いいですか、南部さん」

「なんだ?」

「ギル様は偽物だった。ジャッジメント・ソードも偽物だった。黒虎も偽物だった。そして天界も実は死者の安息の場所ではなかった。そうですね?」

「そうだ」

「ならば地獄も本当にあるのでしょうか?」

「えっ?」

「我々が地下を目指さなかった理由はなんでしょう?」

「それは自分には分からない」

「それは地下へ地下へと進むと地獄界に出てしまうことを誰もが怖れていたからです」

「そ、そうだな。誰でも地獄送りが怖い」

「ですが、地獄など無いとしたら?」

「そうか。地底にこそ何かがある。知られては不味い何かがある。そういうことだな?」

「そうです」

「しかし、ハウゼン男爵領の穴を経由するのが正しいルートではないのか?」

「ハウゼン男爵領は警備が厳重です。仮に勝てても大ダメージは避けられません。それに黒虎やギル様は勝てないように内部で工作するでしょう」

「ではどうしろと」

「波動エネルギーを波動砲に発射口からリークさせながら地面に突っ込むのです。ヤマトの強度とパワーなら地面ぐらい押し切れます」

「待ってくれ。ヤマトの意見も聞かないと」南部は天井を見上げた。「ヤマト、おまえはどう思う」

「厚さ1万メートル以内の岩盤なら突き抜けることができるだろう。もっとも天界で1万メートルという数字に意味があるのかは分からないがな」

「分かった。さっそく準備を頼む」

「それよりも南部」とヤマトは言った。「黒虎が緊急ハッチから飛び出した。ブラック・タイガーに変化して攻撃してくる気だ。対艦ミサイルをぶら下げている。有事にはこうして我々を葬るつもりだったようだ」

「まさか」とギルが青ざめた。「まだ私が乗っているのだぞ!」

「ギル、あんたは仲間から見捨てられたようだな」

「私が迎撃します」と白馬は開け放たれたハッチから飛び出して優美な戦闘機に変化した。

だが、ぎりぎりです間に合わず、ブラック・タイガーは翼下の対艦ミサイルを発射した。

「ヤマト、パルスレーザー掃射開始!」南部が叫んだ。「黒虎は忘れろ、ミサイルにだけ集中しろ!」

「了解だ。パルスレーザー掃射開始!」

「無駄だ」とギルが言った。「黒虎と黒虎のミサイルに向かっては撃てないように修理されている」

「ダメだ、南部。レーザーが出ない」

「白馬だけが頼りか!」

南部は外を見た。コスモゼロは強引に反転すると、着弾寸前の対艦ミサイルを銃撃で撃破した。

ヤマトに激突しそうになったが、コスモゼロは離脱し、そしてブラック・タイガーと空戦に入った。

「コスモゼロを支援できる火器は無いのか?」とヤマトが質問した。

「波動砲以外の全ての武器は我々が用意したダミーだ。機能するように見えるが、我々には撃てないようになっている」

「しかし、波動砲ではコスモゼロまで巻き込んでしまう」

「見守るしかない」

やがてコスモゼロは翼から煙を出しながら落ちていった。

「白馬っ!」南部は叫んだ。

勝ち誇ったようブラック・タイガーが旋回し、そしてヤマトに向き直った。

「対艦ミサイルはもう無いが、機銃で第1艦橋の我々を狙う気だ」とギルが言った。

しかし、墜落したかに見えたコスモゼロがいきなり森の中から飛び出した。

そして、ブラック・タイガーの背後を取って機銃を一斉射した。

ブラック・タイガーは墜落していった。

第1艦橋に戻って来た人間形態の白馬は腕を怪我していた。

「これぐらいは何でもありません」と白馬は言った。「かすり傷です」

「無事で良かった」

「皆さんこそ無事で良かったと思います」白馬は言った。

「あとはギルの扱いだな」と南部はギルに向かい合った。

ヤマトが言った。

「ジャッジメント・ソードで人が消えるトリックの種明かしを期待しても、バチは当たるまい」

「やむを得ないな」とギルは言った。「3対1では勝ち目が無い」

「では説明を」南部はうながした。

「地獄など存在しない以上、ジャッジメント・ソードも地獄送りはしない。予め姿を消せるサクラを用意して、彼を消してみせただけだ。つまり、消えた者達は自ら消えたのであって、ジャッジメント・ソードの効能などではない」

「簡単なトリックだな」

「そうだ。だが誰でも地獄送りが怖い。有効なトリックであった」

「ヤマト」と南部は言った。「俺もおまえに質問がある」

「なんだ」

「なぜギルが偽物と知って従った」

「自分にも目指すべき女神が欲しかったのだ。スターシャやテレサのような……」

「気持ちは分かる。スターシャの心を古代の兄貴が射止めて、テレサの心を島航海長が射止めなければ自分だって……と思ったよ」

「そうか。ならば南部、おまえが艦長席に座れ」

「なぜだよ」

「今のヤマトを導けるのはお前だけだ」

「私も賛成します」と白馬も言った。「私は格納庫の方が落ち着きます。艦長席に座るべきはあなただけです」

「分かった」

南部は艦長席に座った。

「なぜかな。感慨が何も無い」南部は言った。「昔はここに座った古代が羨ましかったものだがな」

「感慨が無いからこそ、お前が適任なのだ」とヤマトは言った。

「ならば言おう。グズグズしていると誰かが上手い対策を考えるかもしれない。可能な限り素早く地底を目指すべきだろう。ヤマト、エネルギーは十分か?」

「ブラック・タイガーに何も撃てなかったので、エネルギーは消費していない。波動エネルギーは満タンだ」

「ではすぐに波動砲の発射口からエネルギーをリークしつつ地面に飛び込めるか?」

「たやすいこと」

「ならば最後にギルに質問だ」と南部はギルに視線を向けた。「降りるならここで降りていいぞ。ヤマトにいても辛いだけかもしれない」

「いや。最後まで見届けたい。黒虎に私ごとヤマトを狙われて分かった。私はもう要らないスパイなのだ。戻っても消されるだけだ」

南部は突然ギルが小さく見えた。

ギルは怯えていた。

艦長席の南部にすがっていた。

嘘でヤマトを支配していた女は、今や嘘がばれてヤマトの庇護を失った。ヤマトの支配者である南部しか彼女を守る者がいない。

「いいだろう。左列最前の席に座れ。俺の席だが、今そこで操作して有効な武器はない。そこに座ってベルトを締めておけ」

ギルはうなずいた。

「私はどうしましょう?」白馬が言った。

「99センチのスーパーバストを持ったスーパーナインナイン君には、オッパイレーダーの席が似合いそうだ。森雪の席に座ってベルトを締めてくれ」

「了解です」

白馬の席に着いた。

南部もベルトを締めた。

「よし、いいぞ」南部はヤマトに声を掛けた。「準備完了だ。ヤマト地面

に向けて発進!」

「了解した。波動エネルギー、リーク開始」

ヤマトは艦首を荒野の地面に向けた。

### 第3章 汚辱世界編

「この欺瞞に満ちた世界を抜け出す方法が分かりました。波動エンジンを全開して正面の壁を突き破るのです」

ミーオはそう言った。

「どういうことだ。説明してくれ」

「話は簡単です。この地底空洞世界は二重空洞だったのです」

「二重空洞?」

「この世界を囲む岩は実際には風船の膜のように薄い岩で、それを突き破るともう1つの真の空洞に出ます。そちらが本物の世界です」

「待ってくれ。そんな空洞があれば、自分はこの世界に来たときに見ているはずだ」

「相原さんは見たはずですよ」

「そうか、道に迷って試行錯誤したときに見た大空洞のことだな?」

「おそらくそうです」

「壁を突き破って、大空洞に出ると何が起こる?」

「そこはウェミナのように欲望にまみれていない正常な天界の一部です。ウェミナで行われている不正を告発することができるはずです。そして、神兵の部隊がウェミナに乗り込んで事態を正常化できるはずです」

「なるほど。それが君の望みか」

「それが、私が知りたかった世界の真実ですよ」

相原は振り返った。

「古代さん、話を聞いていましたか?」

「聞いていたよ」

「このヤマトでも、波動エンジンを全開して正面の壁を突き破るぐらいのことはできますね?」

「理屈の上ではできそうだが、それを実行するとウェミナに接続している電力供給ケーブルが切れてしまう。つまり、ウェミナは停電だ。それでもいいのか?」

「汚い犯罪都市ですよ!」

「しかし、犯罪とは関係無く生きている一般市民もいる」

そのとき、慟哭のような激しい音が響いた。

「波動エンジンだ。こんな音を出したのは初めてだ」

「もしや、他のヤマトのカケラと呼応してヤマトが叫んでいるのではありませんか?」相原は言った。

ウェミナの街の明かりが瞬いた。

「電力供給が不安定になっているわ」とミーナが顔色を変えた。

「波動エンジンを点検しよう」古代は機関室に向かって走った。「やはり、機関部員でもない自分の修理には限界があったのかな」

すぐに古代は向きを変えた。

「スパナが第1艦橋に置きっぱなしだったはずだ。取ってこないと直し方が無い」

古代は第1艦橋に向かって階段を駆け上がっていった。

「古代さんには悪いけど」と相原は言った。「ここで波動エンジンを全開させるのが正解に思える」

「ええ。私もそう思うわ」

「そして、波動エネルギーを発電機に供給しているこのバルブさえ閉じれば、噴射口に波動エネルギーが行くはずだ」

「機関部員でもないあなたにわかるの?」

「波動エンジンは分からない。しかし発電機は分かる。通信班長はね。無線機を動作させる関係で、電力の基礎知識はあるんだ」

「分かったわ」

「ミーオ、加速が始まったら何が起こるか分からない。何かに掴まっている」

「掴まったわ」

「ではバルブを閉じるぞ」

相原はバルブをまわした。

何も起こらなかった。

しかし、ゆっくりとヤマトの残骸は動き始めた。

次々とケーブルが引きちぎられて後方に取り残されていった。

ウェミナの明かりがゆっくりと消えていった。

徐々にヤマトは加速していき、相原も手近な機械にしがみついた。

「何をしたんだ!」

スパナを持った古代が階段から降りてきたが、振動が激しくすぐに階段にしがみついた。

そのままスパナが床に落ちた。

ヤマトの加速はまだまだ続いた。

### 第3章 ヤマト 2010 界編

「この欺瞞に満ちた世界を抜け出す方法が分かったのだよ。これで空をぶち抜くんだ」

そう言われて島は驚いた。

「こんなに簡単なことだったのか」

「そうだ。角度の問題だ」

島はナデシコを振り返った。

「これからヤマトはこの世界を脱出する。おそらくこの世界に戻ってくることがはない。下船するなら今のうちだ」

「いいえ。私はケン兄ちゃん、いえ、太田さんと一緒に行く決めました」

「ならこのまま行くのだね?」

ナデシコはうなずいた。

その時警報ブザーが鳴った。

太田は慌てて自分の席についた。

「未確認飛行物体多数飛来。ミサイルです」



「なにっ!？」

島は操縦手席に駆け込んで叫んだ。

「垂直上昇！」

「ミサイル数が増えました」

「後部エンジン噴射！」

ヤマトは巨体を横須賀港の空中に浮かせて前進を始めた。

ミサイル群が横須賀港に着弾して、火の海になった。

「今のミサイルはどこからだ。被害はどれぐらい出ている」

「海上自衛隊、米軍ともに全艦出港済みで被害は出ていません。被害は港湾施設と民間地域だけです」と太田は報告した、

「どういうことだ」

「分かりました。ミサイルを撃ってきたのは海上自衛隊と米軍の艦隊です」

「まさか！」

「真実に気付いた我々を始末しようとしているのかも知れない」と真田が言った。「この世界は欺瞞世界だ」

「では、このまま一気に天井に突入しましょう」

「そうも行かないようです。海自と米軍の艦艇が空中に浮遊を始めています。ヤマトの進路を塞ごうとしています」

「なんだって!？」島は目を見開いた。

確かにヤマトの前方に、浮遊するイージス艦やフリゲート艦が出現し、盛んにミサイルを撃ってきた。

「だとすると、あのミサイルも西暦 2010 年の技術水準ではないかもしれない。電子妨害で対処できると思わず、きっちりパルスレーザーで対処しろ！」と島が命じた。

パルスレーザーがミサイルを次々と迎撃した。

しかし数発はヤマトに着弾した。

「比較的小型だから損害は警備だが、もっとでかいのを食らうとヤマトも危ないぞ」真田が自分の席で振り返った。

そのとき、太田には対処方法が分かった。

「アニメと現実を混同してはいけません」太田は叫んだ。

「何を言ってるんだ太田」島が叫んだ。

「アニメと現実を混同してはいけません」太田はもう一度叫んだ。

「そんなアニメみたいなことは現実であるはずが無い……か。現実の否認か」真田は考え込んだ。「現実が欺瞞である以上、もしかしたら効果があるかも知れない」

真田はマイクを取って艦内全てに流すようにセットした。

「副長の真田だ。今、空飛ぶ水上艦にヤマトは包囲されつつあるように思えるが、それはただのアニメだ。現実には船が飛ぶはずがない。現実とアニメを取り違えてはならない。特に街で機動戦艦ナデシコとかいうアニメのDVDを買い込んだ機関部員！ 戦艦は空を飛ばない！」

ヤマトを囲んでいた敵艦が消え、横須賀の街も燃えていなかった。そして、何事も無かったように、横須賀港には多くの艦艇が停泊していた。

「どういうことですか」

「これも欺瞞現実の一種だよ」真田が説明した。「さあ、この空に突入するぞ」

「分かりました。まだ横須賀に上陸したままの乗組員を回収して、突入しましょう」

「よし、上陸中の全乗組員の時計に、『ヤマトに來たれ』のサインを送れ」と真田が指示した。

さすがに宇宙戦士達の覚悟は違った。

全員が棧橋で整列して待ってきた。

彼らを乗せると、即座にヤマトは離床した。

「よーそろ」島は舵を引いた。「上げ舵 45」

太田はベルトを確認して身構えた。

振り返ると他の席でベルトを締めたナデシコと目があった。

大丈夫、と太田は目で励ました。

ヤマトは空の天井に突入した。

## 第4章 天界編

相原は見た。

ヤマトの進行方向に真上から岩を突き抜けて突っ込んでくるヤマトと、真下から岩を突き抜けて突っ込んでくるヤマトを。

3つにヤマトは瞬時に距離を縮め、避ける暇もなく1つになった。

白い光が世界を支配し、相原は目を閉じた。

似たような光景を、南部と太田も見ていたとは、思いもしなかった。

相原が目を開けると、そこにあるのは完全に装備が揃ったヤマトの第1艦橋だった。

乗員も増えていた。

古代の他に南部も太田もいた。

ミーオもいた。

名前を知らない女性も2名いた。

南部が「ギル、大丈夫か!」と叫んだので1人の名前はギルだと分かった。

太田が「ナデシコ、無事か!」と叫んだのもう1人の名前はナデシコあだと分かった。

そして、ウェミナの街の方から見たことがある者達が歩いてきた。

本来はヤマト乗組員でありながら、街の住人という幻想の世界を生きてきた人達だ。

彼らはヤマトに乗り込んで配置についた。

「市長!」

「これからは徳川機関長と呼んでくれ」

彼は機関長の席についた。

徳川機関長が叫んだ。

「波動エンジン始動!」

「古代さん!」と相原は振り返った。

古代は艦長席に座っていたが、無表情だった。これだけ状況が激変して

も、何も感じていないようだった。

「目を覚まして下さい!」

そのとき、大スクリーンに映像が投影された。

クイーン・オブ・アクエリアスの姿だった。

「今こそヤマトは本来の姿を取り戻しました。ヤマトの魂は3つに分割されて封印されていましたが、皆さんの活躍で1つになりました。もはや、元通りの宇宙戦艦ヤマトは戻ってきたのです。よくぞ皆さん、試練に打ち勝ちました。さあ、天界の秩序を乱す悪のルガル大神官との最終決戦は目の前です」

「ルガル大神官、それが我々の戦うべき真の敵の名前なのですね!」相原は叫んだ。

「その通りです。善悪の最終決戦によってのみ、天界の安定は保たれます。さあ行きなさい。天界の祝福されし聖なる戦士達よ」

その時、むっくりと古代が艦長席から起き上がった。

「違う」と古代は小さく言った。

「古代さん?」相原は振り返った。

「断じて違う!」古代は叫んだ。

「何が違うのです?」とクイーン・オブ・アクエリアスが聞き返した。

「これは全部まやかしだっ!」と古代は叫んだ。「これは俺達を封じ込めるために、あなたが作り出した虚構だ。ここにヤマト乗組員の大多数はいない。あなたが言う天界の秩序とは、本来の秩序とは別物だっ! そして別物の世界を強制することで発生した矛盾こそが天界の矛盾なのだ!」

その瞬間、パリンと音がして世界が割れた。

残ったのは元通りのヤマトの残骸だけだった。

いや、そうでは無い。

相原が見回すと、光り輝くウェミナの街は存在しなかった。暗い瓦礫の山しかなかった。そしてヤマトには波動エンジンも残っていなかった。ケーブル類はヤマトに食い込んでおらず、散乱していた。

機材が失われた第1艦橋に呆然と立っているのは、古代、相原、南部、

太田の4人だけだった。

希望に満ちたヤマトの復活は幻だった。

相原は既に夢も希望も失われたと思った。

しかし、古代が叫んだ。「この時を待っていた」

「古代さん、どういうことですか？」相原は振り返った。

「我々が本当に必要としていたのは、ヤマトではないし、ヤマトの全乗組員でもない。誰かの妄想が産み出した人間なら要らない。それは妄想世界を出られないからだ」

「ならば本当に必要なものとは？」南部が質問した。

「4つの本物の魂だ」古代は言った。「今、見せかけの人間、見せかけの世界は滅した。残ったのは本物の魂だ。そして、今ここにそれは4つある。相原、南部、太田、そして自分だ」

「4人いたら何だっていうんですか」太田が叫んだ。

「閻魔大王の拘束を解除できる。閻魔大王は今両手両足を拘束されて自由に動けない。しかし、両手両足の計4本同時に解除の鎖を引かねば閻魔大王は解放できない。つまり4人必要だったんだ」

「まさか古代さんは、4人揃うまでクイーン・オブ・アクエリアスの術中にはまったふりをしていたのですか!」

「相原が目を目覚まさせてくれなかったら、本当に術中に落ちていたかも知れないよ。ありがとう相原」

「いえ、それぐらいならいくらでも……」

「なあそれよりナデシコはどこだ？」と太田が言った。

「ギルもない」と南部が言った。

「そういえば、ミーオもない」

階段を白馬が駆け上がってきた。

「うわっ。馬が!」と太田が叫んだ。

「安心して下さい、太田さん。彼女は古代さんのコスモゼロの化身です」

「お久しぶりでございます。古代さん」と白馬は人間の姿になって言った。

「本当に君はコスモゼロなのか？」

「はい。この日が来るのをずっと待っていました」

「だが君の魂では鎖を引けない。引く資格があるのは人の魂だけなのだ」

「分かっています。しかし、お手伝いできればそれだけで幸せです」

古代はうなずいた。「残っていてくれて嬉しいよ、コスモゼロの化身の白馬よ。これで1人は馬に乗れる」

「古代さん、いったい何を計画しているのですか？」相原は質問した。

「ここまで来た以上全てを話そう」

「お願いします」

「夢枕に沖田艦長の姿をした閻魔大王が立って助けを求めた。しかし敵は狡猾で強力だ。絶対確実にと言える時まで、真の意図は誰にも明かせない」

「真の意図とは？」

「閻魔大王を救出し、矛盾の無い死者の楽園としての天界を取り戻す」

「済みません、古代さん」と太田が言った。「素晴らしい話とは思いますが、俺はどうしても消えたナデシコが気になります」

「俺も消えたギルが気になる」と南部も言った。

「そうだな。相原もミーオが気になるだろう」と古代は言った。

「はい。まあ……そうです。こっそりと便宜を図ってくれましたから」

「ギルとナデシコと言ったかな。ミーオと同じだとすると、敵のスパイだ」

「その通りです」と南部はうなずいた。「でも愛しています。大切な女性です」

太田もうなずいた。

「ならば、やはり閻魔大王を救出するのは早道だ。閻魔大王こそ全ての死者を統括する人物。天界の全ての者の居場所を全て把握できるスーパーガイだ」

「閻魔大王になら居場所が分かるはずだと？」

「そうだ」

「では早く出発しましょう」南部が急かした。

「そうだな」

一同は第1 艦橋から階段で地面に降りた。

そして旅の準備を整えた。

「古代さん」相原は質問した。「なぜウェミナの街は廃墟になってしまったのですか?」

「もともと廃墟だったからだ。エネルギーを浪費する光り輝く都市は幻影でしか無かった。もともと滅んでいたのだ」

「まさか。波動エンジンからエネルギーを供給されていたのに?」

「彼らはヤマトから全てを奪った。その時に波動エンジンを残すわけがない。波動エンジンを含む全ての装備を奪い去り、その富で享樂をむさぼり、そのままあっさりと滅んでしまった。浪費された富は一瞬で使い尽くされ、残ったのは借金だけだったのだ。自力で発電所を作るゆとりすら残らなかった。そのための資金すら酒や服や享樂に化けたのだ」

「では、なぜ3つのヤマトが合体したのに、波動エンジンすら残らない残骸のヤマトになってしまったのでしょうか」

「理由は閻魔大王が知っているはずだ」

「結局、閻魔大王に会う必要があるわけですね」

「そういうことだ」

「場所は分かっていますか?」

「分かっている。ここから徒歩で1週間ぐらい旅した先の砂漠だ」

「地下空洞から出るのですね?」

「そうだ」

「しかし、経路は分かるのですか?」

「コスモナイト採掘という名目で調査済みさ」

古代は笑った。

「さすが古代さん」

古代は白馬を振り返って言った。

「白馬には相原を乗せてやってくれ。いちばん体力が無さそうだ」

「あ、ずるい!」と太田が叫んだ。

「時々には太田と南部も乗せてやれ」古代が言った。

「承知しました」白馬はうなずいた。

岩の割れ目を伝って地上に出る途中で古代は小休止した。

「あったあった。ここだ」と古代は岩の割れ目に隠したコスモガンを取りだした。「コスモガンが4丁ある。無いよりはマシだ。全員1丁ずつ持って行け」

「用意周到というわけですね」と相原は感心した。

地下世界から出ると太陽がまぶしかった。

ゆっくりと徒歩旅行を続けていると白馬が言った。

「歩いて前進するのは無駄ではないでしょうか。私がコスモゼロに変形すれば、無理をすれば4人ぐらい乗せられます」

「それはやめておいた方がいい」と古代は言った。「コスモゼロで飛べば目立つが、閻魔大王を解放するまでは目立ちたくない」

「分かりました。やめておきます」

「我々、なんだか西遊記っぽくありませんか?」と相原が言った。

「あ、分かった」と太田が言った。「相原さんが白馬に乗った三蔵法師。古代さんが孫悟空。南部さんが沙悟浄。で、俺が猪八戒。俺が猪八戒? そんなあ」

「いいじゃないか。猪八戒だって正義ヒーローの1人だ」古代が笑った。南部だけが「これが西遊記の真実か」と苦笑いしていた。

しかし、旅をする彼らの前に立ちはだかる敵がいた。青い肌の男達が数人前方に見えた。

「南部、偵察に行くぞ」と古代は命じて先行した。

太田と相原は白馬と一緒に後から見ていた。

「ゲール、我々は当たりだったようだ」と見知ったドメルの子が笑った。

「おまえはドメル!」と古代は叫んだ。「どういうことだ」

「クイーン・オブ・アクエリアスの依頼で、ヤマトに因縁のある敵将が集められて搜索していた。ガルマン・ガミラスのダゴンとか、彗星帝国の



ゴーランドって知ってるか」

「聞いたことがあるような……」

「しかし、クイーン・オブ・アクエリアスの依頼だ。諸君らをこの先に行かせるわけにはいかない」とドメルは旨を張った。「ゲール、瞬間物質移送機準備」

「準備完了です」

「ゲッター、バーガー、クロイツ、ハイデルン、整列!」

4人の部下が並んだ。

「全員ワープ光線のエリアに入りました!」

「よし、ワープ!」

ドメルがスイッチを押すと、4人はいきなり白馬のところに瞬間移動した。白馬と太田と相原が驚いてあどずさった。

4人は彼らに殴りかかった。

「こ、古代さん、助けて下さい!」と白馬が叫んだ。

「ひい!」バーガーに殴られて太田は腕で頭をガードしてしゃがみ込んでしまった。相原もすぐに転んで起きられなくなった。

ハイデルンは、白馬の口に太くて赤い人参を押し込んでいた。「ドリルミサイルをくらえ!」

「瞬間物質移送機!」古代が叫んだ。「って真田さんなら言いそうだ」

「まさか!」と太田が叫んだ。

「デスラー戦法か!」と南部が叫んだ。

「なに? 今なんと言った?」と急にドメルが表情を変えた。瞬間移動した4人も戻って来た。

「だから、デスラー戦法だと……」と南部の声が小さくなった。

「瞬間物質移送機を使った戦法はドメルのオリジナルだ。総統のアイデアではないぞ」

「でもデスラー総統も使っていましたし」

「総統が?」

「そうですよ! デスラー艦の艦首に瞬間物質移送機を付けて!」と南部は

重ねて訴えた。

「ゲール。重要な用事ができた。これからデスラー総統を探すぞ」

「この連中は始末しないので?」とゲールは付かないライターでドメルのたばこに火を付けようとしつつ言った。

「もっと重要な用事だ。というよりも、その話が事実なら彼らは倒せない」

「それはどうして?」

「総統によるアイデア盗用の証人だからだ」

「えっ……」ゲールは目を丸くした。「あの、私は総統への忠誠心だけは負けまいと思ってここまでお仕えしてきたのですが」

「それがどうした」

「総統を告発するなら、あなたの副官はできません」

「なんだと!」

ドメルとゲールは殴り合いを始めた。

ゲッター、バーガー、クロイツ、ハイデルンが殴り合いを止めに入ったが、ついでに殴られると彼らも殴り合いに参加していった。

「おまえがヤマトの戦闘機隊をちゃんと引き付けて置かないから、こっちのレーダー破壊が不徹底だったんだ!」

「何を言うか! おまえの仕事が不十分だから雷撃機隊の損害も増えたんだ!」

「こっちなんか、鈍重な重爆撃機 1 機で突っ込んだんだぞ。部下と一緒に偉そうに言うな!」

相原はハッと気付いた。

「古代さん、今のうちに行きましょう」相原はそっと古代に耳打ちした。

「ああ」古代はうなずいた。「全員、この隙にこっそり前進しよう」一行は足音を殺しながら前進した。

するともう 1 人のガミラス人がそこに立っていた。

「誰だっ! おまえも敵か!」

「いえ。私はクイーン・オブ・アクエリアスに雇われた連中とは別口で

す。ただ気になって見に来ただけです。私はタランといいます」

「何が気になったのだ？」と古代が質問した。

「ドメル将軍、瞬間物質移送機を使おうとしていましたが、あれはドメル将軍の死後、総統がアイデア使ってデスラー戦法ってことになってしまったので。デスラー戦法と言われたらドメル将軍は怒るだろうな……と思いでまして」

「もう怒ってます」と南部が告げた。「自分がつい、デスラー戦法だっけってしてしまったので」

「あちゃー。ガミラス最大のパンドラの箱が開いてしまいましたか」

「ずいぶん詳しいな」

「名前を付けるときに、デスラー戦法はドメルに悪いからやめておきなさいって忠告はしたのですが……」

「タラン将軍……」

「では。とぼっちりが怖いので、私は帰ります。閻魔大王ならその丘の向こうですよ。では、さらば」

「行こう」と古代が全員をうながした。

ここまで来れば、目的地は目と鼻の先だった。

閻魔大王が拘束されているという場所に近づくと、警戒の敵兵が数人いた。

太田がひょうきんな踊りを見せて気を引いている間に奇襲を仕掛けて敵兵全員を掃討した。もちろん、殺すことはできない。しかし、しばらく戦闘不能にはできた。それで十分だった。

閻魔大王は身長数メートルの巨人だった。

「おお、古代か！」閻魔大王が叫んだ。「待ちかねたぞ」

「閻魔大王とお呼びすれば良いのか、それとも沖田艦長とお呼びすれば良いのか」

「どちらでも構わん」

「どういうことですか？」と相原が叫んだ。南部も太田も疑問は同じだった。

「ディンギル戦役の時に艦長職に復帰した沖田艦長とは、実は閻魔大王その人だったのだ」

「死んだ沖田十三の魂と1つになり、ヤマトを導いたのがわしじゃ」

「まさか!」相原は驚いて口を開いた。「我々が生きているとき、既に閻魔大王が現世に来ていたと!」

「いかにも」

「いったいどうして!」

「現世と来世の境界を曖昧化する陰謀を阻止するために」

「説明して下さい!」

「その前にわしを自由にしてくれ」

相原達は一斉に鎖を引いた。

閻魔大王の拘束が解かれ、閻魔大王の手足が自由になった。

「ではこの場を離れよう。全員、わしの手の上に乗りたまえ」

閻魔大王はそのまま飛翔するように走り、数十キロ離れた岩山の隙間で止まった。

「ここなら簡単には見つかるまい」

そしてゆっくりと座り込むと閻魔大王は話し始めた。

「ヤマトと死についての話を始めよう」

「ヤマトと死……ですか?」南部が質問した。

「そうだ。最初のヤマトの目的地、イスカンドルがそもそも死者の世界だった。生きているのはスターシャだけ。なぜ彼らは大人しく墓に入ったのか。理由を知りたいとは思わなかったのかね?」

「確かにそう言われて見ると、ヤマトと死はつながっています」

「ヤマトの最初の敵であるガミラスも、失敗すれば死あるのみ。最初の敵指揮官であるシュルツは戦って死ねと言われ、実際に戦って死んだとか」

「それも死ですね」

「実はヤマトの戦いは敵も味方の死者だらけなのだ」

「戦争ならば当然では?」と南部が言った。

「いや。イスカンドル人は戦争で死んだわけではないのだ。おかしいと

思わないかね?」

「確かに」

「しかし、死者が喋った光景を君たちは見ているはずだ。スターシャが喋り、クイーン・オブ・アクエリアスが喋るのも見たはずだ」

「あれは幻のようなものでは?」と太田が言った。

「そうとも言えるし違うとも言える。実はアクエリアス人は天界から現世に影響を与える技術を開発していたのだ。つまり死ぬことは永遠に続く権力を手に入れることに等しい」

「まさか。イスカンドル人も永遠に続く権力を夢見て……」

「かもしれない。一方のガミラスは天界の存在を知っていた節がある。だから死ねという要求は残酷ではない。永遠の安息なのだから。君たちが考えるほど残虐とは言えない」

「ではディンギルも」

「そうだ。あれも死後の世界の存在を知っていた。そもそもアクエリアス人と直接つながっていたのだから、知っていて当然だ。だから、弱き者を置き去りにして旅立つことは、弱き者を過酷な旅に巻き込まずに安息を与える手段なのだ」

「ではディンギルの死に急ぐような戦い方も……」

「安息を求めての行為だろう」

「神殿のある宇宙船で攻めてきたのも」

「神殿は天界と現世を繋ぐ施設だ」

「なるほど」

「結局のところ、ディンギルこそが最も天界に近いヤマトの敵だったのだ」

「質問があります」相原は言った。

「なんだね」

「3つのヤマトが1つになったら、残っていた波動エンジンまでなくなり、ヤマトは完全に戦艦としての機能を停止しました。なぜですか?」

「そうです」と太田も言った。「自分が乗っていたヤマトは、乗組員は減

っていたもののまだ戦艦としての機能を保っていました」

「では答えよう」と閻魔大王はうなずいた。「天界の神々が無理を押し通した結果として、天界の矛盾が広がっていった。その広がり、より応用的な物語の存在を解体してしまったのだ。だから、物語はより原始的な形態を取る。分かるかね?」

相原には分からなかった。

「つまり、イスカンドルに放射能除去装置を取りに行くヤマトの物語は解体され、ヤマトは存在し続けることができなくなった。そういうことだ」

「ではヤマトを失った我々はどうすればいいんですか?」と南部は質問した。

「君らにヤマトはもう必要が無い」

「なぜですか?」

「ヤマトの魂、ヤマト魂は君たちの中にあるからだ」

「分かりました」と古代はうなずいた。「ヤマト魂さえあれば戦えます」

「しかし、コスモガンだけで戦えるものなのですか?」南部が質問した。

魂があれば戦えると言い切るのが古代なら、武器の問題として考えるのが南部だと相原は思った。

「実はコスモガンすら本質では無い」と閻魔大王は言った。「ここから先は武器の戦いではなく、魂の戦いになるからだ」

「それは思いが強い方が勝つという意味ですか?」

「そうではない。魂は魂なのだ。思っているだけではダメなのだ」

「ならば」と相原は最も本質的なことを質問した。「我々はどこに行き、誰と戦って勝つ必要があるのでしょうか?」

「うむ。そこが最も肝心だ」と閻魔大王はうなずいた。

「教えて下さい」

「天界の全ては天界の軸で統括されている。ゆるやかに回転している天界の軸だ」

「そこを目指せと」

「そうだ。君たちが軸さえ掌握できれば、わしが天界の秩序を回復でき

る」

「なぜ閻魔大王自身が乗り込まないのですか?」

「あるべき天界の秩序が、わしを物事の裁定者と規定しているからだ。当事者にはなれない。もし、当事者になってしまえば、また別の矛盾が生じるだけだ」

「では、軸の掌握には誰を打倒すべきなのでしょうか」

「クイーン・オブ・アクエリアス、その人だ」

一同は息を飲んだ。

「本当にクイーン・オブ・アクエリアスなのですか?」と相原は質問した。

「美しい女王に見えましたが」

「待て」と南部が遮った。「アクエリアスで我々の前に現れたクイーン・オブ・アクエリアスは、敵はこの星にはいないと言った。しかし、山木隊が南半球に敵のプラントと機動部隊を発見した。南半球もこの星の一部ではないのか?」

「クイーン・オブ・アクエリアスは嘘をついていたと?」

「俺には」と古代は言った。「ここに敵はいないから早く出て行けと言われた気がした」

「そう言われて見ると」と太田も考え込んだ。「あの時のクイーン・オブ・アクエリアスは、ディンギル星人のせいでアクエリアスの地球到達が六千年早まったと言っているだけで、アクエリアスそのものがディンギル星人の敵だなんて一言も言ってない」

「あの時のクイーン・オブ・アクエリアスのことはよく覚えている」と古代がまとめた。「あの女性は、愛の試練は厳しいものと言った。しかし、愛とは優しさも厳しさも共存しているものではないのか? 厳しさだけを前面に打ち出して、それに打ち勝つことだけを要求するのは本当の愛だとは思えない」

「うむ」と閻魔大王はうなずいた。「良いところに気付いたな。クイーン・オブ・アクエリアスの愛は非対称のひずんだ愛なのだ」

「愛に名を借りた搾取……ですね」

「そうだ。古代よ、南部よ、相原よ、太田よ、そして白馬よ、真の愛を取り戻せ」

「分かりました」一同はうなずいた。

「天界の軸は遠い」と閻魔大王は言った。「しかし、空を飛ぶことはお勧めできない。天界の軸に戦闘部隊が配置され、多数の超長距離対空ミサイル車両も含まれるという。天界では落とされても死にはしないが、前進は阻止される」

「まだまだ歩いて行けと?」

「それも面倒であろう。白馬に新しい力を授けよう」

閻魔大王が手を一振りすると、白馬がランドクルーザーに変形した。

「今日からその形態をランドクルーザー・ヤマトと呼ぶが良い」

「今までと違って全員が乗れるのはいいな」と古代は言った。

「こちらも全員をお乗せできて光栄です」と白馬も答えた。

「しかし、この車があっても、おそらく目的地まで一ヶ月以上は掛かるだろう」閻魔大王は言った。「これが地図だ」

古代は地図を受け取った。

ほとんどは砂漠か荒野だった。

「閻魔大王」と古代は言った。「我々は行方不明の女性も探しています。ミーオ、ギル、ナデシコと言います。クイーン・オブ・アクエリアスのパイだった女性ですが、今では大切な女性です。彼女らの居場所が分かりますか?」

「そうだ、それが大事なことだ」と太田が身を乗り出した。

「調べてみよう」閻魔大王は指を額に当てた。「その3名は……粘土をこねて作った疑似生命体だな。ならば、もともと魂は無いはずだ。しかし、どうやらお前達と接するうちに魂が産まれてしまったようだ。この世界では魂ある者が一級の市民と見なされるので、その3名も保護すべき立派な市民だ」

「場所は? どこにいるんですか?」と太田は勢い込んだ。

「天界の軸だ」



一同は黙りこんだ。

どうやら、どこをどう叩いても天界の軸とやらに行く必要がありそうだ。  
相原はそう思った。

「ならば出発しよう」と古代は言った。「時間は無駄にできない」  
一同はうなずいた。

「成功を祈る」閻魔大王が敬礼した。「可能なら君らへの増援も手配する」  
「増援ですか？」

「君らに負けない魂を持った者をこれから探す」

「分かりました。期待します」

「わしに連絡が必要な時は夢枕で呼び出せ」

「了解しました」と古代も敬礼して白馬に乗り込んだ。

車の中で、太田がボソッと行った。

「天界の軸って、略して天軸？」

「まさに西遊記だな、猪八戒」

「その名前で呼ぶなよ、沙悟浄」

「考えてみれば」と古代は言った。「俺は相原に助けられた。相原が三蔵法師で俺が孫悟空ならまさに西遊記通りだな」

「ならばこの4人で旅を続けるのか？」

「西遊記は白馬を入れて5人組ですよ」と相原は言った。「白馬も立派な登場人物です」

「ありがとう、相原さん」と白馬が言った。車の姿になっていても会話には不自由しないらしい。

相原は助手席からナビの操作パネルで検索した。「いえ、どうやらバリエーションによってはもう一人いるようです」

「もう一人？」

「1977年に、当時の人気お笑いグループのザ・ドリフターズが演じた人形劇の『飛べ!孫悟空』には、三蔵法師、孫悟空、沙悟浄、猪八戒の他に、カトウという登場人物が存在したようです」

「なぜ増える？」

「ザ・ドリフターズは5人組なので、三蔵法師、孫悟空、沙悟浄、猪八戒に当てはめると1人余るからという事情のようですね」

「白馬が数に入っていないのは寂しいですね」と白馬が言った。

「そうだな」

「しかし、よりによってカトウか？」南部が笑った。「加藤三郎が我々に合流したりしてな」

一同は笑った。

「名前的一致はただの偶然だ」と古代は言った。「加藤三郎の名前は親からもらった名前だからな」

「そうですね」と南部もうなずいた。

その時、白馬が急停車した。

「そうでもないようです」と白馬は言った。

誰かが車の前に倒れていた。

「加藤！」古代が飛び出した。

まさに倒れていたのはブラック・タイガー隊隊長だった加藤三郎だった。車に収容された加藤は意識を取り戻した。

「おい、古代じゃないか。南部も、太田も、相原も。どうしたんだ、みんな揃って」

「それよりお前だ。なんであんな場所に倒れていたんだ」

「なぜかハウゼン男爵の運転主をクビになってな」と加藤は言った。「理由は分からないが、ハウゼン男爵領の警戒が解除されたのと一緒だ」

「それで？」

「新しい仕事を探したが見つからなくてな。こんな遠くまで歩いてきたが、気力が尽きて倒れたってところだな」

「今はどうだ？」

「みんなの顔を見たら気力が沸いたよ」

「それは良かった」

「ところで、みんなはどこに行くところなんだ？」

「天界の軸つまり天軸だ。そこでクイーン・オブ・アクエリアスを倒してみんなの大切な女性を助け出す」

「クイーン・オブ・アクエリアスに喧嘩を売るだって？ 正気か？」

「それが閻魔大王様の望みだ」

「お前達どうかしているぞ」

「一緒に来いとは言わない。近くの街で降ろしてやる」

「待て待て。一緒に行かないなんて言っていないだろ？」

「なぜだ、加藤」

「置いてきぼりなんて酷いぜ。一発大きな花火を打ち上げるなら、俺も絶対に連れて行け！」

「加藤……」

「とんでもない相手に喧嘩を売るのは慣れてるぜ。そもそもガミラス相手に戦ってイスカンドルまで行ったときだって、ヤマトが反乱を起こして白色彗星と戦った時だって……」

「そうだったな」

「俺はみんなの役に立ちたい」

「命がけだぞ。下手をすれば天界から消滅だ」

「それぐらいの覚悟は最初から出来ているさ」

「白馬は1人増えても大丈夫か？」と古代は質問した。

「この車は8人乗りです。5人なら軽いものです」と白馬は答えた。

「では行こう」古代は宣言した。

「おう」と加藤は答えた。

相原はため息をついた。「どうやら、この旅は閻魔大王の茶目っ気で、西遊記から少し逸脱しているようですね」

「悪い状況では無いぞ」と南部が考え込んだ。「西遊記の物語に沿って我々が動いていると相手が思い込むのなら、相手が思いも寄らないジョーカーを手に入れたことになる」

「ところで、男だけで旅をするのはどうかと思うよ」と太田は言った。

「いや、俺の大切な女性はナデシコだけだけどね。それでも色気が無いと

言うか……」

「まさかと思うけど」と相原がナビで検索して言った。「もしも、閻魔大王の狙いが西遊記に見せかけて飛べ!孫悟空の物語になぞらえることなら。狂言回しにピンクレディーが登場したとある」

「ピンクレディーってなんだ?」

「1970年代の女性2人組のアイドルグループだ。セクシー衣装で歌ったらしい」

「それはいいな」と太田はうひひと笑った。

「下品な奴」と南部はいやな顔をした。

古代と相原は笑った。

「あながち冗談でもないようです。ヒッチハイクのサインを出している女性2人組が見えます」

「なんだって?」相原はダッシュボードに身を乗り出して前方を見た。

「スターシャさんだ。隣は火星で死んだサーシャだぞ」古代が目丸くした。

車は停車して2人が乗り込んできた。

「スターシャさん。我々はクイーン・オブ・アクエリアスと戦うために天界の軸に向かう途中です。それでも、我々の車に乗り込みますか?」

「はい。古代さん」とスターシャはうなずいた。「私はアクエリアス人とクイーン・オブ・アクエリアスには筋を通さねばなりません。同行を希望します」

「どういうことですか?」

「私から説明します」とサーシャが言った。

「あなたの声は初めて聞いたような気がします」

「初めての出会いの時、既に死んでいましたから」

「確かに」

「では説明します」とサーシャは言った。「イスカンダルはアクエリアスから天界から地上界に介入する技術供与を受けていました。ですから、イスカンダルの人達は、星の寿命が尽きると分かると、喜んでみな墓に入り

ました。墓から現実世界に影響を及ぼせるからです。あなたは不自然に思ったことは無いかしら。目の前に強大な軍事国家ガミラスがあるのにイस्कन्दルが攻められていない理由」

「まさか」

「そうです。死者が現実世界に影響を及ぼせるからガミラスは手が出せなかったのです」

「なるほど……」

「しかし、彼らの提供した技術は限定的だったのです」とスターシャは言った。「私はそれを改良して、自分と限られた数名に適用しました。しかし、他のイस्कन्दル人は……」

「何が起きたのですか?」

「消えてしまいました」

「どうして」

「現実世界に影響を及ぼした後、天界に戻れず、そのままどこにも行けずに消えてしまった者ばかりです。つまりイस्कन्दルはアクエリアスに滅ぼされたのです」

「まさか。イस्कन्दルを滅ぼしたのは暗黒星団帝国ではなく……」

「星としてのイस्कन्दルを爆破したのは私自身。しかし、人民としてのイस्कन्दル人を滅ぼしたのはアクエリアス人です」

「そうでしたか」

「しかし、最も許せないのは」とスターシャは言った。「守のことです」

「兄さんのこと?」

「そうです」

「そういえば天界に来てから会ったことがない。話すら聞こえてこない」

「そうですね。守は天界のことを知っていたので、喜んで藤堂長官を救うために命を投げ出しました。しかし、守は天界に来ませんでした」

「なぜですか」

「クイーン・オブ・アクエリアスを倒せる戦士と認識され、天界に来る途中で消されたのです」

「消された？」

「どうやら、閻魔大王が既に守の夢枕に立って、スカウト済みだったようです」

「ならば僕は兄の代役なんだろうか」と古代は考え込んだ。「またしても代役……」

「いいえ」とスターシャは言った。「あなたの方が本命です」

「なぜそう言い切れるのですか？」

「守は、あなたをクイーン・オブ・アクエリアスのところに送り込むために囮として消されたのです。守は自らそれを志願しました。弟のために」

「兄さん……」

「しかし、感傷に浸っている時間はありません。もうすぐ最初のハードルがあなたを待っているはずですよ」スターシャはきっぱりと言い放った。

「最初のハードルとは？」

「地球には好きになれないタイプの人があります」

「は？」

「古代さん。あなたは、自分の愛した女性が今どうしているか分かっていますか？」

「いいえ。誰かの妄想が作り出した偽物の森雪としか出会っていません。そういう森雪は何人も見ました」

「本物の森雪の魂は、ある特定の人達が厳重に捕らえて隠しているのです」

「なんだって？」

「そして今あなたは彼らに遭遇しようとしている。森雪を人質に取られて、はたしてあなたは戦えますか？」

「もしも、古代さんが戦わないとしても」サーシャが言った。「私は森雪を奪還しなければなりません」

「なぜですか？」

「私と森雪は同じ魂を共有しているからです」

「えっ？」と古代は微笑んだサーシャを振り返った。

「あなた。最初に森雪を見た時、そっくりだと思ったでしょう?」

「なぜそれを……」

「私も雪さんをサーシャと見間違えました」とスターシャはうなずいた。  
「魂を共有している以上、当然です」

「古代さん。待ち構えている男達があります。ヤマトの制服を着ています」と白馬が言った。「機関部員です」

砂嵐の中から男達が出てきた。

車は停車した。

「蕨!」と古代は叫んだ。

「久しぶりだな古代。よりによって、クイーン・オブ・アクエリアスに楯突こうとは。おまえはもっと賢い男だと思ったよ」

「雪はどうした!」

「我々の花嫁なら大事に扱っているよ。子孫繁栄のための大切な道具だ」

「蕨、分かっていないな。天界では結婚という制度はなく、花嫁も存在しない。それに女性は妊娠せず子供もできない。夫婦の縁からも親子の縁からも解放されるのが天界だ」

「ああそうだ。森雪はおまえとの結婚というしがらみから解放されて、我々の花嫁になったんだ」

「話にならないな」と古代は毒突いた。

「それとも、お前の暴論はこれもイスカンドルの地震観測データから導き出された結論だとか言い出すのか?」

蕨は揶揄するように言った。

「イスカンドルの地震は関係無い!」古代は叫んだ。

「古代さん」とスターシャが言った。「あの男はある意味で狂っています。現世で果たせなかった屈折を天界で無限に繰り返して悦に入っているだけです。それはそれで天界のありようの1つですが、そのために雪さんが犠牲にされているのは許せることではありません」

「これも天界の矛盾か」

「古代さん、悪いことばかりではありませんよ」とサーシャが言った。

「死者はそれ以上殺せない。しかし私たちは、雪さんを救出できればそれで十分です」

「そうか。加藤、救助ヘリコプター出動！」

「しかし……」と加藤が迷った表情で言った。

相原は思った。それはそうだ。ヘリコプターが飛べればこんなに苦勞をして地面を走って旅をしていない。

「救助ヘリコプターだ」と古代は重ねて言った。

「了解！」旧に加藤の表情が明るくなった。

加藤が車から飛び降りた。

「馬鹿め。そんなもので飛んだら、防空レーダーに引っかかって、あつと間に撃ち落とされるだけだ」藪があざ笑った。

相原もそう思った。

「どうかな」と古代が反論した。「全員コスモガンで奴等を狙え！」

全員が散開して物陰に入り、コスモガンで敵を狙った。

やはり南部の射撃が一番的確だった。

相原の射撃はほとんど役に立っていなかった。

サーシャがやって来て相原からコスモガンを取り上げた。

「銃はこうやって撃つのよ！」

サーシャは、いきなり最初の一発で命中させた。

「スターシャ姉様みたいに、おしとやかじゃなくて残念だった？」

「い、いや。その銃は任せるよ」

その時、背後で加藤が叫んだ。

「古代、オーケーだ。雪さんは助けたぞ！」

思わず相原は振り返った。

半裸でぐったりした森雪が加藤の手の中にあった。

「古代さん、これはいったい」相原は質問した。

「銃撃戦をしている間に、加藤に迂回して救助してもらったのだ。さあ、撤収するぞ。殲滅は目的じゃない」古代は言い切った。

相原はやっと理解した。ありもしないヘリコプターを出動させる命令は、



敵の注意を空に向けさせつつ、加藤に対してはこっそり助けてこいという意図を示していたのだ。

しかし、雪を奪還されて怒りに狂った藪達はより激しく撃ってきた。

「これじゃ頭さえ上げられませんよ」相原はぶやいた。

「ホント、何ムキになってるのよ」とサーシャもぶやいた。

いくら銃が上手くてもサーシャも頭を上げられないのでは意味が無かった。

そのとき、スターシャが立ち上がった。

「戦争は止めて下さい」スターシャがきっぱりと言った。

双方が銃撃を辞めた。

スターシャの言葉にはそれだけの重みがあった。

「姉様……」とサーシャも銃を下ろした。

「サーシャ、あなたもはしゃぎすぎです」

サーシャは反省して小さくなった。

その様子が相原には少しおかしかった。

スターシャは藪達の前に出ると言った。「あなた方は、イスカンダルでの反乱に失敗して死んだために、まだそのことにこだわっているようですね。しかし、ここは天界です。同族の女性はいくらでもいます。特定の誰かを支配する必要など無いのです」

「だがここには森雪しか同族の女性はいない」

「多くの街には大勢の地球人女性はいます」

「街は無人だった」

「それはイスカンダルの街です。ここは天界です」

「違う違う。騙されないぞ。見たんだ」

「あなたが見たのはイスカンダルの街です。ここではありません」

「俺達はイスカンダルに残留するんだ!」

サーシャも前に出た。「あんたら他に女がいくらでもいるのに、何も見えていないわけ？ 何に目が眩んでいるの？ そりゃ雪さんは素敵な女性よ。でも、あんたたちの口調は女なら誰でも良いつて感じよね。なら何で他の

女を見ないわけ?」

「いたぞ。ここに女が2人」と薮が言った。「本当に森雪以外の女がいた」

「へっ?」と不気味な目つきの薮達に見られてサーシャが脂汗を流しながら一歩後退した。

「サーシャ、挑発しすぎです。王族としての節度を考えなさい」とスターシャに軽くたしなめられた。

「ご、ごめんなさい。姉様。つい、カッとなって……」

「この際、イスカンドルの女でもいい。抱きたい、抱きたい」

性欲の亡者となった薮達反乱隊員達がスターシャとサーシャに迫った。

「二人を守るぞ!」と古代が命じて全員が前に出ようとした。

しかし、サーシャがそれを止めた。「古代さん達は動かないで」

「なぜだ」

「姉様が本気の顔をしているから、もう大丈夫」

「サーシャ、あなたも手伝うのですよ」とスターシャが振り返った。

「手伝うって何を?」

「彼らを受け入れるのです」

「まあ、しょうが無いわね」サーシャはうなずいた。「姉様のお許しが出たから私を好きにしていいわよ。さあどうする気? 裸にする? キスする? その先も?」

「その先だ。やりたいことを抑えていたら僕は壊れてしまう」

「いいわよ。誰が来るの? 1人ずつでも全員一緒でもオーケーよ」

「おい」と古代が仲間に声を掛けた。「やはりこれはやり過ぎだ。助けに入るぞ」

しかし、その必要は無かった。

スターシャとサーシャが服の上から自分の身体に触らせると、反乱隊員達はそのままその場で倒れ込んでいったのだ。

「どういうことですか?」

「彼らは自分が受け入れられないとっていたようです」とスターシャは言った。「捕らえた雪さんも受け入れなかったのでしょうか。だから、受け

入れる女性が出てくれば彼らの妄念は消えます」

「しかし。単に触れただけではありませんか。しかも服の上から」

「受け入れる意志さえあれば、それで良いのです」

「さすが姉様」とサーシャが目を丸くした。「そういうことだったのね」

「あなた、本当にこの男達を迎え入れる気だったのですか？」

「え……」

「さあ、サーシャ。雪さんのところへ」

「は、はい。すぐに」

サーシャは目を閉じた雪を抱きしめた。

「何をしますのですか？」

「2つの魂を1つにします」

サーシャの身体が透明になった。

そして、森雪の身体の中にサーシャの身体がゆっくりと入っていった。

完全に2人が1つになると森雪は目を開いた。

「古代君、わたし……」

「雪！」古代は雪を抱きしめた。

スターシャは微笑んだ。

「最初から1つだった魂です。上手く癒合したようですね」

「スターシャさん」と相原は質問した。「いったい、これにどのような意味があるのですか？」

「雪さんの魂は拉致されて乱暴されたのでしょ。ダメージを受けていました。しかし、サーシャの魂と合体することで、その傷を癒すことができたのです」

「しかし、スターシャさんは妹がいなくなってそれで良いのですか？」

「いますよ、雪さんの中に。サーシャはいなくなってなどいません」

「なるほど」

筋が通っているような、通っていないような話だった。

車中で森雪はゆっくり話し始めた。

といっても、難しい話は無い。

死んで若い身体になってこの天界に来たが、すぐに藪達に捕獲されたという。

そして不愉快なことをされ続けたのだ。

「古代君。私たちがいるのは本当に天界なの？ 全ての煩惱から自由になったはずじゃないの？ なぜ私は苦しんだの？」

「それが天界の矛盾という奴だ。我々が戦う理由そのものだ」と古代は答えた。

「閻魔大王が天界を掌握していた時代はどうなんでしょう」と相原は質問した。

「たとえば、A という人が B という人に危害を加えることで満足する場合。被害者の B という人は A という人が妄想した虚構の B になり、本物の B の魂が危害を加えられることはない。危害を加えられた B は、A しか見えないのだ。ところが、今は本物の B の魂に危害が加えられる場合がある。つまり天界の矛盾が発生しているのだ」

「古代君はその矛盾を解消するために戦っているのね？」

「そうだ」

「ならば、私も協力するわ」

古代と雪は相変わらずラブラブだった。

相原はため息をついた。

身を寄せ合う古代と雪を見るのは、少しだけ心が痛んだ。

「相原さん。2人が気になるのですか？」とスターシャが言った。

「スターシャさん」と相原は質問した。「天界では婚姻関係は解消されて自由になるはずですよ。なぜ古代さんと雪さんは愛し合っているのですか？」

「あらゆる煩惱から解放され、あらゆる人間関係から解放されることと、望んで他人と深い関係になることは別ですよ。望めば誰とでも深い関係になれます」

「な、なるほど……」相原は考え込んだ。もちろん、どうしてもミーオを助きたい相原の気持ちも、それにあたるのだろう。

数日後、別の敵が一同の前に立ちはだかった。

デスラー、ズオーダー、スカルダート、ベムラーゼ、ルガールの連合軍だった。

つまりかつてのヤマトの敵が団結して立ちはだかったのだ。

車は5人を前に停車を余儀なくされた。

しかし、すぐに妙な成り行きになった。

もともと仲間でも何でもない5人なのだ。

協調性がまるで無かった。

それどころか、デスラーとベムラーゼは仇敵ですらあった。

「私は地球の敵、ガミラスの総統としてクイーン・オブ・アクエリアスにスカウトされてここにいるが、その後の時代には地球の味方になり、ベムラーゼのボラー連邦とは対立した立場だ」デスラーは言った。「ベムラーゼとの共闘は耐えがたい。古代の側につこう」

「私は」とズオーダーが言った。「デスラー以外に知り合いはいないから、デスラーと同じ立場に立とう」

「私もデスラーと共闘しようとは思わない」とベムラーゼはヘソを曲げた。

「私から見てもデスラーは敵だ」とスカルダートはベムラーゼに歩み寄った。

「同じく」とルガールも同調した。「最後の攻撃を私はデスラーに邪魔されたのだ」

いきなり敵が2つに割れた。

相原はあっけにとられてそれを見ていた。

しかし、敵の敵は味方という理屈で集まったスカルダート、ベムラーゼ、ルガールだったが、共通点などは無く、議論を始めると収拾が付かなかった。つまり敵対行動をいつまでも起こさなかった。

「さて、それではどうする？ 私はデスラーの決断に従おう」とズオーダーは言った、「デスラーの方が、彼らとの付き合いはずっと長い。古代達をあいづらから守るか？」

「我々に敵対しないというのか？」古代が驚いた。「彗星帝国を滅ぼした我々を？」

「馬鹿にするな」とズオーダーは笑った。「彗星帝国はテレサに負けたのだ。ヤマトなどに負けたわけではない」

ズオーダーは高笑いした。

確かにズオーダーはヤマトにはあまりこだわっていないようだった。

デスラーとズオーダーのタッグの方はすんなり意思統一できたようだ。

そもそも、スターシャが仲間にいる時点で、デスラーは敵になどなりようがなかった。クイーン・オブ・アクエリアスとスターシャなら、スターシャを選ぶ男なのだ。

古代達を妨害するために集められたはずの5人がいつの間に障害では無くなっていた。

「このまま前進しても構わないのかな？」と古代も悩む始末だった。

「古代、前に進め」とデスラーは言った、「それがおまえの使命だ」

「しかし」とズオーダーが言った。「かつて自分の部下だった者が敵に回ることもあるだろう。もともと我が帝国は統率が緩かった。彗星帝国の誰もが私と同じように、デスラーに好意を示すとは思わないように」

「はい。覚えておきます」

そこでズオーダーはデスラーに向き直った。「前からベムラーゼは気に入らなかつたんだ。一緒に殴りに行かないか？」

「私もベムラーゼは気に入らない。しかし、スカルダートやルガールを気に入るといわけではないぞ」

「ならば3人まとめてフルボッコだ」

二人は口論している3人に向かって言った。

古代は「デスラー、ありがとう」と言うと、前進を再開した。

車が前進を始めると、スカルダート、ベムラーゼ、ルガールが慌てて追いかけてきたが、後からデスラーに蹴られて転んでいた。

それを見て、ズオーダーが大笑いしていた。

更に旅をすること数週間。

名も無い小さな街に到着した。

「南部、太田、相原。みんなで街に乗り込むのは危険だ。車は街の外に止めておくから、3人で物資調達に行ってくれるか？」

「いいですよ」相原はうなずいた。「南部、太田、行こう」

「俺も行こう」と加藤も飛び出してきた。「退屈なんだ」

「荷物運びは1人でも多い方がいいな」と南部がうなずいた。「来いよ、黒猫」

「ネコじゃない。タイガーだ。黒いブラックなタイガー！」

「どっちでもいいよ」

「ちえっ。俺はヤマト運輸かよ」

しかし、加藤も付いてきた。

4人でトボトボ歩きながら相原は気付いた。

「この4人だけで行動するのは初めてだな」

「そうだな」南部がうなずいた。「ヤマトで最初に古代さんと島さんに挨拶したときも、この4人で一緒に『よろしく』って言ったのにな」

「その割に仲が良いわけでも無いですね」と相原は考えた。

「部署がみんな違うからな」

「ところでさ。おまえ達が助けたい女っていうのを教えろよ。俺は1人も知らないんだ」加藤が好奇心を丸出しにした。「やったのか？」

「それ、天界に来てまで話す話題ですか？」相原はため息をついた。

「男同士なんだから猥談やろうぜ」と加藤は笑った。

「ナデシコはいい娘だったよ」と太田は言った。「口説かなくても好みの服で誘惑してくれて、しかもラブホ直行」

「おいおい」南部が呆れた。「恥ずかしさってものはないのか？」

「ああ、俺には無いよ。だからあっさり引かかった。ナデシコの使命は、俺をヤマトから遠ざけることだったんだ。自分の身体を使ってね」

「そ、そうか」

「でも最終的にヤマトに乗り込んでしまった。ナデシコと一緒に乗り込んだ。それも俺の監視を続けるためだったのだろう」

「それでも助け出すべき女性なのか?」と加藤が質問した。彼には不思議に思えたのだろう。

「そうさ。あいつはスパイだったけれど、傷つく心を持っていたんだ。俺はナデシコを助けない」

「良く分からないが、太田の本気は分かった」加藤はうなずいた。「じゃあ、南部、おまえがこだわっているギルって女はどうなんだよ。一発やったのかよ」

「やるかっ!」

「やってもいないのに、大切なのか?」

「人を愛するのに肉体は直接関係ないっ!」

「ギルってどんな女なんだ?」

「ギルティ・プリンセス・オブ・アクエリアス。クイーン・オブ・アクエリアスの娘で、母親に反旗を翻した女……。触れた者を地獄送りにするジャッジメント・ソードを持っていた。しかし、結局全部まやかした。彼女は本当にクイーン・オブ・アクエリアスの娘ではなく、ジャッジメント・ソードが送り込む地獄は存在しなかった」

「それで、おまえはどこに惚れたんだ?」

「身を挺しても世界の真実を知りたいという崇高な理念だ」

「子供っぽい正義感に流されがちな南部らしいな」と加藤は言った。

「なんだと!」と南部が怒った。

「まあまあ」と相原が2人の間に入った。「南部も抑えて、加藤も言いすぎだよ」

「悪かった」と加藤は恥ずかしげに横を向いた。

「そういう相原はどうなんだよ」と南部が質問して来た。

「ええっ? 僕?」

「そうだ。ミーオって、そんなにいい女なのか?」

「古代さんの心を支配するための道具に使用されていた女性だよ。弱い立場で、協力せざるを得なかったけれど、心の底で疑問を抱いていた」

「秘密の協力者ってことか?」



「いやー。最初はずいぶん騙されたけどね。ヤマトがあると言われた場所はずいぶん嘘だったし」

「それでも助けるのかよ」と加藤が叫んだ。

「だって、僕を騙したのだって本心からじゃない。本当は芯の強い娘なんだ」

「そんなものかな」

「会えば分かるよ」

「ともかく、この3人がおまえ達にとって大切だってことは分かったよ」

しかし、加藤はそこで話題を変えた。

「ところで、晶子さんはどうした。あんな素敵な女性を裏切って他の女に手を出しているのか?」

「晶子さんは素晴らしい女性だったが、ともかく爺さんが付き合いにくかったんだ」

「爺さんって誰だ?」

「藤堂長官だよ」と南部が助け船を出した。

「そ、それは……。俺もできれば遠慮願いたい義理の爺さんだな」加藤は頭をかいた。

「でもさ。天界では肉親の縁も切れて自由になるのだろう?」

「死後に天界に来た晶子さんは幼い子供の姿になって、じいじに甘える世界に閉じこもった」

「それは……。どういふことだ?」

「天界では満たされなかった願望に支配される」相原は言った。「晶子さんは、じいじの愛に飢えていたんだよ」

「そうか。藤堂長官と言えば、ほとんど家に帰らないほど忙しい人だったから……」

「だから、僕は晶子さんにふられたわけだ。今はフリーだよ」

「まあ、現世で結ばれた2人は、たいてい分かれちゃうな。天界で見かけるカップルは、たいてい現世で結ばれなかったカップルだ」

「あ、俺、島さんの噂を聞いたぞ。テレサとラブラブの」と加藤が身を

乗り出した。「まさに現世で結ばれなかった2人だな」

「ホントかよ!」と南部が頭を抱えた。

街に着くと、一行は必要な物資を調達した。

しかし、南部が古物商の前で目の色を変えた。

用途不明パーツと書かれて店先に積んであった物体に目が釘付けだった。

「どうしたんだ?」相原は質問した。

「あれはヤマトにも搭載されていた爆弾だ」

「用途不明ってことは、爆弾だって分からずに売っているわけか」

「そうだ」

「危険だな。爆発したら店が吹っ飛ぶ」

「いや。信管がセットされていないから大丈夫。火を近づけたぐらいでは爆発しない」

「信管はどこにあるんだ?」

「あの横の棚。アンティーク置物として売られている塊が信管だ」

「最終決戦に爆弾ぐらいあった方がいい」と太田は言った。「もらってこよう」

「おい待てよ。もう金は無いぞ」と相原は止めたが太田は止まらなかった。

「おっさん、これやばいぜ。何か分かって売ってるのか?」と太田は話しかけていた。

「なんだい、あんたは知ってるのかい?」

「知ってるよ。これは爆弾だ」

「ば、爆弾!?!」

「まだ爆発してないとは運が良かったな。天界では誰も死なないが、店と売り物は壊れるだろ?」

「す、すぐ捨てないと」

「俺がもらってやるよ。どうだ。タダで譲らないか?」太田はニヤッと笑った。

「いいとも。やるやる。すぐ持って行け」

「手間賃に、そっちのアンティーク置物もらっていったいいか？ 値段も安い構わないだろう？」

「ああ、これも意味不明の物体だな。用途分からないからアンティーク置物って書いているだけだ。欲しければ持って行け」

「さんきゅー、感謝するぜ」

太田は南部と加藤と相原を呼び寄せた。

そして4人で手分けして爆弾と信管をかついだ、とても重く両手が塞がった。

「加藤と一緒に来て正解だったな」南部が重い荷物に苦しい表情で言った。

「そうそう。来てくれなかったら全部運べなかったよ！」太田も同意した。車に戻ると古代は喜んだ。

「コスモガンだけでは心許なかった。でかしたぞ」

この街での物資調達が終わると、目的地は近かった。

相原ら一行は、ついに、天界の軸に到達した。

車を少し手前に止めて、古代、南部、太田、相原、加藤のメンバーで偵察に出た。念のためコスモガンと爆弾で武装していた。危険なので、白馬、スターシャ、森雪の女性陣は待機させた。

「さて、有り難いお経をもらいに行きますか」と加藤が言った。

「有り難いお経だと思ったら京塚ミヤコさんだったらどうする？」と太田がウヒヒと笑った。

「おまえなら喜んでもらって帰りそうだな」

しかし、軸の前は緊迫していた。

女性陣を残して来た配慮は正解だった。

軸の前には大戦車隊が布陣していたのだ。

「車で来ていけばイチコロでしたね」

「天界の我々は死なないがな」

「でも車を破壊され、侵入を阻止されるどころでしたね」

「そうだ」

「あいつらは何者ですか？」太田が質問した。

「ザバイバルの大戦車隊だ」と古代が双眼鏡で監察しながら言った。「テレザートで見たことがある。あの時は空間騎兵隊と多弾頭砲で駆逐したが、生憎と今の我々にはどちらも無い」

「白馬にお願いして、空中から1両ずつ仕留めてもらいましょうか」と相原は言った。

「いや、たった1機では無理だろう。あの戦車隊、対空車両をかなり増備している。テレザートで空からの援軍に負けたことをかなり意識しているようだ」

「ではどうすれば……」

「幸い我々は死なない。1両ずつ爆弾を仕掛けて爆破していこう」古代は言った。

「こ、古代さん！ さすがにそれは無理です」

「無理でもやるんだよ」と加藤が相原の肩を叩いた。「冥王星で敵の基地に侵入して反射衛星砲を爆破した時の話をしてやろうか？ 勝算なんて無かったがやり遂げたんだぜ！」

「でも、あの時は2人死んでるじゃないですか！」

「大丈夫。天界に死は無い」加藤は笑った。「俺達もう死んでるからな」

「総員、コスモ爆弾用意！」と古代が叫んだ。

「どうでもなれ！」と相原も爆弾を手を持った。

相原達はこっそり警戒手薄な戦車に忍び寄ると爆弾をセットした、それは爆破に成功した。

しかし、2両目からはそうは行かなかった。

爆弾を持って誰かが接近中であることが、相手にも分かってしまったからだ。

すぐに警戒の兵士達が出てきて、古代達は爆弾をセットしていられなくなった。

戦車に搭載された機銃が相原達を狙ってきた。

もちろん、相原達は死なない。

しかし、撃たれて後方に飛ばされては前進するどころではないし、貴重な爆弾が爆発してしまっただけでは戦車を爆破できない。

「やはり読みが甘かったか」と相原はつぶやいた。

「いや。最後まで諦めるな。必ずチャンスは来る」古代が一同を鼓舞した。

しかし、相原にはそれが無根拠の気休めの言葉に聞こえた。

その時、上空から無数のビームが落下してきた。

それらは戦車を真上から貫き、撃破していった。

「何がいったい？」相原は驚いた。

「多弾頭砲だ。誰がいったい」と古代が多弾頭砲を撃ってきた方向を振り返った。

丘の上に屈強な人影が立っていた。

その人物が呼びかけた。「艦長代理っ！」

飛び降りてきたその男は空間騎兵隊の斎藤だった。

「斎藤！」

「こういうときは、多弾頭砲を頼むって通信を入れればいんだぜ」

「どうしてここに！」

「ザバイバル野郎が、かつての仲間を集めて大戦車隊を再建したというので、こっちもかつての仲間を集め、多弾頭砲も調達して乗り込んだわけだ。ここで艦長代理に会えて嬉しいぜ」

「そうか、偶然でも助かった」

「意外と偶然じゃないかもな」と南部が言った。「天界の軸を警護するためにザバイバルは選ばれて配置された。我々は天界の軸を狙っていたが斎藤はザバイバルをマークしていた。そういうことだろう？」

「なるほど。敵の黒幕は共通ってことか」斎藤がうなずいた。

「そうだな」

「誰が黒幕か分かっているのか？」と古代は質問した。

「知らねえな」

「クイーン・オブ・アクエリアスだ」

一瞬、斎藤は驚いていた。しかしすぐに不敵な表情に戻った。

「おもしれえ。艦長代理、この喧嘩、俺達も協力するぜ」

それから斎藤は振り返った。

「みんな、いいだろう!」

丘の上にはずらっと並んだ空間騎兵隊員が「おおっ!」と答えた。

「ありがとう」古代が感謝した。

「いってことよ。みんなあんたには感謝しているんだ」

「感謝?」

「みんな第 11 番惑星で死んだ戦友だ。時間が無いのに艦長代理は俺を第 11 番惑星に行かせてくれた。死者を弔うために。その恩はみんな知っている」

「そうか。あの時の……」

「というわけで」と斎藤がいきなり相原のベルトに挟んであった爆弾を取り上げた。「こいつは、俺達の仕事だ。総員コスモ爆弾用意! 残った敵戦車はこれで吹っ飛ばすぞ。特に対空車両は残すな。最強の多弾頭砲が飛んでくるからな」

「最強の多弾頭砲? 何のことだ?」

「それは来てのお楽しみだ」

「斎藤……」

「それよりザバイバルはどこだ。もう 1 回拳銃弾を撃ち込んでやらないと気が済まねえ」斎藤は戦場に駆けだした。

「天界だから拳銃を撃っても射殺はできないのに」と太田は言った。

「気持ちの問題だよ」と相原は答えた。

空間騎兵隊の参入で戦場は一気に形勢が逆転した。

大戦車隊は制圧され、もはや、天界の軸に入ることを妨げる者はいなかった。

相原は改めて落ち着いて軸を見上げた。

天界の軸とは無限に続く塔のような存在だった。

古代は白馬、スターシャ、森雪を呼び寄せ、一緒にドアを開いて塔に入

った。

最初の部屋に待っていたのは幽閉されたテレサだった。

テレサは全裸だった。

「古代さん。宇宙の愛に免じてクイーン・オブ・アクエリアスを責めないで!」

テレサは訴えた。

「そのお願いは聞けないと言ったら?」

「この反物質の身体をこの場で反応させ、あなたたちごと消えます」

「それは実行できない」と古代は言い切った。「第1に君の身体は反物質ではない。天界に来た時点で全ての物体は物体としての実体を失う。幻想が姿を見せているだけだ。第2に、君はそもそもテレサですらない。魂の無い人形。そうだろう?」

「いえ。私こそが本物のテレサです」

その時、ドアをくぐって入ってくる男女があった。

「さすが。古代。いい勘だ」と男は言った。「本物のテレサはこっちだ」

「島!」古代の顔が明るくなった。

一緒にいる服を着た女性はテレサの本物だった。

「どうして二人一緒に?」と古代は駆け寄った。

「死んでから結ばれる2人って奴だな。僕らはやっと結ばれた。しかし、ここでテレサの偽物が出ると聞いてね。しかも全裸だという。それは捨て置けないので、ここまで来たんだ」

「そうか」

「畜生、いい女だったのに偽物かよ」と斎藤がぼやいた。

古代はコスモガンでニセテレサを撃った。

しかし、それはテレサを狙ったものではなかった。

テレサを拘束している機械を狙ったものだった。

「これで行動は自由だ。どこにでも行け」

全裸の偽テレサはそのまま走り去った。

床に触れて走っても、もちろん爆発などは起きなかった。

「次の部屋に行こう」

次の部屋には、クイーン・オブ・アクエリアス本人がいた。

そして3枚のパネルにおぞましい光景が映し出されていた。

1枚にはナデシコが米兵にレイプされていた。

次の1枚には、ミーオが町外れにいた貧乏な娼婦と同じ格好で客を引いていた。

最後の1枚は、ギルが酒場の男達に輪姦されていた。

「良く来たな、古代ご一行さま」とクイーン・オブ・アクエリアスは言った。

「これは何だ」

「ナデシコとミーオとギルは私のスパイだったが、もう命令は聞きたくないというので罰を与えている」

「罰だと?」

「そうだ。ナデシコには無限に続くレイプを。ミーオには客も寄りつかない社会の最下層の娼婦を。ギルにはジャッジメント・ソードが偽物とばれて酒場で襲われる世界を与えてある」

いきなり南部がコスモガンを構えたが、太田は構えただけではなく既に撃っていた。

しかし、クイーン・オブ・アクエリアスには傷1つ付いていなかった。

「そのような武器で私は倒せない。私はこの天界の造物主。被造物は造物主を倒せない。あなたがたにはどうやっても倒せない」

「くそっ!」と南部が叫んだ。「やはり天界の神はヤマトの波動砲でなければ消せないのか」

「そのヤマトも、本物ならば、という条件が付く」とクイーン・オブ・アクエリアスは笑った。「多くの者の妄想にヤマトは出てきて、それらが具現化している。はたして、どのヤマトが本物なのだろうね。そもそもどれだけの割合が本物なら本物と言えるかの、という問題すらある。私に消されるまでの短い時間で、その問題を解決できるのか。古代よ」

「無策でここに来たと思っては困る」と古代は言った。



「ほう。ではどうする」

「確かにあなたは殺せない」と古代は言った。「しかし、この塔は爆破できる」

相原は慌てた。

「古代さん、塔なんか爆破してもそれは意味がありません」

しかし、クイーン・オブ・アクエリアスは眉をひそめた。「おまえ、どこまで知っている」

「自分の知識など限定的なものに過ぎないが、この塔が天界の軸と呼ばれている以上、重要な施設であることは容易に想像ができる。この塔を破壊すれば、この天界は安定した回転を失って崩壊していくはずだ」

「なぜそう思う」

「もしもクイーン・オブ・アクエリアスが死ぬか生きるかの問題なら、ザバイバルや偽テレサを展開させる必要は無かったのだ。天界では誰も死なないのだ」

「良からう」とクイーン・オブ・アクエリアスは言った。「そのことは認めよう。私は殺せないが、軸は破壊できる。しかし、それで私を支配できるなどとは思わぬ。ギル達3人は私の手の中にあり、いつでも消せるのだぞ」

古代は振り返った。

南部と太田の表情が必死に自分が愛した女は助けてくれ、と言っていた。気がつくと相原自身もそうだった。

「では血なまぐさい戦いはこのあたりでお開きにしましょう」とスターシャが前に出た。「私たちは全ての武装をあなたに差し出します。その代わりに、人質の女性3人を解放して下さい。この条件でいかがかしら?」

「さすがはイスカンドルの女王。外交と交渉というものを少しは分かっている」とクイーン・オブ・アクエリアスは目を細めた。「正義のために戦いたがる男達よりは理性的だろう。しかし、その真意を見抜けないと思うのか?」

「真意? 真意ですか?」

「そうだ」クイーン・オブ・アクエリアスが手を振るともう1つのパネルが出てきて、それが空中の様子を映し出した。

彗星帝国の駆逐艦に包囲され、集中砲火を浴びて墜落しつつあるヤマトの上陸用舟艇だった。

「あれにもう1つの多弾頭砲が搭載されていたのであろう？ あれがおまえ達の切り札。対空車両の爆破にこだわったのは、あれの着陸を支援するため。中身は、そこの緑の男が言っていた最強の多弾頭砲とやらであろう？ おそらく弾頭はヤマトの波動エネルギーを詰めたカートリッジだ。それなら、神すら消せる。しかし、発射点にたどり着ければの話だがな」

「古代さん！」と相原は叫んだ。「まさか本当の計画って、これですか？」

「いや。あれは斎藤がザバイバルにとどめを刺さすために用意した切り札だ。たぶん、スターシャさんが咄嗟の機転でそれを組み込んで交渉の材料に使っただけだ」

「しかし」とクイーン・オブ・アクエリアスは勝ち誇った。「私の腹心の知恵には勝てなんだようだな」

クイーン・オブ・アクエリアスの玉座の後ろから出てきたのは、異星の女だった。「かつては白色彗星帝国の総参謀長だったサーベラーだ」

「デスラーが使い物にならなかったことと、大帝までデスラーに同調したことは予想外でしたが、他は順調に進みました。チェックメイトです。あなた方に残された有効な武器はありません」

「ならば最後に3人の女性にここで会わせろ」と古代は要求した。

「いいでしょう」クイーン・オブ・アクエリアスが指を鳴らすと、その場に3人の女性が出現した。

3人とも服は破れ身体は汚れていたが、そんなことは南部、太田、そして相原にはどうでも良いことだった。

その時、古代が急に態度を変えた。誰もいない空中に一礼したのだ。

「閻魔大王。我が儘を聞いていただき感謝します」と古代は言った。「以上で我々の我が儘は終わりです」

「艦長代理、閻魔大王がどんな凄い牛車で登場するか、そこまでは聞い

てないだろう」斎藤がニヤリと笑った。

「何の話だ!」クイーン・オブ・アクエリアスが狼狽の表情を見せた。

「斎藤、おまえも閻魔大王を知っているのか?」

「昨晚夢枕で頼まれたんだ。特大の多弾頭砲で降下するから対空兵器は特に始末しておいてくれってな」

「しかし、多弾頭砲を積んだ上陸用舟艇なら撃墜済みだ」とクイーン・オブ・アクエリアスが言った。

「そっちはダミーよ。本物はもう来ている」斎藤は笑った。

その時、塔の壁を破って侵入してくる赤く丸い巨大な物体があった。

「ヤマトの艦首だ!」太田が叫んだ。

ヤマトの甲板の上には、山のような乗組員が整列していた。

「薙達反乱グループを除き、歴代全ヤマト乗組員、集結しました」と甲板前部に立った土門が敬礼した。

隣に立った新米が叫んだ。「真田技師長が天界から集めた全ての本物のヤマトの魂のカケラで修復したヤマトですっ! これが天界最強のヤマトですっ! 艦首から艦尾まで全て本物ですっ!」

新米の後には腕を組んで満足そうな真田が立っていた。新米は真田の役に立ったのだろう。

第1艦橋のパイロット席からは北野が手を振っていた。

そして、波動砲の発射口に並んで立っていたのは沖田と閻魔大王だった。閻魔大王に抱えられ、沖田は床に降下した。

「古代久しぶりだな」と沖田は嬉しそうに言った。「おまえの頑張りはずっと見ておったぞ」

「沖田艦長!」

「しかし、感動の再会はこれまでだ。我々には果たすべき使命がある」

「そうでした」

古代はクイーン・オブ・アクエリアスに向き直った。

「大量の弾頭を装備したヤマトそのものがここまで来た。これが真の最強の多弾頭砲だ」

「まさか! 最終防衛の部隊は囷に引っかかって釣り出されただけなのか!」  
サーバーが青くなった。

「この程度で取り乱すとは。女だな、サーバー」クイーン・オブ・アクエリアスが不快な表情を見せた。

「クイーン・オブ・アクエリアスさまだって、女じゃないですか!」サーバーが叫んだ。

「いいや、私は性別を超越した神なのだ」とクイーン・オブ・アクエリアスは立ち上がった。

「クイーン・オブ・アクエリアス、ヤマトの波動砲がなぜ他の波動砲と違うのか。その理由が分かるか?」と閻魔大王が言った。

「一度死んでいるからだ」クイーン・オブ・アクエリアスは答えた。「ヤマトは一度戦艦大和として沈んでいるから、死者の世界と生者の世界を往復したのだ。そこで得た属性は、半死半生。死者でも生者でもない存在。等しく死者も生者も滅することができる力だ」

「おまえの理解はその程度かっ! 天界を統べるなど、ほど遠いわっ!」閻魔大王が一喝した。

「はやく波動砲を撃たせて下さい」と第1艦橋の北野が叫んだ。「一発でクイーン・オブ・アクエリアスを仕留められます」

「では消される前に教えよ」クイーン・オブ・アクエリアスは言った。「ヤマトはいったい何が違うというのだ」

「乗組員の熱い魂だ。ヤマト魂だ。あれだけ熱い魂に晒された波動砲など他に存在しないのだっ!」

「魂!」

「魂こそ天界の基本構成要素だというのに、その程度のことも分からないのかっ!」

クイーン・オブ・アクエリアスは崩れ落ちた。

「さて、閻魔大王」と沖田が祝福した。「これでクイーン・オブ・アクエリアスは失脚し、あなたの治世に復帰するわけですな」

「それは分からない」

「なんですと?」

「古代、おまえには別の考えがあるのだろう」と閻魔大王は古代に話を振った。

「はい。自分は最初天国も地獄ももともと存在するものだと考えていました。しかし、それならクイーン・オブ・アクエリアスが支配権を握ったぐらいで矛盾がぼろぼろ出るのはおかしいと思いました」

「では天界とは何だね?」

「死者の情報を無限にプレイバックし続ける亜空間上の仮想空間です。つまり人工的な装置です。神々とは、その装置の支配者として君臨するアクエリアス人に他なりません」

「ということは、閻魔大王もアクエリアス人ということになるぞ」

「その通りです」

「慧眼だな、その通りだ。私もかつては生きているアクエリアス人であった」

「ならばこの天界がある限り、矛盾は根絶できません。アクエリアス人の都合で作られた世界は、どこかで綻びをきたします」

「その通りだ。ならば古代。君はどう思う。どうしたらいい?」閻魔大王は問うた。

「天界は破壊すべきだと思います。死者は天界に行かずただ消えゆくのみです。それがもっとも自然な死者のありようです」

「私も古代さんを支持します」とスターシャが言った。「やはり、死者となって現世に影響を行使しようというイスカダル人の思想は間違っていました」

「分かった。わしも支持しよう」閻魔大王は言った。「このまま波動砲を撃てばクイーン・オブ・アクエリアスが消えるのみならず天界の軸は崩壊し、天界そのものが無くなるだろう。だが本当にそれでいいのかね?」

「はい」

「他の者達も同じかね?」

「賛成します」とミーオを抱きしめながら相原は言った。「僕は真のあの

世でミーオと1つになりたい」

誰も反対する者はいなかった。

「では北野、撃て！」古代が命じた。

しかし、波動砲は発射されなかった。

サーバーがいつの間にか第1艦橋にいて、北野の首を絞めつつ波動砲発射席から引きずり下ろしていたのだ。

「この世界を壊させはしない！ 無限に続く快樂と権力の世界を失ってなるものですか！」サーバーの叫び声が聞こえてきた。

一同は慌ててヤマトに走った。

エレベーターで第1艦橋に達すると、驚いたことに先客がいた。

デスラーとズオーダーだった。

デスラーから銃を突きつけられて、サーバーは手を上げて立っていた。

「3 バカを殴り倒してから追いかけて来てみれば、奇妙な状況もあったものだ」とデスラーは言った。「懐かしのサーバー総参謀長とご対面とは」

「天界に来てまで会いたいとは思わなかったよ」とズオーダーも言った。

「それに仇敵にテレサとも」

島の隣でテレサが目を伏せた。

「だが、この場でテレサへの怨みなどと言っても無粋なだけだ。この場にそぐわない下品な振る舞いに及ぶ前に、私は失礼する」

その場でズオーダーはマントを翻した。

「古代、よく見ておけ。少なくともこの潔さは彼の美德だ」とデスラーは言った。「彗星帝国への怨みはあるだろうが……」

「ああ。彼は少なくとも嘘つきでは無かった。自分の欲望を正直にぶつけてきた」

「しかし、助かったよデスラー。おかげで北野が助かった」

「ヤマトを救ったのは私では無い。そこの赤いロボットだ」

「ソノ女ノすかーとヲメクッタラ、慌テテ北野サンカラ手ヲ離シテクレマシタ」

「昔着てた白いボディスーツなら、めくられるスカートは無かったのに！」

長いスカートに着替えて失敗したわぁ」とサーベラーが泣き出した。

「すかーとガ無ケレバオ尻ニたっちシタダケデス」

「ははは。おまえの負けだ」とズオーダーは後ろ姿で笑った。「永遠にその赤いロボットの玩具にされて自らの行いを反省している」

ズオーダーはエレベーターに消えた。

「アナライザー、ミーオのスカートはめくるなよ」と相原は釘を刺した。

「ギルのもだ!」と南部も唱和した。

「私、ケン兄ちゃんに見られるのならめくられてもいいかも」とナデシコがボソッと書いた。

一同の視線がナデシコに集まった。「何でもありません! 忘れて下さい!」

そのとき、1人だけナデシコを見ていない人物がいた。

サーベラーだった。

サーベラーは、開かないエレベーターのドアを叩いていた。「大帝、私を置いて行かないで!」

「大帝を裏切っておきながら大帝にすがる。臣下のこの見苦しさが彗星帝国の不快さそのものだ」

いきなりデスラーがサーベラーを撃った。

「デスラー!」古代が叫んだ。

「心配するな。天界で人は死なぬ。なに、彗星帝国で陰謀にはめられた怨みを晴らしたまでのこと」

そして銃をホルスターに収めてデスラーは古代に向き直った。

「事情はだいたい把握している。古代、おまえが波動砲を撃て」

「古代さん、頼みます」と北野も苦悶の表情で言った。「自分はまだダメーじから回復していません。自分に発射は無理です」

「しかし……」

「古代」と沖田が言った。「波動砲発射準備」

沖田の後に土方と山南もいてうなずいていた。

「しかし……」

「沖田艦長」とデスラーは言った。「あのことは古代に話しておいた方が

良いぞ。なぜあなたがアクエリアスに波動砲を撃ったのか」

「そうか。自動装置でもできることを手動でやった自殺が不自然に見えるのか。すっかり忘れていた」

沖田は古代に向き直った。「古代、あの時わしは既に死んでいた。しかし、閻魔大王と合体することで現世に蘇った。脳死に至っていなかったというのは嘘だ。わしは本当に死んでいたのだ。しかし、1つの使命を持って蘇った。アクエリアスの水を地球に入れないことだ。なぜなら、アクエリアスの水とは天界から地上界を支配するための媒体だったからだ。クイーン・オブ・アクエリアスはその液体を様々な星にばらまき、現世の支配を広げて行ったのだ。だから、砲口を塞いで自沈したヤマトは、波動砲を撃ったように見えるが、同時に別の成分も撃ち出したのだ。それがアクエリアスの水を中和して無害化した。それを撃ち出すには、閻魔大王の力が必要だったので、閻魔大王と合体していたわしはヤマトに残ったのだ。もちろん、既に死んでいる以上、それ以上死ぬことに恐れはなかった」

「では、あれは自分の余命を見切った上での自殺ではないと……」

「そうだ。わしは地球を救いたかった。アクエリアス人による地球支配を阻止したかった。そのためには必要な措置だった。現世の生きている人類には理解できない理由だがな」

「分かりました。もう迷いません。波動砲の発射命令を」

「沖田艦長」と南部は言った。「ここで1つだけ質問することをお許し下さい。あのとき、アクエリアスで積み込んだ液体は、本当は何ですか？ 重水ではないという疑惑があります」

「あれは重霊水だったのだ」と沖田は言った。「アクエリアスの水を中和する成分として積み込んだのだ。振動で分解してしまうので、慎重に運ばせたが、アクエリアスに接近すると共鳴して安定した。そうなれば振動させても分解はしない」

「なぜ、重水だと嘘を付いたのですか？」

「重霊水は現世には存在しない物質なので、性質が似た重水と偽ったのだ」



「分かりました。最後の心残りが解消されました」

「では、古代」と沖田が言った。「波動砲発射準備」

「発射準備します」古代は自分の席に座って波動砲の発射トリガを起こした。

古代は島に声を掛けた。「ヤマトを後退させろ。ある程度距離を取って、塔に向かって波動砲を発射する」

「了解」と島が操縦手席に滑り込んだ。

テレサが後から島の肩に手を置いて信頼を示した。

島はテレサにうなずいてから振り返った。「太田、女に骨抜きになってなければ補佐しろ」

「なってません」と太田が自分の席に滑り込んだが、ナデシコはその横に立って離れなかった。

「南部も波動砲をチェック」

「さっきからやっていますが、警告ランプが消えない項目があります」

そのとき、エレベーターのドアが開いて新米が駆け込んできた。

「波動砲に問題が出てます。あのサーベラーって女が一部のパーツをぶっ壊して艦内に乗り込んだようです。真田技師長は波動エンジンのメンテにまわっていて手が足りません。できれば砲術のプロの人に波動砲に来て欲しいのですが」

「問題はそれか。分かった、俺が見る」南部が立ち上がった。

「助かります」

「南部っ！ 頼むぜ!」と新米の眼鏡が甲高い声で叫んだ。それを見て相原は驚いた。

「まさか、おまえはメガネ君か!」と南部が叫んだ。

「ガネダだ!」と眼鏡が言い返した。

「ガネダが新米の話し相手になっていたとは驚きだな」と南部は言った。

「しかし、新米は俺より先に天界に来ていたはずだぞ。なぜ、今頃メガネ君が話し相手に付いている」

「死んでからずっと、ちくわの世界に浸っていたんですよ。でも、重力

アンカーを切って波動砲を発射して脱出したんです。それからガネダをアドバイザーに付けてもらいました」

「そうか。分かった。もう時間が無いからすぐ波動砲に行くぞ。問題はどこで起きている。案内してくれ」

「こっちです」と新米は南部を先導してエレベーターに駆け込んだ。

「私も手伝う」ギルもその後を追った。

「懐かしいのう、ガネダか」と佐渡先生が酒瓶を持って第1艦橋に来ていた。

「佐渡先生、一体どうしたんですか!」と相原は驚いて声を掛けた。

「なに、最後の波動砲発射じゃ。特等席から見届けようと思っな」

「佐渡先生は沖田艦長が脳死に至っていなかったという説明が嘘であることを知っていたのですね?」

「それはご想像にお任せするよ」として佐渡は酒を飲んだ。

佐渡が相原から離れると、もう相原にはすることがなかった。

相原は自分の席に座るとミーオを抱きかかえた。

「君はこれで良かったのかい?」

「ええ」

「どうして?」

「私は道具として作られた人形」

「しかし愛されて魂が宿った」

「魂があっても、身体は人形。寿命は限定的。絶対に相原さんより先に壊れるわ」

「ミーオ!」

「でも、今こうして一緒に消えることができれば、消滅は一緒」

「分かった」

相原はミーオを抱きしめた。

その時、スターシャが相原の横に来た。

ミーオが顔を上げた。「スターシャさま。最後ですから、あのことを告白してもいいですよ?」

「ええ。構いませんよ」とスターシャはうなずいた。

「実は私、真田澪ことサーシャのコピーなの。身体はクイーン・オブ・アクエリアスが粘土をこねて作った人形で姿形は違うけれど、魂はサーシャのコピーなの。スターシャさまの命で、天界の軸に潜入するスパイとして作られたの」

「君が小さいサーシャのコピーであることは分かっていたよ」

「えっ? なんで?」

「澪とミーオの名前が似ている……なんていう理由で古代さんは意識の操作を許したりはしない。かといって、本物なら古代さんを好きになっているはずだ。しかし、僕の方を好きになってくれた。本物ではない証拠だ。君はサーシャそのものだが、コピーである証拠だ」

「私のことを分かってくれるのね!」

「ミーオ、最後に幸せを掴みましたね」とスターシャは微笑んだ。

「はいっ!」とミーオは満面の笑みを浮かべた。

そのとき、スピーカーから南部の声が聞こえた。「波動砲準備完了。もう撃てます」

「よし、カウントダウン再開。総員対ショック対閃光防御」

波動砲の準備音が高まっていった。間もなく発射される。

その時スターシャが唐突に言った。

「相原さん。あなたは輪廻転生という話を信じますか?」

「まさか、これは本当の消滅ではないと?」

「別の時間、別の場所で、別の人間として生まれ変わるかも知れません。全ての記憶を失って。クイーン・オブ・アクエリアスの逆鱗に触れて消された本物の娘も、きっと……」

相原はハッとした。歴代全ヤマト乗組員が揃っているはずなのに、真田澪つまり2代目サーシャだけがさつきから見当たらなかった。

「消されたとはいったい?」相原が委細を聞こうとしたとき、古代は波動砲を発射した。

## エピローグ

丙型海防艦 15 号は、トラック島から内地への帰路についていた。  
艦内には安堵感が漂っていた。

今はトラックも米機動部隊の空襲を受ける可能性があるが、今のところ  
まだ内地にいればほぼ安全と言えた。

艦長は通信長を呼んだ。

「柱島投錨は 9 月 5 日午後 3 時頃だ。司令部に打電しろ」

「了解。打電します。打電するのはそこだけですか?」

「他にどこがある?」

「許嫁は良いのでしょうか? 帰ったらすぐに祝言と思いませんか?」

「バカ、余計な心配をしないで早くしろ」

艦橋に低い笑い声が響いた。

しかし通信長はすぐに通信室から戻ってきた。

「艦長。申し訳ありません。司令部との通信が混信しておりまして、連  
絡が取れません」

「緊急周波数を使ったらどうだ?」

「それもダメなんです。誰かが何か信号を送っているようなんですが」

「通信長」

「ハッ」

「貴様それでも帝国海軍軍人か。誰かが何かとはいったい何とすること  
か。分からないならいちおう記録しておけ」

「記録ならさせています」

「……さすがだな、通信長」

艦橋に低い笑い声が響いた。

そのとき、通信長は思い出した。確かに艦長はもうすぐ祝言だが、許嫁  
の他に艦長の兄の娘も赤いスカーフを振っていたことを。

罪作りな艦長だと思いつつ、通信長は通信室に戻った。艦長はいったい  
何人の女性を泣かせれば気が済むのだろう。

終わり

## 第5章 FINAL

亜空間を轟進し続ける宇宙戦艦が存在した。

それは現実と虚構の狭間に挟まれ、生者とも死者とも言えない存在だった。

それに人は誰も乗っていないかった。

ただ単独で航行しているのみであった。

かつて、その宇宙戦艦はヤマトと呼ばれた。

ヤマトの第1艦橋に巨人が出現した。

理屈で考えると天井に頭がつかえて入れないはずだが、ヤマトにサイズはなかった。

巨人は言った。

「ヤマトよ。これでヤマトの物語は完結した。これで満足か?」

「閻魔大王様。満足です。古代は私の弟であり息子であり友でした。彼の納得の行く結末を与えられたと思います」

「では、おまえはこれからどこへ行くのだ、ヤマトよ」

「行くべき場所に」

「それはどこかね?」

「今、やってくるところです」

閻魔大王は第1艦橋の窓の前に立ち、目を細めた。

そのとき、通信士席で音が鳴った。

「こちらは、遺跡のゲートを突入して亜空間を航行中のコスモアドベンチャー式スーパー宇宙戦艦 YAMATO。貴船の所属、艦名を知らせられたし。もし、セイレーンないしセイレーンのシンパの場合は、交戦も辞さず」

「あれは、おまえの名を継承するかなり遠い子孫らしいぞ」

「17代目の子孫と形が似ています。おそらく17代目の子孫を継承した18代目か19代目かと」

「さて、どう返答するのだ、ヤマトよ」と閻魔大王が面白そうに笑った。

「決まっています」とヤマトは答えた。

「マーシィ」とナブは振り返った。「艦型識別できたか?」

「ダメ。艦型識別表に載ってない」

「あれは相当に古いタイプだ」とトーゴー艦長が叫んだ。「戦没した艦も、引退した艦も、全部検索対象にしろ」

「は、はい」

「マーシィは慌てて操作した」

「分かりました。宇宙戦艦ヤマトです」

「ヤマト? リンボスで沈んだ戦艦だろ?」

「それは17代目。あの形状は初代のヤマトよ」

「なんだって?」とナブは正面を見た。

「ナブ! あの宇宙戦艦は突っ込んでくるぞ! 回避しろ」トーゴー艦長が叫んだ。

「ダメだ。舵が利かない。アガ、エンジンを切れ」ナブは叫んだ。

「ダメだ。エンジンも制御を受け付けない」

「ぶつかるわ!」マーシィが悲鳴を上げた。

2つのヤマトは接触した。

そして、太古のヤマトは消滅した。

「何が……起こったんだ?」とナブは見回した。「あの宇宙戦艦はどこに行ったんだ?」

「亡霊戦艦だ」とトーゴーはつぶやいた。

「亡霊戦艦ってなんですか?」とマーシィは振り返った。

「船乗りの伝説だ。実体の無い宇宙戦艦に亜空間で出会うという。その姿は初代宇宙戦艦ヤマトにして、ヤマトの魂を受け継ぐ者を探し続けているという」

「それで、出会うとどうなるんだ?」

「おまえではない……と言われて立ち去っていくそうだ」

「でも、立ち去らないで消えた。なぜだ?」

「もし、あれが亡霊戦艦だとすれば……」とトーゴーは言った。「この船とおまえ達こそがヤマトの魂を受け継いだのであろう」

「それで、魂を受け継いだ俺達はどこに行くんだ？」

「それは神のみぞ知る」とトーゴーはニヤリと笑った。

「そんな殺生な！」

「ならば、閻魔大王様にでも祈れ！」

「俺はまだ閻魔大王様に裁かれたくないっすよ！」ナブは叫んだ。

「間もなく亜空間から出ます」とマーシィが報告した。「しかし、どんな場所に出るのか分かりません」

「せめて素敵な場所に出ることを祈れ！」とトーゴーは叫んだ。

はじまり



## 執筆方針に関する補足説明

本作品の執筆方針を特に記しておく。

- ヤマト完結編の完結編を目指す。つまり、ヤマト完結編を完結させることを目指す
- ヤマトの敵はディンギルではなく、アクエリアスと見なす。理由は、ファイナルへの序曲で、「アクエリアスは敵か味方か」とアクエリアスが敵である可能性を示唆していることに根拠を持つ
- より具体的には、アクエリアスとは何か、アクエリアス人とは何者か、なぜアクエリアスは無人なのか、クイーン・オブ・アクエリアスとは何者かについて説明を付けることを目的とする
- ディンギルとの戦いは本作では扱わない。映画ヤマト完結編内ではほぼ戦いは完了しているからである
- ただし、以上の説明はあくまで筆者の解釈である。オフィシャルの解釈通りではない
- ヤマト完結編までの内容を前提に執筆する。ヤマト復活篇、ヤマト 2199、YAMATO2520 の内容については扱わない。この3つは本作の執筆時点で未完だからである。またヤマト 2199 を取り上げると内容的に矛盾を生じる。ただし、完結編が終了すると YAMATO2520 につながるというニュアンスを示すためののみ、YAMATO2520 のヤマトと乗組員を登場させている。
- 従って、コスモゼロによるヤーボとしての活動は本作では否定されている。敵戦車を仕留めるコスモゼロはヤマト 2199 的な描写だが、そのような行動は行わせていない。ただし、コスモゼロが敵戦闘機に被弾して森の中に一時消える展開はヤマト 1974 的の浮遊大陸的であり、採用している
- 宇宙戦艦ヤマト 1974、さらば宇宙戦艦ヤマト、宇宙戦艦ヤマト 2、新たな旅立ち、永遠に、ヤマト III、完結編の内容は作中の過去の事実として採用する

- 新たなる旅立ちと、永遠にの敵は同じと見なし、新たなる旅立ちの戦いを第1次黒色戦役、永遠にの戦いを第2次黒色戦役と呼称している。また新たなる旅立ちのグレートエンペラーは永遠にのスカルダートであると見なし、グレートエンペラーはヤマトの敵として特に登場させていない。これは本作に限定された解釈であり、その解釈が正しいという主張ではない
- **SPACE BATTLESHIP** ヤマトに関しては矛盾を生じない範囲で一部の内容を取り入れている
- ヤマトそのものが多弾頭砲であり惑星に降下してくる、という設定は**SPACE BATTLESHIP** ヤマト由来である
- ヤマト 2010 界編は、**SPACE BATTLESHIP** ヤマトのプロモーションのために製作された日本各地を飛行する宇宙戦艦ヤマトの映像が事実だという仮定を置いて執筆されている。本作でヤマトが目撃された地域は、この映像が作られた地域と一致する。なお、この映像は DVD/BD に特典映像として収録されている。なお、ヤマト 2010 界編が西暦 2010 年と言う設定になっているのは、この映像が制作されたと思われる年度だからである。トランスフォーマー2010 や、2010 年宇宙の旅とは一切関係は無い
- 裏設定、ファン設定のようなものは採用しない。ただし、南部康雄が南部重工の御曹司という設定は採用する
- さらば宇宙戦艦ヤマトと宇宙戦艦ヤマト 2 の内容は矛盾をきたさない限り意識的にどちらも採用している。たとえばプロローグ/エピローグの台詞はさらば宇宙戦艦ヤマト準拠であるが、第 11 番惑星の空間騎兵隊戦死者は宇宙戦艦ヤマト 2 の内容に由来する。
- ただし、テレサに関してはさらば宇宙戦艦ヤマトの全裸のテレサと、ヤマト 2 の服を着た島とラブラブのテレサの双方を登場させている。(ただし読者の混乱を来さないために全裸のテレサを偽物扱いしている)
- サーベラーを登場させてミルを登場させていないこと、ザバイバルを

登場させてゴーランドを登場させていないことに、深い理由はない。  
単純にストーリー展開の都合で選ばれた 2 名に過ぎない

- 本作の主人公は南部、相原、太田の 3 名とし、3 人の話が平行して進む形式を取るが最終的に 3 つの物語は集約され、1 本の話となる。その際の主人公は相原とする。相原を主人公とするのは、古代との印象的な絡みが 3 人の中で最も多いキャラだからである
- 南部、相原、太田の本編中のラブロマンス要素(たとえば、相原と藤堂晶子)はあえて採用していない。大多数のヤマト乗組員には生前の奥さんがいたと思われるが、それらもあえて登場させない。(肉親の縁も切れるのが天界である)。ただし、死によって十分に果たされていない関係は、重点的に取り上げる。(テレサと島、スターシャとサーシャ等)。古代と森雪の関係は微妙であるが、真の森雪は主に蕨の反乱絡みで登場させる
- エピローグの丙型海防艦 15 号が丙型海防艦 15 号である理由は、さらば宇宙戦艦ヤマトで古代が乗った護衛艦の艦腹に 15 とペイントされていたことに由来する設定であり、史実の丙型海防艦 15 号と描写が整合するわけではない。
- 第 15 輸送補給「線」護衛艦隊という表記はブルーレイ版さらば宇宙戦艦ヤマトに収録された絵コンテに準拠した(ただし絵コンテでは第は略字である)。ただし映像のテロップは「線」ではなく「船」である。第三稿までは「船」であったが、第四稿で「線」に変更した。また第三稿までは旗艦と表記していたが、映像をチェックすると護衛に付いている宇宙艦は 1 隻のみなので、旗艦という表記は第四稿以降で取り去っている
- 車で移動する三蔵法師一行というモチーフは、最遊記をモチーフにしているわけではない。ランドクルーザー・ヤマトというネタを使いたいので白馬を車に変化させただけである。(もし最遊記なら猪八戒は太田ではなく、もっとかっこいい男にする)
- 完結編をモチーフにするにも関わらずプロローグ/エピローグはさら

ば宇宙戦艦ヤマトがモチーフとなっているのは「完結編よりもずっと過去の世界に始まりそこに回帰する」という表現の意図による。

- 初代サーシャが喋るシーンはアニメには存在しないが、本作では死んだ人間は生きていたかのように出てくる関係上、彼女も喋る。それにあたってはヤマト 1974 第 1 話の情報から性格付けを推定した。つまり、危険な戦地に命を賭して飛び込むが、スターシャは妹に行動を強制するようなキャラクターではない以上、自発的に危機的状況に飛び込む乗りの良い快活な少女と想定して記述している。結果としてエヴァンゲリオンのアスカと似た性格付けになり、第三稿までは似た台詞を喋っていたが、紛らわしいので第四稿からは削除した。繰り返すが、サーシャの性格付けの根拠はヤマト 1974 第 1 話にあつてエヴァンゲリオンには無い。
- 同様に横須賀で護衛艦と米軍艦船が浮遊する描写は、エヴァンゲリオンの AAA ヴンダーと護衛艦を連想させることを意図した描写ではない。このシーンはヤマト 1974 のガミラス本星での戦闘を暗にモチーフとして使用している、そのため、島が「垂直上昇」「後部エンジン噴射」と命令して離水する。空に天井があるのは、ガミラス本星の空洞内部の隠喩であり、最初に飛来するミサイルは爆雷。次のミサイルは天井都市から来るはずだが、天井に都市は無い(空に偽装している)ので、ミサイル発射機として水上艦船を空に飛ばしただけである。また、宇宙艦でもない水上艦船が空中に浮かぶのは不気味でもある。ミサイルにより横須賀の市街地が炎上している描写は、天井都市からのミサイルでガミラスの地表の都市が崩壊していく描写を暗に示している。
- 第 5 章は第四稿からの追加であるが、とても良い結末を思いついたので書き足したものである。エピローグは古代と相原の結末そのものであるが、第 5 章は宇宙戦艦ヤマトの結末である。古代らの物語は完結するが、ヤマトの物語は完結しないという趣旨の表現である。

## 遠野秋彦作品宣伝 2014/7/6 版

### 人造人魚【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00L9D496S/>

コジフ商会のキア・コジフは姉の代理で商談をまとめてきた。しかし、正体不明の MMM という商品が含まれていることに不信を感じた。そして商談の帰路に嵐に巻き込まれた。濁流のクライン川にちらりと見えた人魚はいったい何か。そして、キアは女装のメイドに招かれるままにエム・エムエ幻想国のズイン科学侯爵の屋敷に立ち寄った。だが、その屋敷こそが謎の商品 MMM の製造場所であった。はたして、こっそり製造されている MMM の正体とは人魚なのか。誰が何のために人魚を求めるのか。そして、河に中に見えた人魚の正体は？ 屋敷の入口にある肖像画の主であるゾ・フィーネという女性はどこに消えたのか？ 謎が謎を呼ぶエロティック幻想物語。

そして、屋敷の謎を解いたキアが選ぶ驚きの選択とは？

君の五感と股間を刺激する！

### コードネームはサターン V【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L5L4Q2G>

謎を提示するミステリアス小説。解くのは君だ！

独身中年男を心配する親からの依頼で、一人暮らしのダメダメ変態マニア男、佐藤有紀を監視する探偵の鞍馬七郎の物語。

そして、高級マンションで優雅に暮らす佐藤有紀が、セーラーレオタードで美少女戦士に変身して人知れず侵略者と戦うサターン V の物語。

どちらの物語が事実なのか。はたして、佐藤有紀の正体はダメダメ変態マニア男なのか、侵略者と戦うスーパーヒロインなのか。

謎の女、SOS のナナコの正体は、探偵鞍馬七郎の変装なのか。それとも、佐藤有紀をスカウトに来た銀河連邦の宇宙警察機動軍なのか。

矛盾をはらんだ物語が読者を迷宮に誘う。

真実はどこにあるのか。

結論は本文のどこかに書き込まれているぞ。

それを探す冒険物語の第3の主人公は読者の君だ!

### ミルクボーイ【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L9D48WI>

世界は核のスイッチを持つ巨大な9人の赤ん坊に支配されていた。

そして、彼らに飲ませるため、教室で搾乳する少女がいた。だがクラスメートは彼女に無理解だった。丹生川タクミは彼女を守るために立ち上がった。

ところが、支配者の1人、ホモ疑惑がある七試が男ミルクを所望したことで、話は急転する。タクミも男ミルクを下半身から搾乳される立場になった。

授乳特選隊に入隊したタクミは驚愕の事実を知る。それまで女性隊員しかいなかった極東支部には、女性用の制服しなかったのだ。似合わない女性用制服を着て七試と面会するタクミ。しかし、七試はそれを喜んだ。

はたして、七試はホモなのか?

そもそも、巨大な赤ん坊ベイビーズとは何か?

テロリストに襲撃され、配下のスタッフを多数殺された七試は、怒りに狂っておしゃぶりに偽装した核のスイッチを押した。

はたして、世界は9人の赤ん坊の気まぐれで滅びるのか?

人類は生き延びることができるか?

結末を予測不能の幻想未来冒険譚が始まる!

### リバーシブル【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRVN2>

フォッカーD21で始まり Yak-3で終わるアンドロギュノスの物語。両性具有のセクシーなレースクイーンが、君を妖しく誘惑する。学園祭で模型飛行機を展示していると、ヨーロッパのマイナー機を展示している主人公に興味を示す美女。なぜ、ゴーカートレースの事故の原因を調べてはいけないのか。研究室に出入りする美少女大学生を SM ホテルに連れ込む教授は善人が大悪党なのか。愛する女性の淫らな光景を見ることしか許されない最悪のゲームに主人公は勝利できるのか!

NTR 成分もあるよ!

### リ・バース・リバーシブル【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRZ56>

A-1 スカイレーダーで始まり、F9F パンサーで終わるアンドロギュノスの物語。両性具有の女子大生が、一家を襲う難事件に身体を張って立ち向かう。父親の女装ホモ疑惑を必死に解消したと思うと、次は母親の失踪が待っていた。熟女天然ふたなり AV 女優としてネットで晒し者にされる母親は、本当に自ら望んでそうなったのか、それとも連絡の電子メールは母親を装った偽造なのか! アンドロギュノスから生まれたアンドロギュノスの娘が、全ての謎に立ち向かう。

リバーシブルで広げた風呂敷を畳む完結編! これを読まずにリバーシブルは終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ!)

### 異説太平洋戦争・美少女艦隊波高し!【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00FMWSBFW>

異世界に転生した主人公は少女の姿になり、帝国女子海軍長官の美少女山本に拾われ、山口と名を変えてイギリスで近代化改装を終えた戦艦比叡受領に向かう。だが、比叡の前には戦艦ビスマルクが立ちふさがる。山口は、大英帝国海軍すら手に余すビスマルクを倒せるのか! そして、日本に帰国した山口を待っていたのは、帝国の女子海軍人気に対抗して機動部隊の指揮官に就任した巨乳の美少女乳牛ハルゼーだった。帝国海軍の主力戦艦群を壊滅させた乳牛ハルゼーに、山本、山口以下の女子海軍はどう立ち向かうのか!

艦これブームは遅すぎる。美少女+軍艦ものの元祖、1998年に書かれた伝説の小説のリバイバル再刊!

全ての物語に終止符を打つ最終英雄ドリアン・イルザン【Kindle 版

## (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00EN7GIPC>

石屋の武器店の息子、ドリアン・イルザンは、世界の外から来たという宇宙船を偶然見つける。宇宙に乗り出したドリアンは、太古の世界が作り出した神にも等しい力を持つ2つの人形、アリシアと悦人形の対立に巻き込まれていく。アリシアはドリアンに不思議な力を持つレンズを授け、全ての物語に終止符を打てと言われるが、見たことも聞いたこともない物語の数々を前にドリアンは途方に暮れる。アリシアと悦人形による神々の最終戦争をアリシアの最終英雄ドリアンはどう決着させるのか。そして、悦人形の最終英雄、ウォー・ゼロはドリアンの敵なのか。伝説の宇宙船スカイラクはドリアンをどこに連れて行くのか。超銀河団の泡構造の向こう側に進出した超大陸級戦艦ユーラメリカは大空洞の果てに何を見つめるのか。

これは最後に読む物語ではない。

全ての始まりの物語なのだ。

読むならここから始めよ!

## ラト姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCNHE>

太古の失われた文明の時代、みなしご少女ラト・ワーゲルは小国ラルナの姫君であるミラ姫に見初められて、妹として宮廷に入る。だが、レズビアンの人として困われると思ったラトは予想に反する過酷な王宮の現実を知る。虚実の陰謀が飛び交う王宮で、ラトはミラ姫の知恵袋として破格の活躍を示す。しかし、宇宙機動遊撃軍キダシへの参加要請が届いたことで、予想もしない方向に事態は進んでいく。ラトは、宇宙艦隊の指揮官として人類を滅ぼそうとする宇宙生物ハドと立ち向かうことになる。

そして侍女志望のマイアが適性試験で見せられた異星生物の触手に身体を犯されるラト姫の姿は真実なのか!

そして、敵に掴まり、淫らな宣撫映像に自ら望んで出演するラト姫の真



意とはいったい!?

## セラ姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCWD4>

普通的女子高校生の星良は、ラト姫の娘、セラ姫として謎の少年から声を掛けられる。しかし、星良は宇宙から来たラト姫などと言う嘘くさいトンデモとは縁が無かった。ところが、詳細を確認しようと図書室で調べ始めると、ラト姫関連の資料が何も残っていなかった。マスコミであれだけ騒がれたはずの情報が何も残っていないのはおかしい。星良の真実への探求が始まる。

そして、星良の破滅願望を満たす転校生の出現。星良を校内娼婦に仕立て、破滅へと導く少年。少年はハドの探査プローブと名乗るが、ハドとは人類を滅ぼそうとする宇宙生物の名前ではなかったのか。そして、喜んでその破滅に身を委ねる星良。はたして、破滅願望を持つ星良の破綻した性格はどこから来たのか。父か、母か、それとも……。

ラト姫物語で広げた風呂敷を畳む完結編! これを読まずにラト姫物語は終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ!)

## 魔女アーデラの事件簿【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DIQUFFS>

剣と魔法のファンタジー世界で起こる奇怪な事件。王宮から盗まれた等身大美少女フィギュアを奪還すべく、王宮シーフのマールは調査を開始する。しかし、彼に付けられた相棒は、どんな男でも関係無く喜んで抱かれる淫らな美少女魔女アーデラ。はたして、二人は事件の真相を暴き、犯人を捕まえられるのか? だが、アーデラには見た目通りではない重大な秘密があった。そして、マール自身にも隠された重大な秘密があったのだ。はたしてアーデラは GM なのか。けして自ら語らないマールとアーサー王の

秘密とは何か。互いの秘密を知った時、二人は最強のタッグになる。

モンスター討伐がほとんど出てこないファンタジー推理小説!

君は腕力では無く知力を試される!

## ファンタジー勇者伝説

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00CWZTU5W>

君は知っているか! 勇者の伝説を! このファンタジー世界で辺境の魔王から姫を救った勇者の伝説を!

だが、王宮侍女のジーナは、その勇者の子孫ファッツ・ブレイブと知り合うことで、真実を知ってしまう。次々と明かされる驚愕の真相。辺境の魔王など存在してはいなかったのだ。そして、伝説の勇者とは、魔王と倒したのではなく、幼なじみの侍女を追いかけて隣国に旅した者に過ぎなかった。

勇者の伝説そのものが単なる虚構、つまりファンタジーに過ぎなかったのだ!

ジーナは叫ぶ。

一代で成り上がった新興商人の娘をなめるな!

彼女は、根性で古き因習に立ち向かい、隣国に連れ去られたプリマ姫を奪還できるのか!

イーネマス! 【全編(完結)PDF版】

[http://www.dlsite.com/maniawork/=product\\_id/RJ039225.html](http://www.dlsite.com/maniawork/=product_id/RJ039225.html)

イーネマス! 【立ち読み版(全16章のうち第5章まで。無料)PDF版】

<http://ura.autumn.org/Content.modf?id=20080428000000>

若くして死んだ有望な者達を、未来の火星の地底世界に転生させる来人制度で、同人誌即売会専用バスで死んだオタク達が転生させられた。自ら望んだ新しい身体をもらえるとあって、ある者は格闘ゲームのキャラの身体をもらい、ある者は美少女戦士の身体をもらった。しかし、浅岳はあくまで自分のありのままの身体で若返りだけを望んだ。そして人気同人漫画

家の沢渡勇太は自分でデザインした究極の美少女に身体を得ることを選んだ。二人は、火星の地底世界イーネマスに出て行くが、あっさりと人身売買される対象になり、バラバラに売られていく。

そして、浅岳が出会ったのは孤独な幼い姫君だった。

そして、沢渡が出会ったのは、奥行きを把握させない謎の犯罪組織の幹部だった。

二人は、それぞれの立場で、イーネマスを壊してしまおうと画策する破壊趣味者と戦うことを決意する。

同時進行で、幼い姫君とのストイックなラブストーリーと、あらゆる快楽に浸る淫らな TS 美少女ストーリーが同時に進行する。

はたして、浅岳は自力で奴隷の身分を脱すことができるのか!?

はたして、沢渡は性奴隷からお屋敷のメイドを経て大商人の奥様に成り上がれるのか!?

二人が再会する日ははたして来るのか!?

オタクの夢、最強の格闘キャラの身体を手に入れた男は火星の地底世界で成り上がることができるのか!

TS 成分、女装成分もあるよ。

宣伝終わり